

2 0 1 5 . 3

前橋市教育委員会

元総社蒼海遺跡群(91) 元総社蒼海遺跡群(95) 元総社蒼海遺跡群(102)

前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

元総社蒼海遺跡群 (91)

元総社蒼海遺跡群 (95)

元総社蒼海遺跡群 (102)

前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書



元総社蒼海遺跡群 (91) 3号住居跡出土 小金銅仏

2 0 1 5 . 3

前橋市教育委員会



元總社舊海道跡群（95）より南を望む
左上の緑が築成している箇所は總社神社になる。總社神社に隣接して元總社小学校があり、校庭からは、2棟の掘立柱建物跡・南北方向の大溝などが調査されている。本遺跡から校庭までは直線距離で350mと思いのほか近い。本遺跡のさらに南側には推定興山遺が先行する。

卷頭図版2



元總社蒼海遺跡群（91）3号住居跡出土 小金銅仏



元總社蒼海遺跡群（95）9号井戸跡出土遺物

はじめに

前橋市は、関東平野の北西部に位置し、名山赤城山を背に利根川や広瀬川が市街地を貫流する、四季折々の風情に溢れる県都です。市域は豊かな自然環境に恵まれ、2万年前から人々が生活を始めました。そのため市内のいたる所から、人々の息吹を感じられる遺跡や史跡、多くの歴史遺産が存在します。

古代において前橋台地には、広大に分布する穀倉地帯を控え、前橋天神山古墳などの初期古墳をはじめ、王山古墳・天川二子山古墳といった首長墓が連縦と築かれ、上毛野国を中心として栄えました。また、続く律令時代になってからは總社・元總社地区に山王廃寺、国分僧寺、国分尼寺、国府など上野国の中核をなす施設が次々に造られました。

中世になると、戦国武将の長尾氏、上杉氏、武田氏、北条氏が鎧をけずった地として知られ、近世においては、譜代大名の酒井氏、松平氏が居城した関東三名城の一つに数えられる厩橋城が築されました。

やがて近代になると、生糸の大生産地であり、横浜港から前橋シルクの名前で遠く海外に輸出され日本の発展の一翼を担いました。

今回、報告書を上梓する元總社蒼海遺跡群（91）、（95）、（102）は古代上野国の中核地域の調査であり、上野国府推定地域にも近接することから、調査成果に多くの注目を集めております。今回の調査では、国府施設そのものに迫る遺構の検出には至りませんでしたが、国府に関連すると考えられる施設跡や溝が確認され、溝からは墨書き土器等が出土しました。また、古墳時代から平安時代の竪穴住居跡を中心とする集落跡なども検出されています。

今は一本の糸に過ぎない調査成果も織り上げて行けば、国府や国府のまちの姿を再現できるものと考えております。

残念ながら、現状のままでの保存が無理なため、記録保存という形になりましたが、今後、地域の歴史・前橋の歴史を解明する上で、貴重な資料を得ることができました。

最後になりましたが、この調査事業を円滑に進められたのは、関係機関や各方面的ご配慮の結果といえます。また、極暑、極寒の中、直接調査に携わってくださった担当者・作業員のみなさんに厚くお礼申しあげます。

本報告書が斯学の発展に少しでも寄与できれば幸いに存じます。

平成27年3月

前橋市教育委員会

教育長 佐藤博之

例　　言

1. 本報告書は、前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う元総社蒼海遺跡群（91）、（95）、（102）発掘調査報告書である。
2. 調査主体は、前橋市教育委員会である。
3. 発掘調査の要項は次のとおりである。

調　　査　　場　　所	群馬県前橋市総社町3114番地2　ほか
発　　掘　　調　　査　　期　　間	平成26年5月23日～平成27年1月23日
整　　理　・　報　　告　　書　　作　　成　　期　　間	平成26年1月5日～平成27年3月20日
発　　掘　・　整　　理　　担　　当　　者	福田 貴之・並木 史一（埋蔵文化財係）
4. 本書の原稿執筆・編集は福田・並木が行った。
5. 発掘調査・整理作業にかかわった方々は次のとおりである。

片山武一、神山早苗、齋藤簡詳、関根その子、高木勝美、高澤京子、高橋民雄、多田ひさ子、中澤光江、仲野正人、中林美智子、奈良精一、平林しのぶ、茂木昭弘、山川明男、山田哲也
6. 発掘調査にあたり元総社蒼海遺跡群（91）より出土した小金銅仏のX線写真撮影およびクリーニングに関しては、（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 関邦一氏に多大なる御支援をいただいた。
7. 調査および報告書作成にあたっては下記の諸機関・諸氏の御教示・御指導をいただいた。

群馬県教育委員会文化財保護課、（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
石田真、石守晃、出浦崇、井上巖、井上唯雄、梅澤重昭、大橋泰夫、川道亨、神谷佳明、桜岡正信、須田勉、大工原豊、高島英之、滝沢匡、田口一郎、田中広明、千葉博俊、角田真也、能登健、橋本淳、林部均、深澤敦仁、前沢和之、松島榮治、松田猛、右島和夫、水谷貴之、横澤真一
8. 発掘調査で出土した遺物は、前橋市教育委員会文化財保護課で保管されている。

凡　　例

1. 採図中に使用した北は、座標北である。
2. 採図に国土交通省国土地理院発行の1：200,000地形図（宇都宮、長野）、1：25,000地形図（前橋）、1：6,000前橋市現形図を使用した。
3. 遺跡の略称は、26A188、26A190、26A198である。
4. 道構及び遺構施設の略称は、次のとおりである。

H…古墳・奈良・平安時代の堅穴住居跡　I…井戸跡　O…落ち込み　W…溝跡　P…ピット・貯蔵穴
5. 道構・遺物の実測図の縮尺は、原則的に次のとおりである。その他、各図スケールを参照されたい。

道構	全体図…1/200、住居跡・堅穴状遺構・溝跡・土坑・ピット…1/60、竈・炉断面図…1/30
遺物	土器…1/3、1/4、石器・石製品・土製品…2/3、1/3、鉄器・鉄製品…1/2、瓦…1/6
6. 計測値については、（　）は現存値、〔　〕は復元値を表す。
7. セクション注記と遺物観察表の色調について新版標準土色帳(小山・竹原1967)を基準とした。
8. 道構平面図の-----は推定線を表す。
9. スクリーントーンの使用は、基本的に次のとおりである。

道構平面図	焼土…	粘土…
道構断面図	構築面…	
遺物実測図	須恵器断面…	灰釉陶器断面…

炭化物…　煤・炭化物付着…　灰釉陶器表面…

タール状付着物・使用面・磨耗面・墨…

10. 主な火山降下物等の略称と年代は次のとおりである。

As-B（浅間B軽石：供給火山・浅間山、1108年降下）、Hr-FP（榛名二ヶ岳伊香保テフラ：供給火山・榛名山、6世紀中葉降下）、Hr-FA（榛名二ヶ岳洪川テフラ：供給火山・榛名山、6世紀初頭降下）、As-C（浅間C軽石：供給火山・浅間山、3世紀末葉降下）

目 次

はじめに.....	i
I 調査に至る経緯.....	1
II 遺跡の位置と環境	
1 遺跡の立地.....	1
2 歴史的環境.....	1
III 調査方針と経過	
1 調査方針.....	7
2 調査経過.....	7
IV 基本層序.....	8
V 遺構と遺物	
1 元総社蒼海遺跡群 (91)	9
(1) 堅穴住居跡	
(2) 溝跡	
(3) 土坑、井戸跡、ビット	
2 元総社蒼海遺跡群 (95)	22
(1) 堅穴住居跡	
(2) 握立柱建物跡	
(3) 溝跡	
(4) 土坑、井戸跡、ビット、性格不明遺構	
3 元総社蒼海遺跡群 (102)	51
(1) 溝跡	
(2) 土坑、井戸跡、落ち込み	
VI まとめ.....	55
付編	
1 元総社蒼海遺跡群 (91) 出土小金銅仏の化学分析	
2 元総社蒼海遺跡群 (95) 出土炭化物の自然科学分析	

図 版

- 口絵 1 元総社蒼海遺跡群 (95) 調査区遠景
 2 元総社蒼海遺跡群 (91) 3号住居跡出土 小金銅仏
 3 元総社蒼海遺跡群 (95) 出土 9号井戸跡出土 遺物
- P L. 1 (91) 調査区全景、1～3号住居跡、小金銅仏
 出土状況
 2 (91) 4～7号住居跡、1号土坑
 3 (95) 調査区全景、2・3・6号住居跡
 4 (95) 7～10号住居跡、1～3号溝跡
 5 (95) 1号・2号掘立柱建物跡
 6 (95) 1号・2号掘立柱建物跡
 7 (95) 土坑、井戸跡、性格不明遺構
 8 (102) 調査区全景、落ち込み、溝跡、井戸跡
 9 (91) 出土遺物
 10 (95) 出土遺物
 11 (95) (102) 出土遺物

挿 図

- Fig. 1 元総社蒼海遺跡群位置図
 2 周辺遺跡図
 3 調査区の位置とグリッド設定図
 4 基本層序
 5 元総社蒼海遺跡群 (91) 全体図
 6 元総社蒼海遺跡群 (91) 1～3号住居跡
 7 元総社蒼海遺跡群 (91) 4号住居跡、4・5・8号土坑
 8 元総社蒼海遺跡群 (91) 5号住居跡
 9 元総社蒼海遺跡群 (91) 6・7号住居跡、1号溝跡
 10 元総社蒼海遺跡群 (91) 2号溝跡、1～3・7号土坑、1号井戸跡
 11 元総社蒼海遺跡群 (91) 出土遺物①
 12 元総社蒼海遺跡群 (91) 出土遺物②
 13 元総社蒼海遺跡群 (95) 全体図
 14 元総社蒼海遺跡群 (95) 2号住居跡
 15 元総社蒼海遺跡群 (95) 3・8号住居跡
 16 元総社蒼海遺跡群 (95) 6・7号住居跡
 17 元総社蒼海遺跡群 (95) 9～11号住居跡
 18 元総社蒼海遺跡群 (95) 1号・2号掘立柱建物跡
 19 元総社蒼海遺跡群 (95) 1号・2号掘立柱建物跡
 20 元総社蒼海遺跡群 (95) 1号溝跡、土坑、井戸跡、柱穴
 21 元総社蒼海遺跡群 (95) 1号～3号溝跡
 22 元総社蒼海遺跡群 (95) 9号井戸跡、2号・3号土坑、性格不明遺構
 23 元総社蒼海遺跡群 (95) 土坑、柱穴

- 24 元総社蒼海遺跡群 (95) 土坑、柱穴、井戸跡
 25 元総社蒼海遺跡群 (95) 出土遺物①
 26 元総社蒼海遺跡群 (95) 出土遺物②
 27 元総社蒼海遺跡群 (95) 出土遺物③
 28 元総社蒼海遺跡群 (95) 出土遺物④
 29 元総社蒼海遺跡群 (95) 出土遺物⑤
 30 元総社蒼海遺跡群 (102) 全体図、溝跡、土坑、井戸跡、落ち込み
 31 元総社蒼海遺跡群 (102) 溝跡、井戸跡、出土遺物
 32 元総社蒼海遺跡群 (58) 1号溝跡
 33 元総社蒼海遺跡群 (9)・(10) 遺構配置図
 34 元総社蒼海遺跡群 (95) 9号井戸跡 坍分類
 35 元総社蒼海遺跡群 (95) 9号井戸跡 様分類
 36 元総社蒼海遺跡群 (91) 小金銅仏 素材分析
 37 元総社蒼海遺跡群 (91) 小金銅仏 形態分析①
 38 元総社蒼海遺跡群 (91) 小金銅仏 形態分析②
 39 元総社蒼海遺跡群 (95) 高台杔 炭化物付着状況
 40 元総社蒼海遺跡群 (95) 炭化物跟微鏡写真①
 41 元総社蒼海遺跡群 (95) 炭化物跟微鏡写真②

表

- Tab. 1 元総社蒼海遺跡群周辺遺跡概要一覧表
 2 元総社蒼海遺跡群 (91) 出土遺物観察表
 3 元総社蒼海遺跡群 (91) 住居跡一覧表
 4 元総社蒼海遺跡群 (91) 土坑・ビット・井戸跡 計測表
 5 元総社蒼海遺跡群 (95) 掘立柱建物跡 柱掘り方 計測表
 6 元総社蒼海遺跡群 (95) ビット 計測表
 7 元総社蒼海遺跡群 (95) 住居跡一覧表
 8 元総社蒼海遺跡群 (95) 溝跡 計測表
 9 元総社蒼海遺跡群 (95) 土坑、井戸跡 計測表
 10 元総社蒼海遺跡群 (95) 出土遺物観察表
 11 元総社蒼海遺跡群 (102) 出土遺物観察表
 12 県内出土の小金銅仏 (奈良・平安期)
 13 元総社蒼海遺跡群 (95) 9号井戸跡出土量

I 調査に至る経緯

本発掘調査は、前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴い実施され、16年目にあたる。本調査地は、周辺で埋蔵文化財調査が長年にわたって行われていることから、遺跡地であることが確認されている。

平成26年5月2日付けで、前橋市長 山本 龍より前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の依頼が前橋市教育委員会に提出された。前橋市教育委員会では実施について協議を行い、これを受諾し、平成26年5月7日付けで、調査依頼者である前橋市長 山本 龍に対し前橋市教育委員会による発掘調査を実施する旨の回答を行った。これを受け平成26年5月23日から現地での発掘調査を開始するに至った。

遺跡名称「元総社蒼海遺跡群(91)」(遺跡コード:26A188)、「元総社蒼海遺跡群(95)」(遺跡コード:26A190)、「元総社蒼海遺跡群(102)」(遺跡コード:26A198)の「元総社蒼海遺跡群」は区画整理事業名を採用し、数字の「(91)・(95)・(102)」は過年度に発掘調査を実施した遺跡と区別するために付したものである。なお、元総社蒼海遺跡群(95)については平成27年7月6日に工事が行なわれていることを確認し、翌7月7日に工事担当課と現地で遺跡の保存協議を行なった。その結果、工事を一旦中止して、発掘調査を実施し記録保存の措置を執ることになった。その後、工事計画の進捗にともない、調査範囲は拡張、再拡張することになったが、工事担当課と協議を重ね、工事計画スケジュールの調整等の協力を得て、十分な調査期間のもと、調査を完了することができた。

II 遺跡の位置と環境

1 遺跡の立地

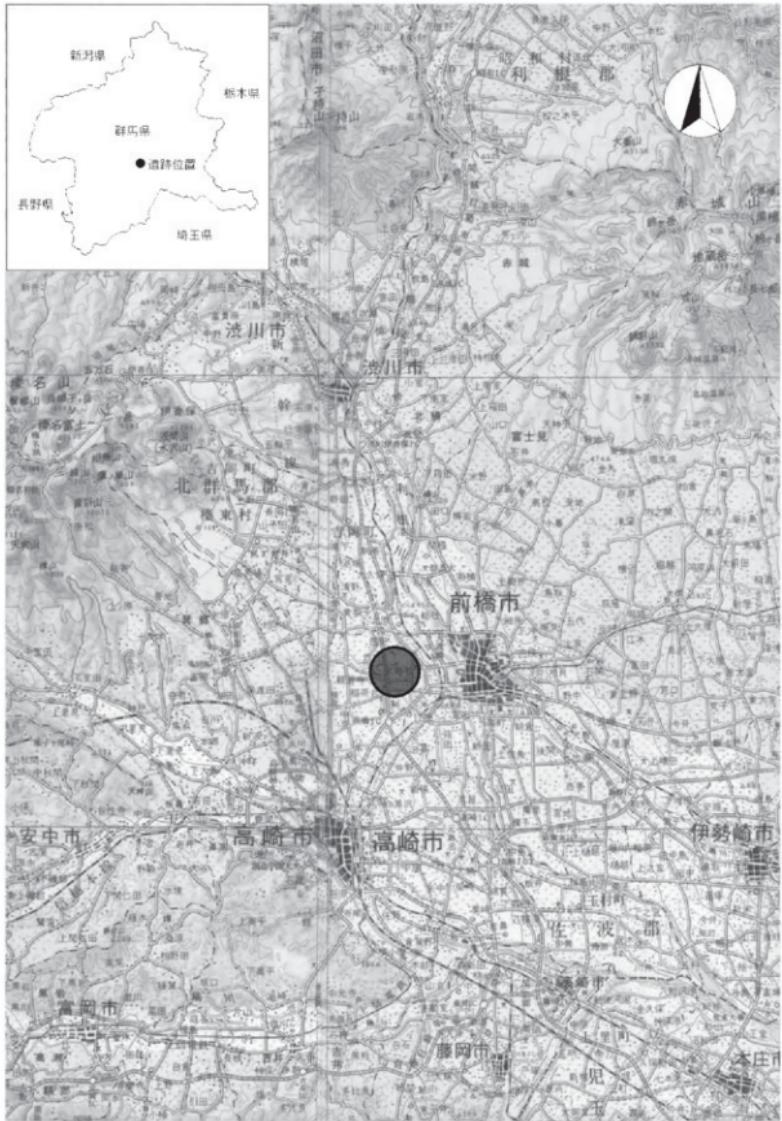
前橋市は、利根川が赤城・榛名の両火山の裾を経て関東平野を望むところに位置し、地形・地質の特徴から、北東部の赤城火山斜面、南西部の前橋台地利根川右岸、南部から南西部にかけての前橋台地の利根川左岸、東部の広瀬川低地帯という4つの地域に分けられる。

本遺跡の立地する前橋台地は、約24,000年前の浅間山噴火によって引き起こされた火山泥流堆積物とそれを被覆するローム層（水成）から成り立っている。台地の東部は、広瀬川低地帯と直線的な崖で画されていて、台地の中央には現利根川が貫流している。現在の利根川の流路は中世以降のもので、旧利根川は現在の広瀬川流域と推定される。台地の西部には榛名山麓の相馬ヶ原扇状地が広がり、榛名山を源とする中小河川が利根川に向かって流下し、台地面を刻んで細長い微高地を作り上げている。總社・元総社付近の桑谷川や牛池川は、微高地との比高3m~5mを測り、段丘崖上は高燥な台地で、桑畠を主とした畑地として利用してきた。

本遺跡は、前橋市街地から利根川を隔て、西へ約3kmの地点、前橋市總社町總社、元総社町地内に所在している。南東へ約1kmの所に上野国總社神社があり、すぐ西には関越自動車道が南北に走っている。さらに、遺跡地の南側には国道17号線、県道足門・前橋線が東西に、東側には主要地方道前橋・安中・富岡線が南北に走り、これらの幹線道路を中心にオフィスビルや大規模小売店が進出している。本遺跡はこれらの幹線道路から奥に入ったところに位置し、周囲には田畠が多い住宅地という静かで落ち着いた環境である。

2 歴史的環境

本遺跡地周辺には、古墳時代後期から終末までの上野地域と中央政権との関連をうかがわせる總社古墳群と山王庵寺、古代の中心地であった上野国府、さらに、中世には長尾氏により国府の堀削を利用し築かれたとされる蒼海城があり、歴史的環境に優れている。周辺の埋蔵文化財発掘調査によって、これまで連絡と続いてきた歴史を物語る多くの新しい知見が集積されている。



1 : 200,000

Fig. 1 元絶社蒼海遺跡群位置図

縄文時代の遺跡としては、前期・中期の集落跡が検出された産業道路東・西遺跡や上野国分僧寺・尼寺中間地域が筆頭に挙げられ、縄文文化を考える上で重要な資料といえる。

弥生時代の調査例は少ない。当時の稲作の様子を示す水田・集落跡等が検出された日高遺跡、後期住居跡が検出された上野国分僧寺・尼寺中間地域や桜ヶ丘遺跡、下東西遺跡等に散見するだけである。

古墳時代の遺跡としては、まず本遺跡の北東に広がる総社古墳群が挙げられる。総社古墳群を代表するものには、前方後円墳である遠見山古墳、川原石を用いた積石塚である王山古墳、前方部と後円部にそれぞれ横穴式両袖型の石室が築造された前方後円墳の総社二子山古墳、両袖型横穴式石室をもつ方墳の愛宕山古墳、県内古墳最終末期と考えられれた仏教文化の影響を強く受けた方墳の宝塔山古墳があり、この地域と中央との関係を考えるうえで重要な意味をもつ古墳群といえる。また、宝塔山古墳の南西500mには白鳳期の建立と考えられる山王庵寺跡(放光寺)がある。さらにこの寺の塔心礎や石製鷲尾、根巻石等の石造物群は、宝塔山古墳の石棺や蛇穴山古墳の石室と同系統の石造技術を駆使して加工されている。これらのことから、この寺は上野地域を治めていた「上毛野氏」の氏寺であり、この古墳群には「上毛野氏」一族が葬られているとも考えられている。これらから、この地が「車評」の中心地として、仏教文化が古墳文化と併存しながら機能していた様子が窺える。なお、平成18年度から5カ年計画で「山王庵寺跡範囲内容確認調査」が実施され、平成18年度では「講堂」の版築基壇や「回廊」の北東根石、平成19年度では「金堂」の版築基壇や「回廊」の西側根石が、平成20年度では「塔」の基壇とその周辺部が確認された。平成21年度では「推定中門」と「西側南側回廊」の周辺部が確認された。

奈良・平安時代になると、上野国府、国分僧寺、国分尼寺の建設と相まって、本地域は古代の政治的・経済的・文化的中心地としての様相を呈してくる。律令期における国司の政治活動拠点で地方を統治する機能をもつ国府は、元総社地区に置かれたとされる。

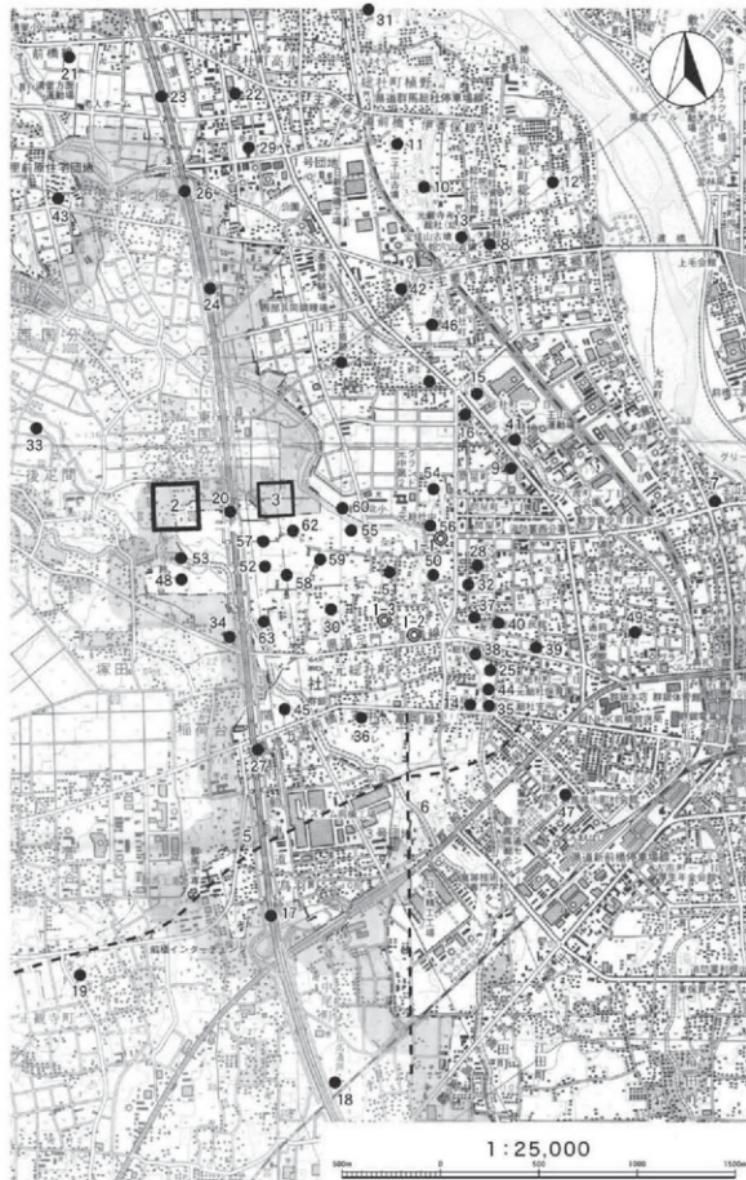
国府に関連する遺跡には、県下最大級の掘立柱建物跡が検出された元総社小学校校庭遺跡や「國厨」「曹司」「國」「邑厨」等と書かれた墨書き土器や人形が出土した元総社寺田遺跡などがある。また、国府域の推定を可能にした大規模な東西方向の溝跡が検出された閑泉種遺跡や元総社蒼海遺跡群(7)(9)(10)と南北方向の溝跡が検出された元総社明神遺跡の調査成果により、国府域の東北外郭線が想定されるに至った。さらに、周辺遺跡からは、官人が用いたと考えられる円面鏡、巡方(腰帯具)、縁舳陶器も出土し、国府について考えるうえで貴重な資料となっている。

国分僧寺は大正15年に国指定史跡となり、昭和40年代から部分的ながら調査が進められるようになった。本格的な発掘調査は昭和55年12月から始まり、主要伽藍の礎石、築垣、塀等が確認されている。さらに、国分尼寺の調査では、昭和44・45年に推定中軸線上のトレント調査が行われ伽藍配置が推定できるようになった。さらに平成12年に前橋市埋蔵文化財発掘調査団で南辺の寺域確認調査を行い、東南隅と南西隅の築垣、それと平行する溝跡や道路状遺構が確認された。国分僧寺、国分尼寺周辺では、関越自動車道建設に伴う発掘調査が行われ、上野国分僧寺、尼寺中間地域では、当時の大規模な集落跡や掘立柱建物群が検出されている。

また、群馬町(現高崎市)の調査等により、本遺跡から約1.5km南の地点にN-64°-E方向の東山道(国府ルート)があることが推定されている。推定日高道は、日高遺跡で検出された幅約4.5mの道路状遺構を国府方面へ延長したものである。これらは、当時の交通網を物語る重要な遺構である。

中世に至り、永享元年(1429)、上野国守護代の長尾氏によって古代国府跡に築かれた蒼海城は城郭としての機能を有し県内でも最古級に位置づけられる。しかも、県下最初の城下町を形成したと考えられている。蒼海城の繩張りは国府と関係が深く、現在の本地域の主要道路はこの繩張りに沿って造られていると推測される。

このように歴史的に重要な役割を果たしてきた総社・元総社地区であるが、その中でも上野国府が所在したと推定される元総社地区は注目される地域の一つである。元総社蒼海土地区画整理事業に伴い、平成11年より継続的に本地域の発掘調査が行われている。今後、これら調査の進捗によって、上野国府や蒼海城が解明されていくことを期待する。



Tab. 1 元總社蒼海遺跡群周辺遺跡概要一覧表

番号	遺跡名	調査年度
1-1	元總社蒼海遺跡群 (91)	2014
1-2	元總社蒼海遺跡群 (95)	2014
1-3	元總社蒼海遺跡群 (102)	2014
2	上野国分寺跡 (駁教委)	1980~88
3	上野国分尼寺跡	(1999)
4	山王廬寺跡	(1974)
5	東山道 (推定)	
6	日高道 (推定)	
7	王山古墳	1972
8	蛇穴山古墳	1975
9	福荷山古墳	1988
10	愛宕山古墳	1996
11	總社二子山古墳	未調査
12	遠見山古墳	未調査
13	宝塔山古墳	未調査
14	元總社小学校校庭遺跡	1962
15	産業道路東遺跡	1966
16	産業道路西遺跡	
17	中尾遺跡 (事業団)	1976
18	日高遺跡 (事業団)	1977
19	正觀寺遺跡 I~IV (高崎市)	1979~81
20	上野国分僧寺・尼寺中間地 (事業団)	1980~83
21	清里甫那遺跡群・Ⅲ	1980
22	中鳥遺跡	1980
23	下東西遺跡 (事業団)	1980~84
	国分境遺跡 (事業団)	1990
24	国分境Ⅱ遺跡	1991
	国分境Ⅲ遺跡 (群馬町)	1991
25	元總社明神遺跡 I~X Ⅲ	1982~96
26	北原遺跡 (群馬町)	1982
27	鳥羽遺跡 (事業団)	1978~83
28	閑泉桶遺跡	1983
29	柿木遺跡・II 遺跡	1983, 88
30	草作遺跡	1984
31	桜ヶ丘遺跡 總社桜ヶ丘遺跡・II 遺跡	1985, 87
32	閑泉桶南遺跡	1985
33	後莊間遺跡 I~III (群馬町)	1985~87
34	塙田村東遺跡 (群馬町)	1985
35	寺田遺跡	1986
36	天神遺跡・II 遺跡	1986, 88
37	屋敷遺跡・II 遺跡	1986, 95
38	大友郡敷 II・III 遺跡	1987
39	坂越遺跡	1987
40	坂越 II 遺跡	1988
41	昌楽寺廻向遺跡・II 遺跡	1988
42	村東遺跡	1988
43	熊野谷遺跡	1988
43	熊野谷 II・III 遺跡	1989
44	元總社寺田遺跡 I~III (事業団)	1988~91
45	弥勒遺跡・II 遺跡	1989, 95
46	大屋敷遺跡 I~VI	1992~2000
47	元總社福樂遺跡	1993
48	上野国分寺跡遺跡	1996

番号	遺跡名	調査年度
49	大友宅地遺跡	1998
	總社閑泉明神北遺跡	1999
	總社閑泉明神北Ⅱ遺跡	2001
50	總社閑泉明神北Ⅳ遺跡	2004
	元總社蒼海遺跡群 (7)	2005
	元總社蒼海遺跡群 (9)~(10)	2006
51	元總社宅地遺跡 1~23トレンチ	2000
52	元總社小見遺跡	2000
53	元總社西川遺跡 (事業団)	2000
54	總社甲福荷塚大道西遺跡	2001
	總社甲福荷塚大道西Ⅱ遺跡	2001
	元總社小見内Ⅲ遺跡	2001
55	元總社小見内VI遺跡	2003
	元總社蒼海遺跡群 (12)	2006
	總社甲福荷塚大道西Ⅲ遺跡	2002
56	總社閑泉明神北Ⅲ遺跡	2002
	總社甲福荷塚大道西Ⅳ遺跡	2003
	元總社小見Ⅲ遺跡	2002
	元總社小見Ⅳ~V 遺跡	2003
	元總社小見Ⅴ~VI 遺跡	2004
	元總社蒼海遺跡群 (4)	2005
57	元總社小見Ⅵ遺跡	2002
	元總社草作V 遺跡	2002
	元總社小見内V遺跡	2002
	元總社小見内VI遺跡	2003
58	元總社小見内IX~X 遺跡	2004
	元總社蒼海遺跡群 (2) (6)	2005
	元總社蒼海遺跡群 (11)	2006
60	元總社北川遺跡 (事業団)	2002~04
61	福荷塚東遺跡 (事業団)	2003
62	元總社小見内VI遺跡	2003
	元總社蒼海遺跡群 (1) (5)	2005
63	元總社蒼海遺跡群 (8)	2006

※ 調査年度の欄の（ ）は調査開始年度を表す。

※ 遺跡名の欄の（事業団）は（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団を表す。



Fig. 3 調査区の位置とグリッド設定図

III 調査方針と経過

1 調査方針

発掘調査を依頼された箇所は、前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴い新設される道路用地等である。調査面積は、元総社蒼海遺跡群（91）219m²、元総社蒼海遺跡群（95）942m²、元総社蒼海遺跡群（102）58m²、総調査面積は、1,219m²である。遺構番号は、遺跡ごとに個別に付番することとし、91-H-1号住居跡、95-H-1号住居跡のように、遺構の前に必ず遺跡番号を付すこととした。

グリッド座標については国家座標（日本測地系）X = +44000・Y = -72200を基点（X 0・Y 0）とする4mピッチのものを使用し、元総社蒼海遺跡群（91）においては、西から東へX275、276、277…、北から南へY106、107、108…と付番し、グリッド呼称は北西杭の名称を使用した。

元総社蒼海遺跡群（91）のX275・Y106の公共座標は以下のとおりである。

日本測地系	X = +43,576.000	Y = -71,100.000
緯度	36°23'24".57476	経度 139°02'26".44489
子午線収差角	2813".03	増大率 0.999962

調査方法については、表土掘削・遺構確認・方眼杭等設置・遺構掘下・遺構精查・測量・全景写真の手順で行うこととした。このうちの遺構確認については、基本的にAs-C軽石、Hr-FP軽石、As-B軽石が混入する土層を手がかりとした。

図面作成は、平板・簡易遺り方測量を用い、遺構平面図は原則として1/20、住居跡窓は1/10の縮尺で作成した。遺物については平面分布図を作成し、台帳に各種記録を記載しながら収納した。包含層の遺物はグリッド単位で収納し、重要遺物については分布図・遺物台帳の記載を行い収納した。

2 調査経過

現地調査は平成26年5月23日から平成27年1月23日まで行った。調査経過は下記のとおりである。

元総社蒼海遺跡群（91）…5月23日及び26日に重機による表土掘削を行った。検出された遺構は、堅穴住居跡が7軒、溝跡2条、土坑及び土抗墓6基、井戸1基である。なお、3軒重複しており10世紀代と考えられる3号住居から小金銅仏が出土している。6月18日に調査区全景写真を撮影し、6月20日に埋め戻しを行って調査終了となった。

元総社蒼海遺跡群（95）…造成工事が予定される本調査区において、7月8日から予備的な確認を行ったところ、掘立柱穴群が検出されたため、7月11日及び14日に重機による表土掘削を行い、本調査を開始した。遺構確認面の総社砂層までは、比較的浅く、とりわけ調査地南側においては浅く、遺構の残存状況は良好ではなかった。調査区中央部から古代の掘立柱建物2棟が、東側からは同時期の溝が検出された。工事計画の進行に伴い、8月1日及び4日には調査範囲を北側に拡張、8月18日及び20日には南側に拡張し、重機による表土掘削を行った。拡張部分を含め、掘立柱建物のほか、堅穴住居跡が8軒、溝跡3条、土坑3基、井戸9基が検出された。9月3日にラジコンヘリにより調査区全景の空中撮影を行い、5日に調査終了となった。

元総社蒼海遺跡群（102）…1月14日に重機による表土掘削を行った。遺構確認面の総社砂層まで浅く、検出された遺構は溝跡が3条、土抗1基、井戸2基などである。溝跡のうち1条は蒼海城間連の堀と思われる。1月23日に埋め戻しを行い調査終了となった。

現地での発掘調査は1月23日に全て終了したが、発掘調査期間終盤には、これと平行して整理作業に着手した。

文化財保護課三候房舎において、1月5日から1月13日にかけて遺物洗浄を行うとともに、文化財保護課総社庁舎において、出土遺物の接合・復元・実測、図面・写真等の整理、遺構計測及び報告書作成に伴う諸作業を行い、3月20日までに全ての作業を終了した。

IV 基本層序

各調査地点において、良好な堆積状況の確認できる場所を基本層序とした。遺構確認面は(91)がIV層上面、(95)はⅦ層上面、(102)はII層上面とした。(91)については古代の遺構を捉えることに努め、調査を進めたが、遺構確認が困難な場合はV層上面まで人力で掘り下げて調査を進めた。(91)は浅間C軽石を含む黒褐色土が安定して堆積しているが、(95)は部分的な堆積、(102)では全く見受けられなかった。(95)のⅧ層は凝灰岩質であり、周辺の集落跡において竈材としての使用例が認められるものである。

元総社舊海遺跡群 (91) 基本層序

I	灰褐色土	表土
I'	灰褐色土	表土、As-B少量混じる。
II	灰褐色土	As-Bを多く含む。As-C、Hr-FPを少量含む。粘性、繊りなし。
III	にぶい褐色土	As-C、Hr-FPを少量含む。炭化材が極微量含まれる。
IV	灰褐色土	As-C、Hr-FPを少量含む。炭化材が多く含まれる。 下位に鉄分凝集層が見受けられる。粘性なし、繊りあり。
V	黒褐色土	As-Cを多く、Hr-FPを微量に含む。粘性、繊りあり。
VI	灰褐色粘質土	白色軽石が極微量含まれる。粘性、繊りあり。
Ⅶ	褐色灰色粘質土	白色軽石が極微量含まれる。粘性、繊りあり。
Ⅷ	浅黄褐色粘質土	粘性、繊りあり。

元総社舊海遺跡群 (95) 基本層序

I	灰褐色土	表土、部分的に黒褐色土が残る。
II	にぶい褐色土	総社砂層の漸移層
III	黄褐色粘質土	
IV	明黄褐色土	
V	黄褐色粘質土	
VI	灰黄褐色砂質土	
Ⅶ	灰黄褐色砂質土	

元総社舊海遺跡群 (102)

I	表土
II	総社砂層

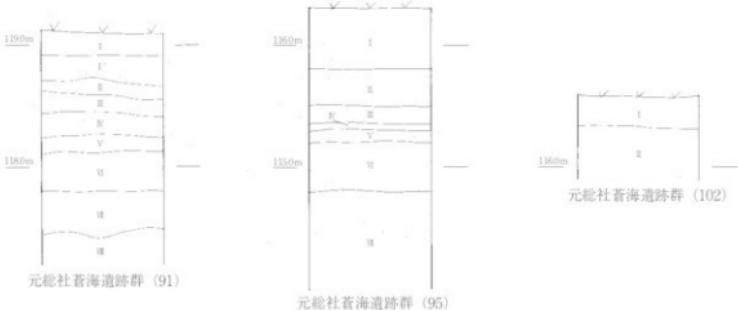


Fig. 4 基本層序 (S=1/40)

V 遺構と遺物

1 元総社蒼海遺跡群（91）

(1) 壴穴住居跡

1号竪穴住居跡 (Fig. 6, PL. 1)

位置 X277、Y109グリッド **主軸方向** N-100°-E **形状等** 正方形を呈するものと思われる。東西3.3m、南北(2.1)m、壁現高32cmを測る。**面積** (3.36) m² **床面** 地山粘質土を用いた貼り床であり、多少の凹凸はあるが、ほぼ平坦で硬化範囲も明瞭ではない。覆土中には炭化材が多く含まれていた。**竪** 検出されなかった。**1号溝跡**に破壊されているものと思われる。**貯蔵穴等** 貯蔵穴、柱穴ともに検出されなかった。**周溝** 検出されなかった。**重複** 2、3号住居跡と1号溝跡と重複する。重複関係は2、3号住居跡→本住居跡→1号溝跡の順である。**出土遺物** 床面から灰釉陶器(2)が出土したほか、酸化焰焼成の高台碗や灰釉陶器の破片が出土した。また覆土中には土師器片や須恵器片の他に鐵滓1点が見られた。**時期** 出土遺物から11世紀に帰属すると想定される。

2号竪穴住居跡 (Fig. 6, PL. 1)

位置 X277-278、Y109グリッド **主軸方向** N-105°-E **形状等** 正方形を呈するものと思われ、東西2.3m、南北(1.0)m、壁現高20cm前後を測る。**面積** (3.45) m² **床面** ほぼ平坦であり、竪前面部は堅く締まる。**竪** 東壁に敷設され、方位はN-98°-E、全長120cm、最大幅55cm、焚口部幅40cmを測る。両袖は自然石を用い暗褐色粘質土で構築されている。覆土中からの焼土混入は少なく、燃焼部の北側壁面のみ被熱による焦土化が見受けられる。燃焼部から煙道にかけて緩やかに立ち上がる。**貯蔵穴等** 貯蔵穴、柱穴ともに検出されなかった。**周溝** 検出されなかった。**重複** 1号住居跡と1号溝跡と重複する。重複関係は本住居跡→1号住居跡→1号溝跡の順である。**出土遺物** 竪から羽釜が集中して出土(3)(4)したほか、覆土中より少量の土師器片が出土した。**時期** 出土遺物から10世紀後半～11世紀前半に帰属すると想定される。

3号竪穴住居跡 (Fig. 6, PL. 1)

位置 X276-277、Y108-109グリッド **主軸方向** N-105°-E **形状等** 正方形を呈し、東西3.3m、南北3.6m、壁現高19cm前後を測る。**面積** (7.82) m² **床面** 地山粘質土を用いた貼り床で、壁際は地山を床面としている。ほぼ平坦で硬化範囲は不明瞭である。**竪** 1号住居跡に破壊されている可能性が考えられる。**貯蔵穴等** 精査を行なったが貯蔵穴、柱穴ともに検出されなかった。**周溝** 検出されなかった。**重複** 1号竪穴住居跡、1号溝跡と重複する。重複関係は本住居跡→1号住居跡→1号溝跡の順である。**出土遺物** 北壁のやや西よりで小金銅仏(5)が出土したほか、覆土中より土師器片や須恵器片、羽釜片が出土した。小金銅仏は頭を西に、正面を住居内側に向けて出土した。**時期** 遺物が少ないため時期を特定するのは難しいところだが、重複関係と推定される竪の位置から10世紀後半～11世紀前半と推察される。

4号竪穴住居跡 (Fig. 7, PL. 2)

位置 X277、Y106-107グリッド **主軸方向** N-90°-E **形状等** 長方形を呈すると思われ、東西3.1m、南北(4.9)m、壁現高27cmを測る。**面積** (13.89) m² **床面** 灰褐色粘質土による貼り床。ほぼ平坦で堅く締まる。**竪** 東壁の南によりに敷設される。5号竪穴住居跡と並行して調査を行なったため、煙道先端を僅かに削ってしまった。方位はN-82°-E、全長13m、最大幅0.59m、焚口部幅0.43mを測る。両袖は砂質凝灰岩と褐色粘質土を用いて構築されている。焚口部は浅く窪む。燃焼部は壁面共によく焼けている。燃焼部は箱状を呈し、横断面で

は中央が緩やかに凹むが燃焼部壁面では鋭く立ち上がる。燃焼部から煙道にかけては緩やかに立ち上がる。煙道先端は円形状に立ち上がるものと推測される。貯蔵穴等 竪北側で、最大径0.5m、床面からの深さ0.45mを測る貯蔵穴が確認された。柱穴は確認されなかった。周溝 精査を行なったが検出されなかった。重複 東側で5号竪穴住居跡、南側で4、5号土坑と重複する。重複関係は5号住居跡→本住居跡→5号土坑→4号土坑の順である。出土遺物 床面から(6)、貯蔵穴内より(8)(9)が出土し、竪からは土釜片や羽釜片が出土した。また、覆土からは土師器片が多く出土した。時期 出土遺物と重複関係から11世紀前半に帰属すると思われる。

5号竪穴住居跡 (Fig.8、PL.2)

位置 X277・278、Y106・107グリッド 主軸方向 N-72°-E 形状等 南側に方形状の張出しを有しているため、やや不整形ではあるが、本来は方形を呈していたと思われる。西壁は4号竪穴住居跡の掘り方で多くが消失しており、東西壁のセクションと柱穴の位置から推定してみると、東西[4.0]m、南北(5.7)m、壁現高54cmを測る。面積 (15.37) m² 床面 地山の黒褐色粘質土と褐色土の混土による貼り床。ほぼ平坦で堅く締まる。竪 東壁の中央付近に敷設される。方位はN-87°-E、全長1.2m、最大幅0.56m、焚口部幅0.45mを測る。両袖は角柱状に加工された砂質凝灰岩と灰白色粘質土により構築される。焚口部は床面より若干窪む。燃焼部は煙道に向かって緩やかに立ちあがるが、最奥部では鋭角に立ち上がり煙道部にいたる。燃焼部はよく焼け焦土化し、煙道の一部も被熱により焼けている。貯蔵穴等 竪南側に存在する。東西0.25m、南北0.28mを囲り、平面形状は方形であるが壁面はえぐれてフラスコ状を呈する。周溝 検出されなかった。重複 西側で4号住居跡と重複するが、本造構のほうが古い。出土遺物 貯蔵穴付近より(10)(13)、竪内から(12)、竪北側の東壁付近で(11)(14)(16)、貯蔵穴内より(15)が出土した。覆土中からは縄文時代前期土器片や土師器が出土した。時期 重複関係と出土遺物などから、7世紀末から8世紀初頭に帰属すると思われる。

6号竪穴住居跡 (Fig.9、PL.2)

位置 X278・279、Y108・109グリッド 主軸方向 N-68°-E 形状等 方形状を呈するものと推測され、竪や貯蔵穴などの住居施設の多くは調査区外に存在すると思われる。東西(25)m、南北(3.4)mの範囲を調査した。面積 (4.24) m² 床面 灰褐色粘質土による貼り床、ほぼ平坦。出土遺物 平面プランを確認する際に、北西壁際から(17)(18)(19)が出土した。また、覆土中より(20)が出土したほか、平瓦片や羽釜片などが出土した。時期 出土遺物から10世紀前半に帰属すると思われる。

7号竪穴住居跡 (Fig.9、PL.2)

位置 X277・278、Y109グリッド 主軸方向 N-72°-E 形状等 方形状を呈するが、大半は南側にある1号溝跡で壊されている。東西3.9m、南北(2.0)mの範囲を調査した。面積 (4.42) m² 床面 褐色粘質土による貼り床、平坦で硬化面が拭がる。床の直上には炭化材が多数確認され、覆土中にも焼土が確認されていることから焼失家屋と思われる。北西壁際や中央付近などに人頭大の川原石が存在し、一部は床面を貫いている。出土遺物 床面で(21)(22)、横倒しになって潰れた(23)などが出土した。また、覆土中には縄文前期の破片や土師器が少量出土した。時期 出土遺物から5世紀末に帰属すると思われる。

(2) 溝跡

1号溝跡 (Fig.9)

位置 X275～279、Y109・110グリッド 形状等 大半は調査区南側に存在するが、長さ15.6m、最大上幅2.8m、深さ1.27mを測る。大半は調査区外になり全体の断面形状は不明だが、6層直下で平坦面が確認されたため、これを本溝跡の底面とすると、「薬研状」を呈する可能性が考えられる。上端から約30度の角度で掘り込まれ、地

山が黄褐色粘質土になると、鋭角に掘り下がてから再度30度前後の角度で掘り下がる。地山が灰白色粘質土になると約60度の角度で掘り下がり底面へといたる。**主軸方向** N-94°-E **重複** 北側で2号溝跡、1~3号住居跡と重複するがいずれも本遺構のほうが新しい。**出土遺物** 繩文時代前期土器片、土師器片を少量。

時期 覆土と重複関係から、中世と思われる。

2号溝跡 (Fig.10)

位置 X276、Y106~109グリッド **形状等** 長さ11.0m、最大上幅0.46m、最大下幅0.32m、深さ0.11mを測る箱形を呈する。覆土は浅間C軽石を少量含んでいる。**主軸方向** Y106~108グリッドにおいては南北に走行するが、Y108・109ではN-168°-Wとなる。**重複** 南側で1号溝跡と重複するが、本遺構のほうが古い。**出土遺物** 遺物の出土は見られなかった。**時期** 覆土と重複関係、調査区北に位置する元總社舊海跡群(61)で確認された溝跡と同一であることから、古墳時代の可能性が考えられる。

(3) 土坑、井戸跡、ピット

1号土坑 (Fig.10, PL.2)

位置 X277、Y108グリッド **形状等** 表土除去後に行なった遺構確認により人骨が確認された。明瞭な掘り込みは確認し得なかったが、東西0.65m、南北1.23mを測るものと推定される。人骨は頭を北に、顔は西を向いた横臥屈葬であり、劣化が著しい。頭頂部より0.18m北で、浅い掘り込み内に口縁を上にした状態で須恵器罐(24)が出土した。**時期** 遺構確認の際に確認されたこと、他の遺構に比べて掘り込みが浅いことなどから、中世の可能性が考えられる。

6号土坑 (Fig.5)

位置 X276、Y109グリッド **形状等** 表土除去後に行なった遺構確認で人骨片が確認された。明瞭な掘り込みは確認できなかったが、人骨片が出土した範囲は南北0.88m、東西0.60mを測るものと推定される。**時期** 遺構確認の際に検出されたこと、他の遺構に比べて掘り込みが浅いこと、1号土坑と近接していることから、中世の可能性が考えられる。

1号井戸跡 (Fig.10)

位置 X276、Y108・109グリッド **形状等** 平面形は円形で、断面形は緩やかに立ち上がるフラスコ状を呈する。覆土は浅間B軽石を多く含む灰褐色土であり、炭化材を多く含んでいた。**時期** 覆土の堆積から中世以降と推察される。

その他の土坑、ピット、井戸については、Tab.4 土坑、ピット、井戸跡計測表に記載した。

Tab.2 元経社蒼海遺跡群(91)出土遺物観察表

番号	出土遺物 部位	器種名	①口径 ②器高 ③底径	④前 ⑤後 ⑥側面 ⑦底面	器物の特徴・整形・調整技術	登録 番号	備考
1	貝-1 覆土	須恵器 环	⑨3.0 ⑩3.63	②15 ③6.0 ④変形	外縁: 檍縁整形、口縁部横ナード。底部回転系きり。 内縁: 檍縁整形、口縁部横ナード。底部ナード剥離。		
2	貝-2 底直	灰輪 高台輪	①- ⑨3.70	②(25) ③横幅 ④底部のみ	外縁: 檍縁整形、底部ナード、高台剥離、輪削付け。 内縁: 檍縁整形、口縁部横ナード。	1	体部は既成に打ち欠く
3	貝-2 底直	羽茎	①(21.0) ②(16.2) ③-	④横幅 ⑤変形 ⑥口縁部1/4	外縁: 檍縁整形。横ナード後。体部は斜位のナード。口縁部は横ナードによりやや隆起する。内縁: ヘラ抜工具による横ナード。	11	
4	貝-2 カマド	羽茎	①(24.2) ②(24.2)	④中軸 ⑤底幅 ⑥3.4.5	外縁: 檍縁整形の痕跡が残る。輪削整形、体部は斜位のナード割り。 内縁: 檍縁ナード。	カマ FL5	
5	貝-3 底直	小金剛仏	高さ65cm、幅高52cm、底座高13cm、頭部幅19cm、頭部長12cm、重さ58kgを測る。材質は側面正面、打削面、外縁に全般に金剛像の表面が見られない。耳たぶは直状で、鼻はやや突出する。右手は肘を軽く曲げて垂下し、左手は(112)舟角に曲げて掌を立てる。鼻先は複合で、鼻孔は複合で、右足は編成して底座上に直立する。背面に左背支持の柄が突出する。輪削一時、前後合わせ型、両口は内縁裏。				地蔵菩薩立像
6	貝-4 底直	須恵器 环	①10.5 ②5.1	④横幅 ⑤横幅 ⑥3.4	外縁: 檍縁整形、口縁部横ナード。底部回転系きり。 内縁: 檍縁整形、口縁部横ナード。	1	
7	貝-4 覆土	須恵器 环	①(11.0) ②3.1	④横幅 ⑤横幅 ⑥3.4	外縁: 檍縁整形、口縁部横ナード。底部回転系きり。 内縁: 檍縁整形、口縁部横ナード。		
8	貝-4 舟穴	須恵器 高台輪	①13.6 ②8.9	④横幅 ⑤3.5 ⑥3.4	外縁: 檍縁整形、口縁部横ナード。高台輪付後に底面ナード。 内縁: 檍縁整形、口縁部横ナード。		
9	貝-4 舟穴	須恵器 环	①10.6 ②3.4	④横幅 ⑤3.5 ⑥3.4	外縁: 檍縁整形、口縁部横ナード。底部回転系きり。 内縁: 檍縁整形、口縁部横ナード。		三次成形の痕跡
10	貝-5 底直	須恵器 环	①18.3 ②(5.7)	④横幅 ⑤元底 ⑥3.0 ⑦口縁部のみ	内縁: 檍縁整形。口縁部横ナード。外縁の口縁部直下に一条の横位沈継が走る。内縁に自然軸付着し、軸には遺物片が付着する。	7	面部は人為的に打ち欠く
11	貝-5 底直	土師器 環	①18.0 ②(28.4)	④中軸 ⑤横幅 ⑥3.4.5	外縁: 体部下半は斜位へ削り、体部上位は横位へ削り。ヘラ削り後、打削面模ナード。内縁: ヘラ抜工具による横ナード。	128	
12	貝-5 カマド	土師器 環	①(23.0) ②(28.8)	④横幅 ⑤3.5 ⑥3.4	外縁: 縦位へ削り後、口縁部横ナード後に、頭部斜位へ削り。 内縁: ヘラ抜工具による横ナード。	910	
13	貝-5 底直	土師器 环	①(13.0) ②6.5	④横幅 ⑤3.0 ⑥3.4	外縁: ヘラ削り。口縁部横ナード。器面はシワ、ヒビが彫刻。 内縁: ナード。口縁部内部はナードにより若干くぼむ。	8	
14	貝-5 底直	貝刀 刀子	長さ(10.5)、幅1.2、厚さ0.4、重さ(26.8)g				5
15	貝-5 舟穴	土師器 环	①12.0 ②(4.1)	④横幅 ⑤横 ⑥3.0	外縁: ヘラ削り。口縁部横ナード。器面の一部にシワ・ヒビ。 内縁: ナード。口縁部内部はナードにより若干くぼむ。	1	
16	貝-5 底直	須恵器 高輪	①(26.0) ②(2.1)	④横幅 ⑤元底 ⑥3.0 ⑦口縁部のみ	外縁: 檍縁整形。丁寧なヘラ調整。面部に浅い沈継が走る。 内縁: 檍縁整形、カキ目調整	4	
17	貝-6 底直	須恵器 环	①13.0 ②4.1 ③4.9	④横幅 ⑤元底 ⑥3.0 ⑦3.4	外縁: 檍縁整形。口縁部横ナード。底部回転系きり。 内縁: 檍縁整形、口縁部横ナード。口縁部横ナード調整によりやや外反する。	1	
18	貝-6 底直	須恵器 环	①13.0 ②4.0 ③5.8	④横幅 ⑤横幅 ⑥3.0	外縁: 檍縁整形。口縁部横ナード。底部回転系きり。 内縁: 檍縁整形。	3	
19	貝-6 底直	灰輪 輪	①14.1 ②4.5 ③6.7	④横幅 ⑤横幅 ⑥3.0 ⑦口縁部のみ	外縁: 檍縁整形。底部ナード、高台輪付、輪削付け。 内縁: 檍縁整形、口縁部横ナード。	2	
20	貝-6 覆土	輪	長さ(7.1)、幅(6.5)、厚さ(1.5)、重さ(69.0)g		長さ31cm、最大幅9cmを測る型を作れる。型の両端の脚は折りがり。一方の壁の端には、2本の直線が見受けられる。型の底面と2条の直線の北高差は6mmを測る。合わせ面には黒色の付着物が見られる。外側は丸みを帯びた形状。		合せ型平面
21	貝-7 底直	土師器 环	①15.0 ②4.5	④横幅 ⑤横 ⑥3.0 ⑦(4.8)は完形	外縁: 体部ハラ削り。口縁部横ナード。 内縁: ナード。口縁部内部はナードにより若干くぼむ。	1	
22	貝-7 底直	土師器 环	①(14.8) ②(4.2)	④横幅 ⑤変形 ⑥3.0 ⑦3.4	外縁: 体部ハラ削り後、口縁部横ナード。器面に多少の凹凸がみられる。 内縁: ナード調整後に放射状の削き。	2	
23	貝-7 底直	土師器 瓶	①(25.0) ②(25.3)	④中軸 ⑤横幅 ⑥3.0 ⑦(4.8)は完形	外縁: 縦位を基本としたヘラ削り。口縁部は横ナード。 内縁: 横ナード。	3	
24	D-1	須恵器 罐	①- ②(9.7)	④横幅 ⑤横幅 ⑥3.0 ⑦(4.8)は完形	外縁: 檍縁整形。体部下半はヘラナード。体部最大径に横位沈継が走る。 (口縁部は斜利に仕上げる。内縁: 器部はヘラ抜工具によるナード調整)。	1	
25	D-5 覆土	肉豆蔻	①- ②-	④(9.5) ⑤通透 ⑥褐色 ⑦体部のみ	手のひら平らした土削により横位に区画文を構成する。手のひらには沈継により斜位、弧状を構成する。斜位沈継が椎位旋錐と共に区画文を構成する。区画内、手のひらに丸し文が施される。		加賀利E呂式
26	H-5 覆土	深鉢	①- ②-	④(9.5) ⑤直好 ⑥赤褐 ⑦3.0	手のひら平らした土削により横位に区画文を構成する。		諸磯b式
27	H-5 覆土	深鉢	①- ②-	④(9.5) ⑤直好 ⑥3.0 ⑦1.4	器の底へ斜位に区画文を構成する。		諸磯b式
28	H-5 覆土	深鉢	①- ②-	④(9.5) ⑤直好 ⑥3.0 ⑦1.2	L字型の附加条の縄を地文とする。		黒式

(1) 刻印は、「貝直」(貝直)・底直より10cm以内の部位から検出。「覆土」(底直)より10cmを越える部位から出土の2段階に分けた。竈内の検出については、「竈内」と記載した。(2) 例: 覆土の単位は4cmである。規定値を〔 〕、復元値を〔 〕で示した。

③ 前述は、細粒(0mm以下)、中粒(10~15mm以下)、粗粒(20mm以上)とし、特徴的な鉱物が入る場合に鉱物名等を記載した。

④ 成成は、土師器、須恵器については、輪削法、輪元法の別を示した。

Tab.3 元總社蒼海遺跡群(91)住居跡一覧表

遺構名	位置	規模(m)			面積(m ²)	主軸方向	窓		周溝	主な出土遺物		
		東西	南北	壁現高(cm)			位置	構築材		土師器	須恵器	その他
H-1	X277 Y109	3.32	(2.13)	32	(3.36)	N-100°-E			-			灰輪 高台輪
H-2	X277・278 Y109	2.36	(1.01)	20	(3.45)	N-105°-E	東壁	石、粘土	-			羽筆
H-3	X276・277 Y108・109	3.32	3.61	19	(7.82)	N-105°-E			-			小金 鋼仏
H-4	X277 Y106・107	3.11	(4.98)	27	(13.89)	N-90°-E	東壁南寄り	礫灰岩、粘土	-	环、 高台皿		
H-5	X277・278 Y106・107	[4.02]	(5.70)	54	(15.37)	N-72°-E	東壁中央	礫灰岩、粘土	-	环、甕 甌、盤		刀子、 深鉢
H-6	X278・279 Y108・109	(2.53)	(3.41)	24	(4.24)	N-68°-E			-		环	灰輪輪、 鉄型
H-7	X277・278 Y109	3.92	(2.06)	42	(4.42)	N-72°-E			-	环、甕		

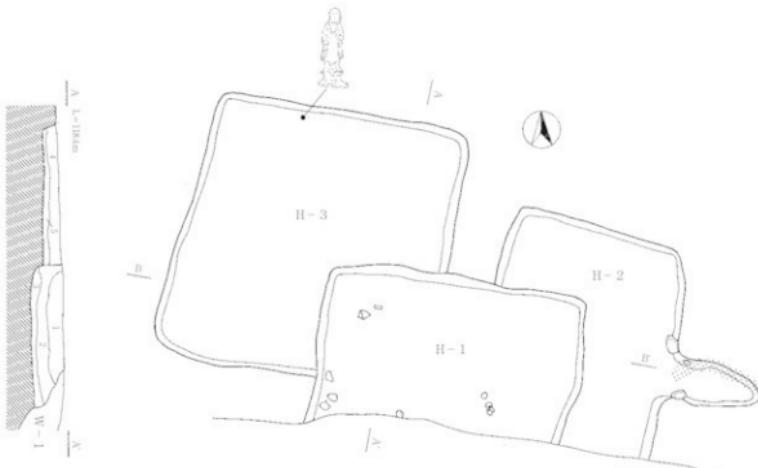
Tab.4 元總社蒼海遺跡群(91)土坑・ピット・井戸跡 計測表

遺構名	位 置	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	形 状	出 土 遺 物		備 考
						土器	其他	
D-2	X275 Y108	106	105	25	隅丸方形			
D-3	X276 Y108	107	87	15	楕円形			
D-4	X277 Y107	70	65	20.5	円形			
D-5	X277 Y107・108	93	81	21	円形	両耳壺		
D-7	X275 Y107	107	105	16	円形			
P-1	X276 Y109	50	44	21	円形			
P-2	X276 Y109	71	61	21.5	円形			
I-1	X276 Y108・109	126	120	-	円形			

元總社蒼海遺跡群(91)



Fig. 5 元總社蒼海遺跡群(91) 全体図



- 1~3号住居跡
- 1 灰褐色土 As-Cを少量含む。炭化材を多量に含む。
 - 2 灰褐色土 As-Cを少量含む。炭化材を多量に含む。
 - 3 灰褐色土 As-Cを少量含む。
 - 4 灰褐色土 As-Cを含む。
 - 5 灰褐色土 As-Cが多く含む。
 - 6 灰褐色土 As-Cが多く、焼瓦粒子を少量含む。
 - 7 灰褐色土 As-Cを多く含む。焼瓦粒子を少量含む。

- 2号住居跡断面
- 1 灰褐色土 As-Cを多く含む。
 - 2 にぶい灰褐色土 烧瓦粒子を多く含む。
 - 3 灰褐色土 烧土ブロックを少量含む。
 - 4 灰褐色土 烧土粒子を少量、炭化材を少量含む。
 - 5 灰褐色土 As-Cを少量、焼土ブロックと炭化材を少量含む。

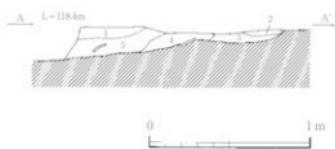


Fig. 6 元總社舊海遺跡群 (91) 1~3号住居跡

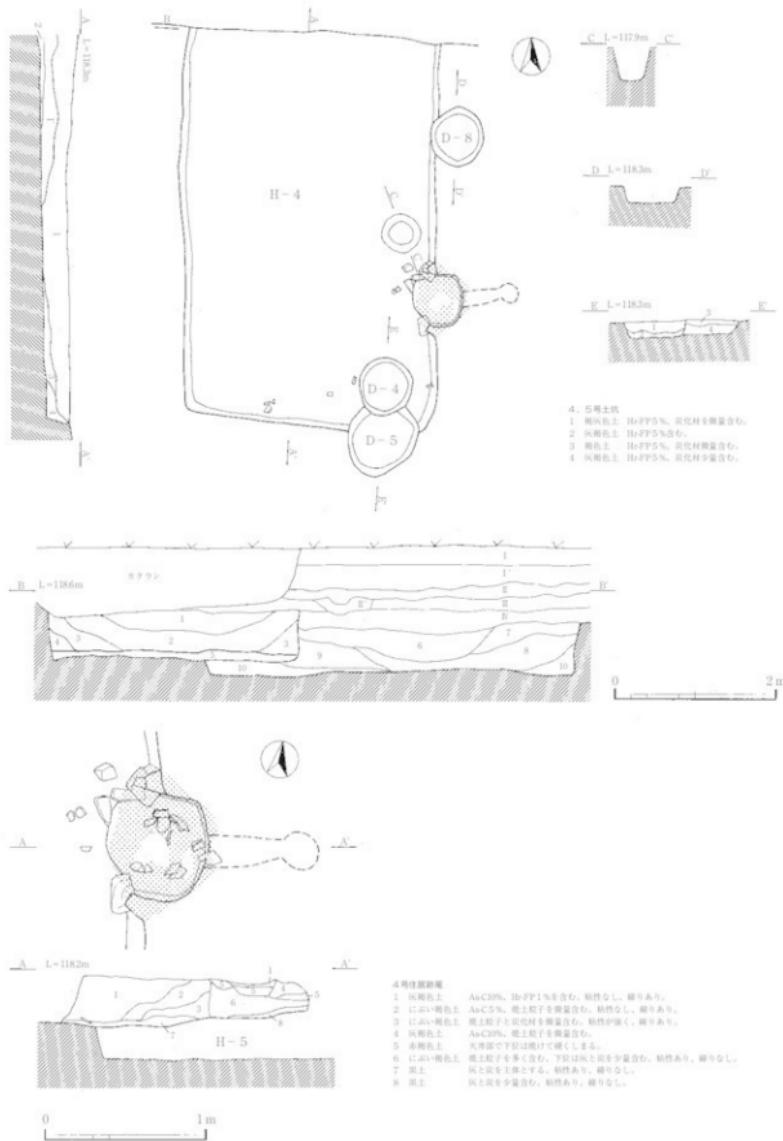
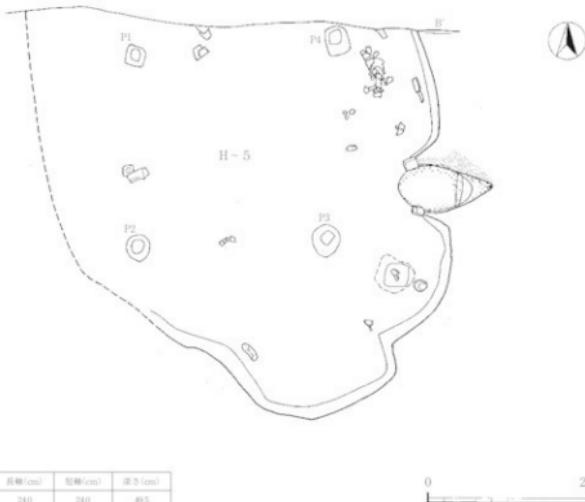


Fig. 7 元絶社蒼海遺跡群(91) 4号住居跡、4・5・8号土坑



4. 5号住居跡
1. 从周赤土 As-C10%、Hr-PP1%、赤色粒子と炭化材を多く含む。粘性。繊りなし。
 2. 从周赤土 As-C10%、Hr-PP1%、炭化材を少量含む。
 3. 从周赤土 As-C10%、Hr-PP1%、赤色粒子と炭化材を多く含む。粘性ややあり。繊りなし。
 4. にじみ柄赤土 As-C5%、赤色粒子、炭化材を少量含む。粘性。繊りあり。
 5. 从周赤土 As-C10%、Hr-PP1%、赤色粒子と炭化材を多く含む。粘性。繊りなし。
 6. 从周赤土 As-C10%、Hr-PP5%、赤色粒子と炭化材を微量含む。粘性なし。繊りあり。
 7. 从周赤土 As-C10%、Hr-PP5%、赤色粒子を微量含む。粘性ややあり。繊りあり。
 8. 从周赤土 As-C10%、Hr-PP5%、赤色粒子は赤色粘土と炭化材が多く含まれる。
 9. 从周赤土 As-C10%、Hr-PP1%、赤色粒子と炭化材を微量含む。粘性上質で粘性。繊りあり。
 10. 从周赤土 As-C5%、Hr-PP1%、赤色粒子を少量含む。



- 5号住居跡
1. 从周赤土 As-Cを少量、表面を薄く含む。
 2. 从周赤土 赤色粒子と炭化材が少しだけ含まれる。凝灰岩層。
 3. 从周赤土 赤色粒子と炭化材を多く含む。
 4. 从周赤土 細けて縮くしまる。

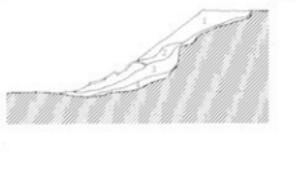
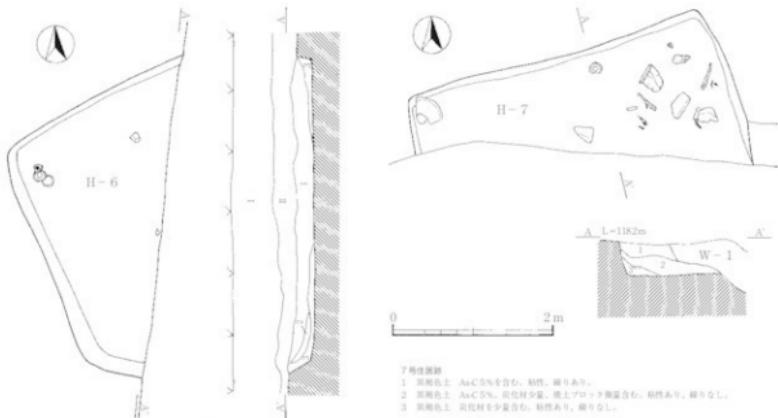


Fig.8 元経社舊海遺跡群(91) 5号住居跡



6号住跡
1 黒褐色土 AsC10%、Hy-P5%を含む。粘性、繊りなし。
2 黒褐色土 AsC-D%を含む。粘性あり、繊りなし。
3 黒褐色土 AsC10%を含む。粘性ややあり。繊りなし。

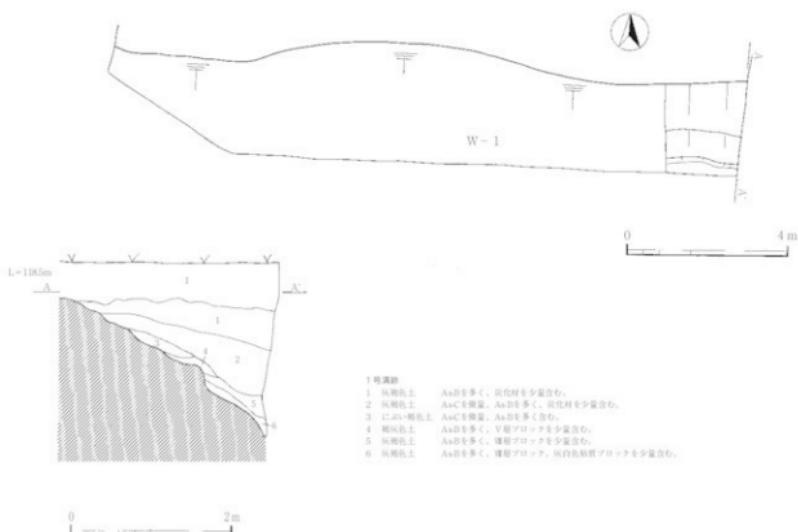


Fig. 9 元経社蒼海遺跡群 (91) 6・7号住跡、1号溝跡

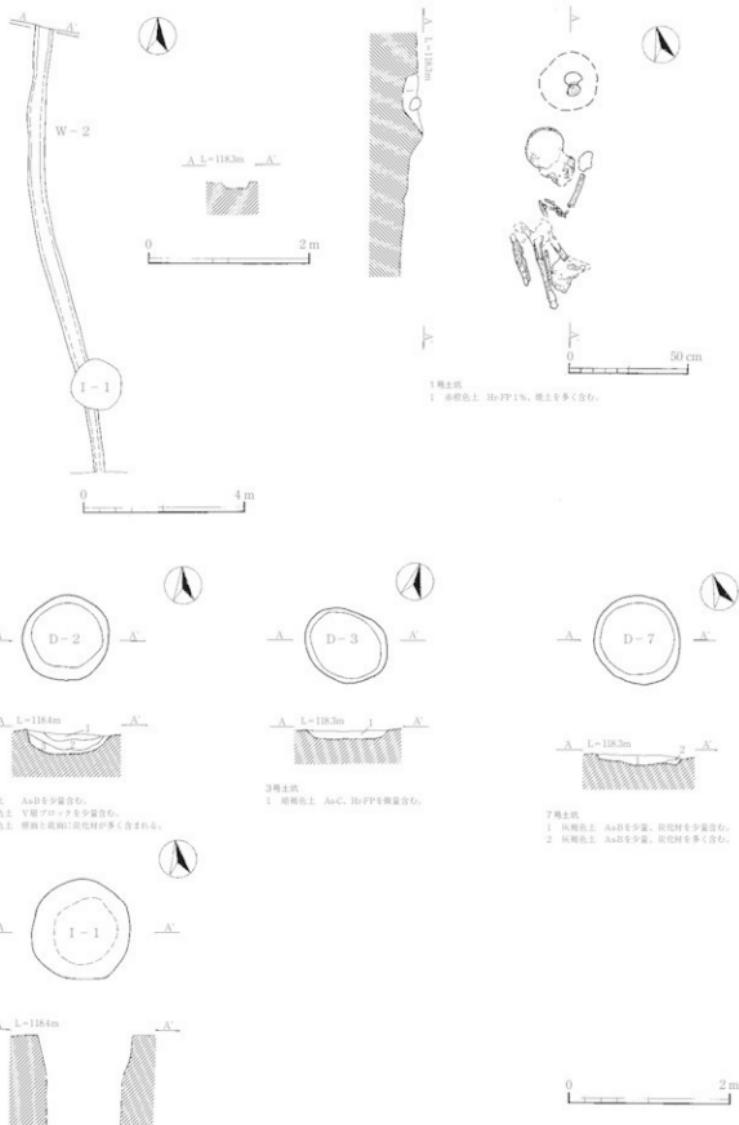


Fig.10 元総社蒼海遺跡群(91) 2号溝跡、1~3・7号土坑、1号井戸跡

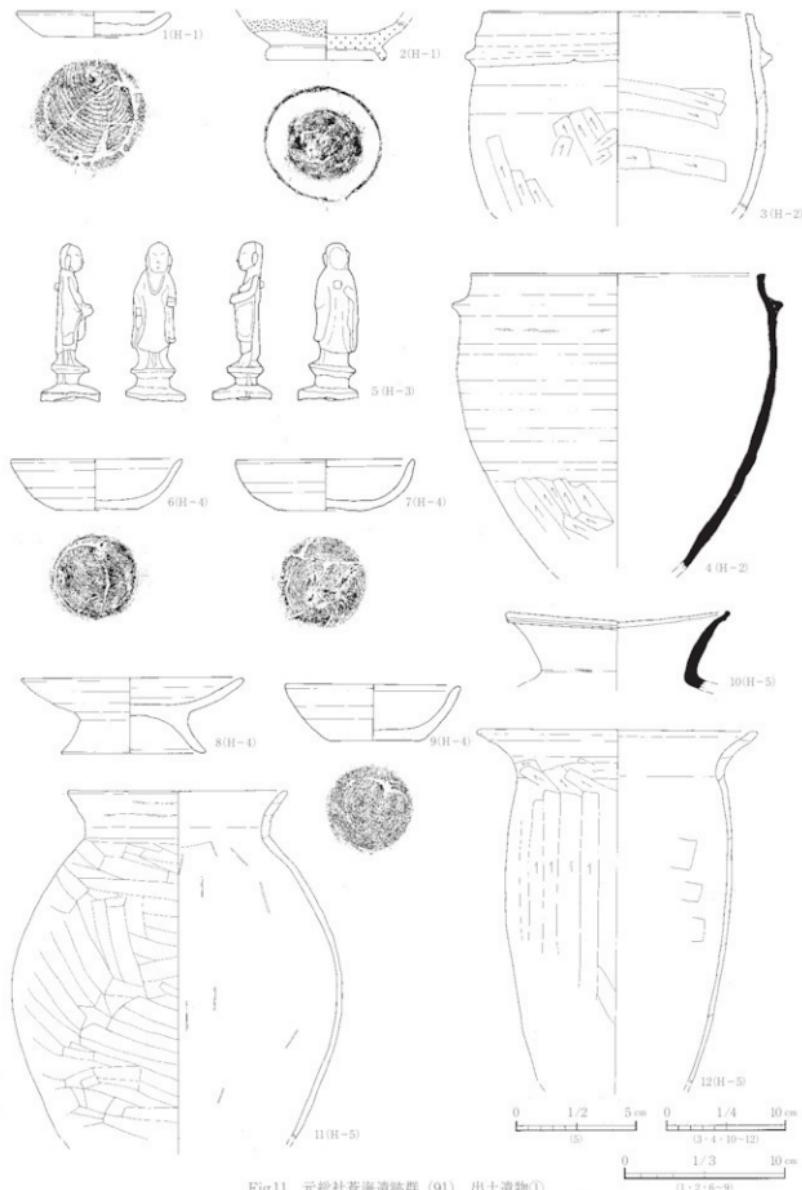


Fig.11 元紹社曹海遺跡群(91) 出土遺物①

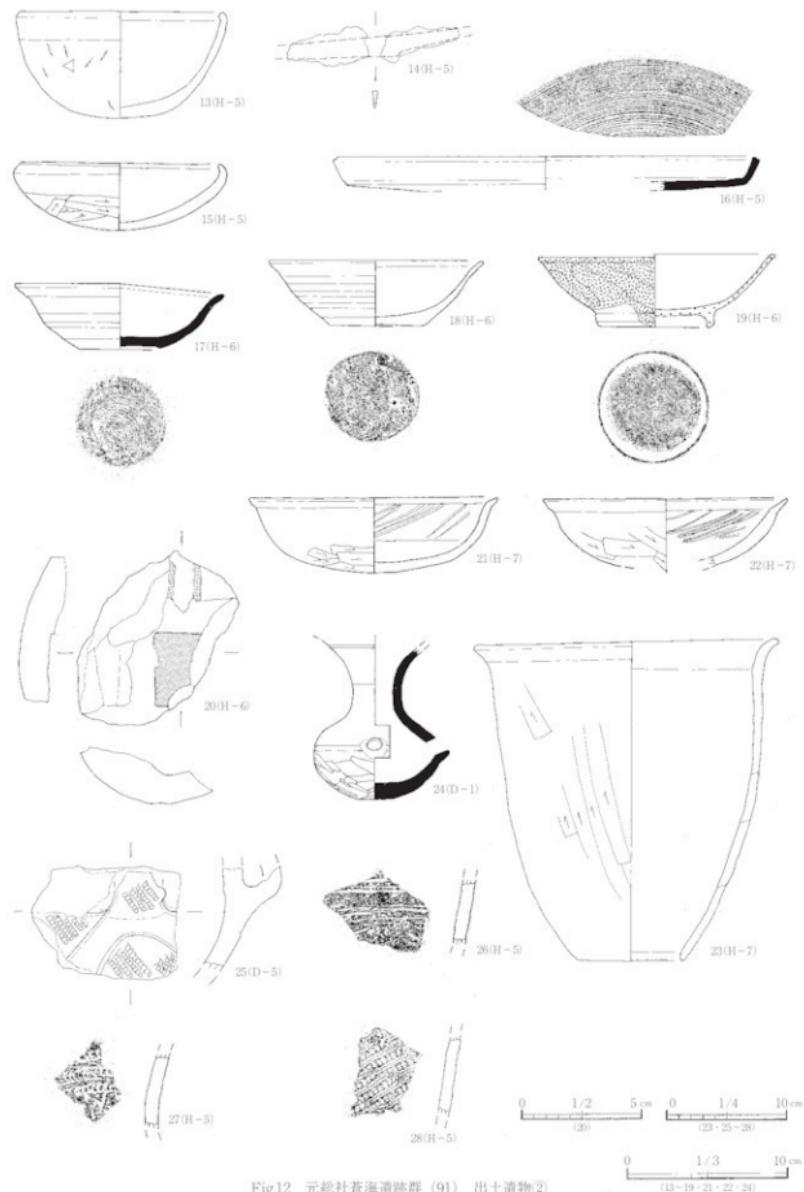


Fig.12 元紹社舊海遺跡群(91)出土遺物②

2 元総社蒼海遺跡群 (95)

(1) 壁穴住居跡

1号壁穴住居跡

位置 X234、Y235 調査時には床面の一部が確認されるのみであった。主軸方向、形状、竈、貯蔵穴等は不明である。**重複** 1号掘立柱建物跡、2号掘立柱建物跡と重複するが、本遺構の方が新しいと考えられる。**出土遺物** 床面から出土した(1)を図化した。この他に少量の土師器片が出土した。**時期** 出土遺物から11世紀代と考えられる。

2号壁穴住居跡 (Fig.14、PL.3)

位置 X236~238、Y234~236グリッド **主軸方向** N-71°-E **形状等** 正方形を呈するものと思われる。東西6.7m、南北6.7m、壁現高21cmを測る。**面積** (39.05) m² **床面** 地山粘質土を用いた貼り床であり、多少の凹凸はあるが、ほぼ平坦で堅く締まる。**竈** 検出されなかった。ただし、破壊されている北壁の中央付近から焼土と白色粘質土が検出されており、本住居に敷設された竈の可能性がある。**貯蔵穴等** 南西部柱穴は最大径33cmの円形で深さ42cm。北東部柱穴は最大径24cmの円形で深さ52cm。北東隅の貯蔵穴は88×59cmの長方形で深さ78cm。**周溝** 調査区の範囲で全周すると思われるが、北壁については破壊されているため、北東隅のみで検出。**重複** 2・6号井戸跡、42号柱穴と重複し、本遺構が最も古い。**出土遺物** 土師器坏(2)(3)が出土したほか、土師器片が多く出土した。**時期** 出土遺物から6世紀後半と思われる。

3号壁穴住居跡 (Fig.15、PL.3)

位置 X232・233、Y234~236グリッド **主軸方向** N-72°-E **形状等** 方形状を呈すると思われるが、大半は西側の擾乱及び北西部にある8号住居跡で壊されている。東西(4.09)m、南北(7.73)mの範囲を調査した。壁現高9cmを測る。**面積** (23.01) m² **床面** 地山粘質土を用いた貼り床であり、ほぼ平坦で堅く締まる。**竈** 東壁の中央付近よりやや南側に敷設される。主軸方向N-79°-E、全長14m、最大幅1.8m、焚口部幅0.6mを測る。両袖は灰白色粘質土と砂質凝灰岩により構築される。全体的に焼土が少なく、煙道部先端は擾乱により破壊されていた。**貯蔵穴等** 電南側で、98×75cmの長方形で深さ104cmを測る貯蔵穴が確認された。柱穴は確認されなかった。**周溝** 摆乱により破壊されている部分もあり、南壁及び東壁の一部で検出された。**重複** 8号住居跡、9号井戸跡と重複し、本遺構が最も古い。**出土遺物** 床面から出土した須恵器坏(5)、長胴甕(6)や土師器坏(4)の他に土師器長胴甕片などが出土した。**時期** 出土遺物から6世紀後半と考えられる。

4号壁穴住居跡 欠番

5号壁穴住居跡 欠番

6号壁穴住居跡 (Fig.16、PL.3)

位置 X237~239、Y238~240グリッド **主軸方向** N-67°-E **形状等** 長方形を呈するものと思われ、東西7.3m、南北(6.4)m、壁現高21cmを測るが、南西側は擾乱により破壊されている。**面積** (46.02) m² **床面** 地山粘質土を用いた貼り床であり、多少の凹凸はあるが、ほぼ平坦で堅く締まる。**竈** 東壁の中央付近よりやや北側に敷設される。主軸方向N-63°-E、全長0.6m、最大幅1.2m、焚口部幅0.4mを測る。両袖は長胴甕と灰白色粘質土により構築される。燃焼部は煙道に向かって緩やかに立ちあがるが、最奥部では鋭角に立ち上がり煙道部にいたる。横位断面では、保存状態が悪いが、壁面は焚口部、燃焼部では鋭く立ち上がると思われる。燃焼部から煙道にかけて焼土化が見られる。**貯蔵穴等** 北東部の柱穴のみ検出。最大径54cmの円形で、深さ

は48cm。周溝 東壁及び北壁東側で検出された。重複 なし 出土遺物 床面から出土した須恵器蓋(8)、瓶(9)、小形甕(10)、竈両袖の補強として利用されていた長胴甕(11)、(12)などが出土した。時期 出土遺物から6世紀後半と考えられる。

7号竪穴住居跡 (Fig.16, PL.4)

位置 X240・241、Y237・238グリッド 主軸方向 N-91°-E 形状等 方形状を呈するが、大半は西側の搅乱で壊されている。東西(1.5)m、南北(2.7)mの範囲を調査した。壁現高9cmを測る。面積(3.48)m²床面 1号溝跡覆土内に構築された住居で、地山の黒褐色粘質土を用いた貼り床の硬化面のみを検出。ほぼ平坦で硬化範囲は不明瞭である。竈 主軸方向 N-100°-E、全長0.3m、最大幅0.6m、焚口部幅0.4mを測る。両袖は沙質凝灰岩と褐色粘質土を用いて構築されていると思われるが、保存状態が非常に悪かった。焚口部床面には炭化物が見られるものの、焼土は燃焼部底部にわずかに見られるのみである。貯蔵穴等 貯蔵穴、柱穴ともに検出されなかった。周溝 検出されなかった。重複 1号溝跡と重複し、本道構の方が新しい。出土遺物 床面から坏(14)、高台碗(17)、羽釜(18)などが出土した。時期 出土した遺物と重複関係から10世紀後半と考えられる。

8号竪穴住居跡 (Fig.15, PL.4)

位置 X232、Y233~235グリッド 主軸方向 N-59°-E 形状等 方形状を呈するものと推測され、西側は調査区外に存在すると思われる。東西(2.56)m、南北(5.22)mの範囲を調査した。壁現高27cmを測る。面積(11.27)m²床面 地山粘質土を用いた貼り床であり、多少の凹凸はあるが、ほぼ平坦で堅く締まる。竈 東壁の中央付近よりやや南側に敷設される。主軸方向 N-59°-E、全長1.1m、最大幅1.1m、焚口部幅0.5mを測る。両袖は角柱状の礫と暗褐色粘質土、長胴甕を用いて構築されている。焚口部は床面より若干窪む。横断面では中央が緩やかに凹む。燃焼部には、支柱石が確認された。燃焼部から煙道にかけては緩やかに立ち上がる。貯蔵穴等 竈南側で、50×44cmの長方形で深さ71cmを測る貯蔵穴が確認された。柱穴は確認されなかった。周溝 全周すると思われるが、西側は調査区の範囲外となる。重複 3号住居跡、2号溝跡と重複する。重複関係は3号住居跡→本住居跡→2号溝跡の順である。出土遺物 貯蔵穴内で出土した坏(21)、竈から出土した長胴甕(22)の他に土器片の出土が確認された。床面に密着するように灰釉陶器(19)が出土したが、他の遺物と年代観がかけ離れてしまうため、(19)は確認できなかつた土坑などの遺構に帰属する可能性が高い。時期 竈出土遺物、貯蔵穴出土遺物を重視すると、7世紀後半と考えられる。(19)の灰釉陶器は虎渓山1号窯式であるため、別道構のものと思われる。

9号竪穴住居跡 (Fig.17, PL.4)

位置 X233・234、Y232・233グリッド 主軸方向 N-79°-E 形状等 長方形を呈し、東西3.3m、南北4.1m、壁現高23.5cm前後を測る。面積(11.05)m²床面 黒褐色粘質土を用いた貼り床であり、多少の凹凸はあるが、ほぼ平坦である。竈 東壁の南よりに敷設される。主軸方向 N-90°-E、全長0.5m、最大幅0.9m、焚口部幅0.5mを測る。両袖は粘質土を用いて構築されているが、保存状態が非常に悪かった。焚口部は床面より若干窪む。焚口部床面には炭化物が見られるものの、焼土は燃焼部底部にわずかに見られるのみである。煙道部は搅乱により破壊されていた。貯蔵穴等 貯蔵穴、柱穴ともに検出されなかった。周溝 検出されなかった。重複 2号・3号溝跡と重複し、本道構が最も新しい。出土遺物 床面等から坏(25)、(26)が出土した他に、少量の土器片、瓦片が出土した。時期 重複関係と出土遺物から10世紀代と思われる。

10号竪穴住居跡 (Fig.17、PL.4)

位置 X 232、Y 231・232グリッド **主軸方向** N -85° - E **形状等** 方形状を呈すると思われるが、大半は西側の擾乱で壊され、北側は調査地の範囲外となる。東西 (1.6) m、南北 (3.0) m の範囲を調査した。壁現高 11.5cm を測る。**面積** (5.51) m² **床面** 地山の黒褐色粘質土を用いた貼り床の硬化面のみを検出。ほぼ平坦で硬化範囲は不明瞭である。**竪** 検出されなかった。**貯蔵穴等** 貯蔵穴、柱穴ともに検出されなかった。**周溝** 東壁及び南壁の東側で検出され、全周すると思われるが、西側は擾乱で壊され、北側は調査地の範囲外となる。**重複** なし **出土遺物** 瓦片のみの出土が確認された。**時期** 出土遺物が少なく、遺構の重複もないため時期の設定に苦慮するが、住居床面の状態や周辺の遺構分布から、10世紀以降と考えたい。

11号竪穴住居跡 (Fig.17)

位置 X 233・234、Y 233・234グリッド **主軸方向** N -63° - E **形状等** 方形状を呈すると思われるが、大半は北側の 2 号溝跡で壊されている。調査時には床面が露出している状態であり、東西 (4.1) m、南北 (2.4) m の範囲を調査した。**面積** (7.20) m² **床面** 地山の黒褐色粘質土と褐色土の混土による貼り床の硬化面のみを検出。ほぼ平坦で硬化範囲は不明瞭である。**竪** 検出されなかった。**貯蔵穴等** 貯蔵穴、柱穴ともに検出されなかった。**周溝** 検出されなかった。**重複** 2 号溝跡と重複し、本遺構の方が古い。**出土遺物** 床面より少量の土器片が出土したほか、周辺から (27) が出土したが、混入であろう。**時期** 出土遺物が少ないため、時期設定に苦慮するが、主軸方位から 7 世紀代と思われる。

(2) 掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡 (Fig.18、PL.5・6)

位置 X 233～236、Y 234～236グリッド **方位** N -19° - W **平面形** 削平が及んでいるため、全体形状は把握できないが、桁行 3 間、梁行 2 間の建物規模である。柱間は桁行が北から 13m、23m、14m であり、梁行が西から 24m、26m であり、柱間寸法から桁行総長 5.0m、梁行総長 5.0m となる。柱筋は掘っている。**柱** 個々の柱掘り方は直掘りであるが、平面形態や規模が若干異なる。P 4、P 5 は東西 10m～13m、南北 10m 前後の長方形であり、確認面から 36cm 前後で平坦面を構築している。なお、P 1、P 2、P 4、P 5 では柱位置をさらに一段掘り下げている。P 7、P 8 は他の柱掘り方に比べて規模が小さいため東柱と考えられ、床東建物の可能性が考えられる。ただし、P 8 は P 7 に比べて深く掘られている。P 5、P 7、P 8 のように柱掘り方の横が掘り込まれている、もしくは P 6 のように柱掘り方の北西箇所において斜めに掘り込まれている状態であるため、これを柱抜き取りの痕跡と考えた。P 3、P 8 で直径 15cm 前後を測る柱のあたり痕、P 4、P 5 の断面観察で柱痕跡が確認された。P 3、P 6 は 2 号掘立柱建物跡の柱掘り方と重複するが、本遺構のほうが古い。床面積は 25.7 m² を測る。柱掘り方からの出土遺物は少量であり、破片が多いため、時期の特定は難しいが、遺構確認の際に 1 号竪穴住居跡が存在していること、柱の平面形が長方形であることから古代に帰属すると考えたい。

2号掘立柱建物跡 (Fig.18・19、PL.5・6)

位置 X 233～236、Y 235・236グリッド **方位** N -13° - W **平面形** 削平や搅乱が及んでいるため、全体形状は把握できないが、桁行 4 間、梁行 3 間の建物規模である。柱間は桁行が南の西隅から 1.9m、1.8m、1.9m、2.1 m を測る。南から 2 列目の桁行は、1.9m、1.8m、2.0m、2.0m を測る。梁行は P 15 と P 16 の間、P 3 と P 17 間は搅乱や削平が及んでいるが、北から 1.6m、1.6m、1.6m を測ると推測される。各柱列の柱間寸法はそれぞれ微妙に異なっているが、柱筋は概ね掘っている。柱間寸法から桁行総長 7.7m、梁行総長 4.8m となる。**柱** 個々の柱掘り方は直掘りを基本とするが梁行の P 6 と P 14、P 15 は布堀状の掘り方である。確認面からの布堀り堀り方の底面までは、P 6 と P 14 間で 21cm、P 15 では 10cm と浅い。個々の柱掘り方は方形と円形に分けられる。大半

は方形の柱掘り方であり、東西0.8m～1.1m、南北0.7～0.8m、深さ0.43m～0.65mを測る東西方向に長い長方形である。P12は擾乱により不整形であるが、残存している底面は方形である。その他にP17、P18、P19は円形であり直径0.5m前後、深さ0.06m～0.17mを測る。内側の柱掘り方は浅いため、床束建物と思われる。P10、P11、P13、P14、P15、P16で直径15cm～20cmの柱あたり痕、P10、P14、P15で柱痕跡が確認された。P6、P12、P13、P14で柱の抜き取り痕と考えられる斜めに立ち上がる傾斜を確認した。1号掘立柱建物跡と重複するが、本遺構のほうが新しい。床面積は37.5m²を測る。1号掘立柱建物跡と同様に出土遺物は破片資料が中心であるが、重複関係と柱の平面形から古代に帰属すると考えたい。

(3) 溝跡

1号溝跡 (Fig.20・21, PL. 4)

位置 X240・241、Y234～240グリッド **形状等** 調査範囲での長さは25.6m、上幅4.17m、下幅3.91m、深さ0.32mを測る。底面標高は北で114.76m、南で114.66mであり、北から南にかけて緩やかに傾斜し、比高差は約0.1mである。夥しい擾乱により残存は極めて悪いが、断面形は逆台形を呈し、底面から10°前後の角度で緩やかに立ち上がり、壁際では40°前後で立ち上がる。底面はほぼ平坦であるが、左右から中央に向かって緩やかに窪む箇所もある。覆土の断面観察からは水流の痕跡は窺えなかった。**主軸方向** N-4°-W **重複** 7号住居跡、8号井戸跡と重複するが、いずれも本遺構よりも新しい。**出土遺物** 図示した灰陶器(28)や壺(29)の他に、土師器片や須恵器片、古代の瓦、中世の内耳鍋、近代の瓦などの出土が確認された。**時期** 出土遺物と重複関係から、10世紀以前の開削であり、10世紀後半には溝の機能が失われていたものと考える。

2号溝跡 (Fig.21, PL. 4)

位置 X232～234、Y232・233グリッド **形状等** 調査範囲での長さは10.65m、最大上幅4.05m、最大下幅3.5m、深さ0.51mを測る。底面標高は東で114.94m、西で115.04mと比高差は0.1mを測る。断面形は逆台形を呈し、底面は皿状に浅く窪む。北壁は45°前後の角度で立ち上がる。一方、南壁は50°前後で立ち上がった後、約10cm幅の平場となり、その後緩やかに立ち上がる。ただし、南壁東側の平場は約20cm幅であり、一様ではない様子が窺える。覆土の断面観察からは水流の痕跡は窺えないが、硬化面が確認されたため、道としての機能も考えられる。また、覆土8層が底面と考えられ、下位にU字状に掘り込まれた溝跡(3号溝跡)が存在することから、3号溝跡を再拡張した可能性を考えたい。**主軸方向** N-13°-Wとなる。**重複** 同一箇所で3号溝跡、8・9・11号住居跡、3号土坑と重複する。重複関係は8、11号住居跡、3号溝跡→本遺構→9号住居跡→3号土坑の順である。**出土遺物** 覆土内より丸瓦片、羽釜片、土師器片などが出土した。このうち外面と底面に墨書きされた椀(30)、内面が黒色処理された(31)(32)を図示した。**時期** 重複関係、出土した土器から9世紀後半には溝としての機能を失っていた可能性を考えたい。

3号溝跡 (Fig.21, PL. 4)

位置 X232～234、Y232・233グリッド **形状等** 調査範囲での長さは10.65m、確認された最大上幅は0.85m、最大下幅0.45mを測る。底面標高は東で114.69m、西で114.66mと比高差は0.03mを測る。本遺構は2号溝跡に先行する溝跡であるため上幅は失われているが、断面形状はU字状を呈する。**主軸方向** N-15°-Wとなる。**重複** 同一箇所で2号溝跡と重複するが本遺構のほうが古い。**時期** 出土遺物が少ないが、重複関係から9世紀以前と考えられる。

(4) 土坑、井戸跡、ピット、性格不明遺構

調査区からは土坑3基、井戸跡9基、柱穴45基（掘立柱建物跡に伴う柱穴を除く）が検出された。1号土坑は調査が進むにつれ井戸であることが明らかになったが、遺物注記が行われており、混乱を避けるため土坑の名称で調査を行なった。報告書作成に際し、1号土坑から9号井戸跡へと名称変更を行なった。調査時は土坑と思われる遺構も柱穴の可能性が考えられたため、柱穴番号を付与して調査を進めた。多数検出された柱穴のうち、P-39、69、71、76からは遺物の出土が確認されている。出土状態や土坑の形態から後世の削平により消失した住居跡の貯蔵穴等に関わるものと考えた。また、P-64の覆土は浅間C軽石などを含まず、縄文時代の遺構覆土に似通っていた。遺構の平面形状、断面形状も縄文時代の陥し穴に近い形態であるため、P-64は縄文時代陥し穴の可能性を考えたい。元總社蒼海遺跡群では染谷川左岸の台地上を中心には縄文時代前期、中期後葉の住居跡、牛池川左岸で晚期の住居跡が確認されているため、これからも縄文時代に関連する遺構の検出が期待される。

以下、代表的な遺構について記載し、その他についてはTab.6、Tab.9のとおりである。

1号土坑

調査中に井戸跡であることが判明したため、報告書では9号井戸跡として記載。

2号土坑 (Fig.22, PL.7)

位置 X238、Y237・238グリッド **形状等** 全体的には長方形を呈するが、円形・梢円形を呈する土坑の複合体である。掘込地業の可能性を考えて慎重に調査を進めたが、掘込地業としての確信を得ることはできなかった。また、周囲に同様な遺構の存在が確認されなかつたため、土坑として報告する。 **出土遺物** 極めて少量の土師器片のみが出土した。 **時期** 遺物が少なく、周囲にも同様な遺構が存在しないため不明である。

3号土坑 (Fig.22, PL.7)

位置 X234、Y233 **形状** 大半は調査区外になってしまふが、長方形を呈すると思われる。覆土は浅間B軽石の混土であった。 **重複** 2号溝跡、3号溝跡と重複するが、本遺構のはうが新しい。 **出土遺物** なし。 **時期** 重複関係と覆土の状態から12世紀以降と思われる。

4号土坑 (Fig.20)

位置 X239・240、Y237 **形状** 直径1.4mを測る、円形を呈し覆土は浅間B軽石の混土であった。 **重複** 5号井戸跡と重複し、本遺構のはうが古い。 **出土遺物** なし。 **時期** 重複関係と覆土の状態から12世紀以降と考えられる。

2号井戸跡 (Fig.24)

位置 X237、Y235 **形状等** 平面形は円形で、長軸は2.4mを測る。断面形は漏斗状に緩やかに開く。覆土は黒褐色土であり、少量の炭化材を含んでいた。 **出土遺物** 土師器片が大半を占めているが、須恵器の壺片、長頸壺の破片などが出土した。 **重複** 2号住居跡と重複し、本遺構のはうが新しい。 **時期** 不明

3号井戸跡 (Fig.24)

位置 X234・235、Y236 **形状等** 平面形は円形で、長軸は1.35mを測る。断面形はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は黒褐色で浅間B軽石を多く含んでいた。 **出土遺物** 少量の土師器が出土した。 **重複** 1号掘立柱建物跡、2号掘立柱建物跡と重複するが、本遺構のはうが新しい。 **時期** 重複関係、覆土の堆積から12世紀以降と考えられる。

6号井戸跡 (Fig24、PL.7)

位置 X238、Y236 **形状等** 平面形は円形で、長軸は1.8mを測る。断面形はほぼ垂直に立ち上がり、上位では緩やかに開く。**出土遺物** なし。**重複** 2号住居跡と重複するが本遺構のほうが新しい。**時期** 12世紀以降と考えられる。

9号井戸跡 (Fig22、PL.7)

位置 X233、Y235グリッド **形状等** 平面形は円形で、断面形はほぼ垂直に立ち上がり、確認面付近では緩やかに開く。覆土は浅間C輕石を含む暗褐色土で炭化材を多く含んでいた。**出土遺物** 坯や椀を主体に、須恵器壺片や羽釜片も極めて少ないが出土した。大半の坯や椀は重なるように出土し、丁寧に廃棄された印象を受けるものもあった。3回に分けて遺物の取り上げを行なった結果、土器が集中して出土する範囲と出土が希薄な範囲があった。廃棄方向や廃棄方法に推るのかもしれないが、土器出土の希薄な箇所・範囲については有機物の廃棄も考えたい。なお、確認面から約1.1m下まで調査し、重量にして36.3kgの遺物が出土した。**重複** 3号住居跡と重複するが、本遺構のほうが新しい。**時期** 出土遺物から11世紀前半には井戸としての機能を失っていたものと推測される。底面までの調査はできなかったが、遺構は現地に残されている。

その他のピットについてはTab.6、土坑、井戸については、Tab. 9の各計測表に記載した。

性格不明遺構 (Fig22、PL.7)

位置 X236・237、Y237グリッド **形状** 長さ5.6m、上幅0.28m、下幅0.15m、深さ0.09mを測り。断面逆台形を呈する。雨落ち溝の可能性を考えて調査を行なったが、一部の箇所について鋸痕のような凹凸が確認されたため、人為的な掘削によるものと考えた。**主軸方向** N-82°-E **時期** 遺物が少なく、周囲にも同様の遺構が存在しないため不明である。

元総社蒼海



遺跡群 (95)



Fig.13 元總社舊海遺跡群 (95) 全体図

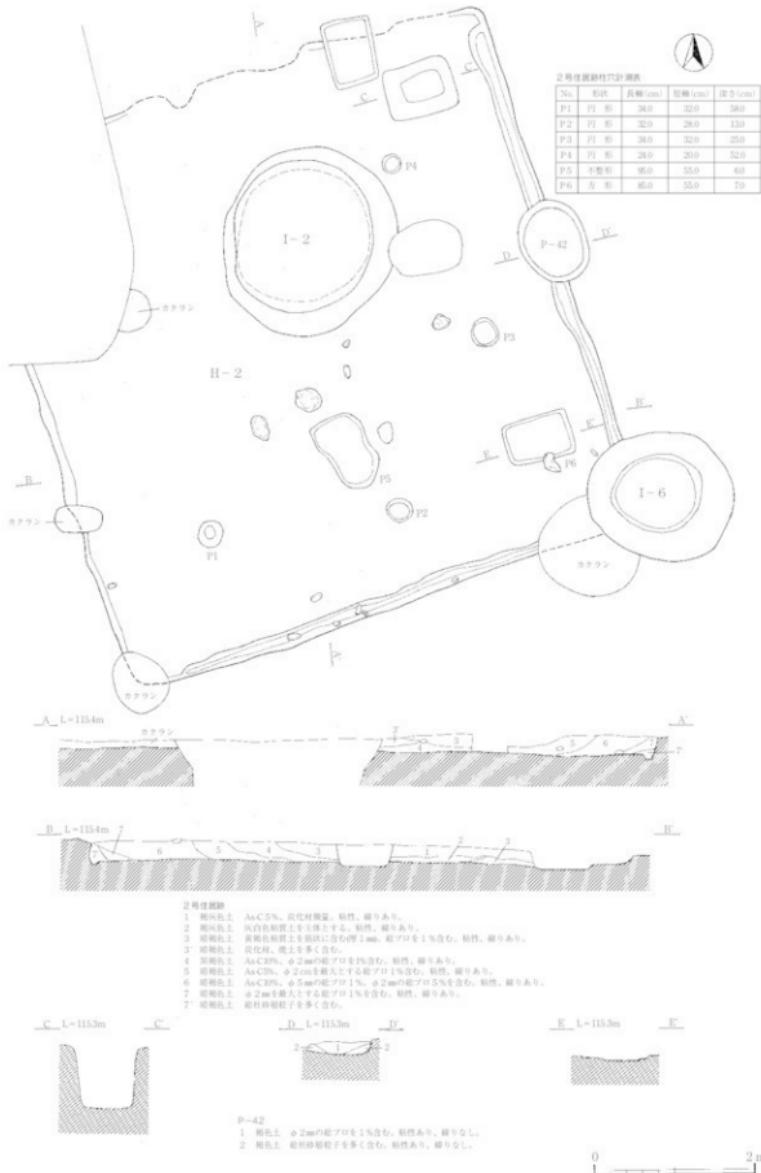


Fig.14 元経社菖蒲痕跡群(95) 2号住居跡

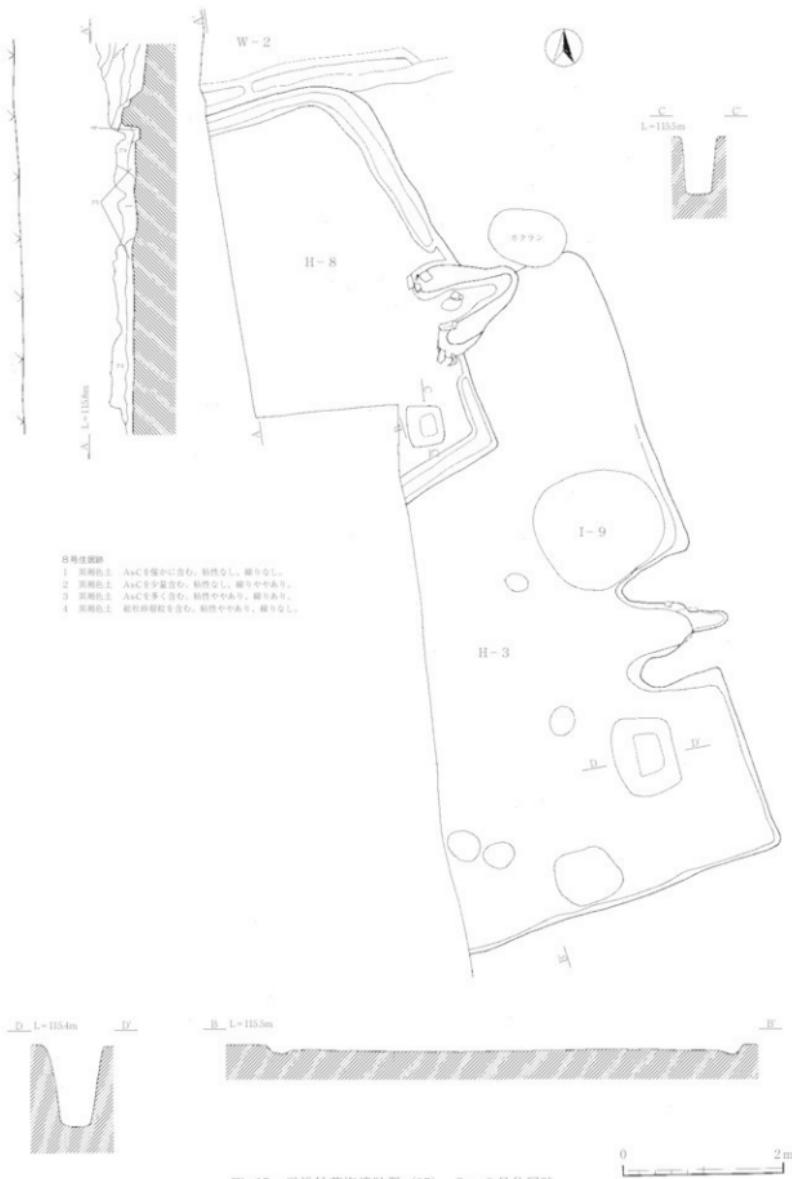


Fig.15 元總社舊海遺跡群 (95) 3・8号住居跡

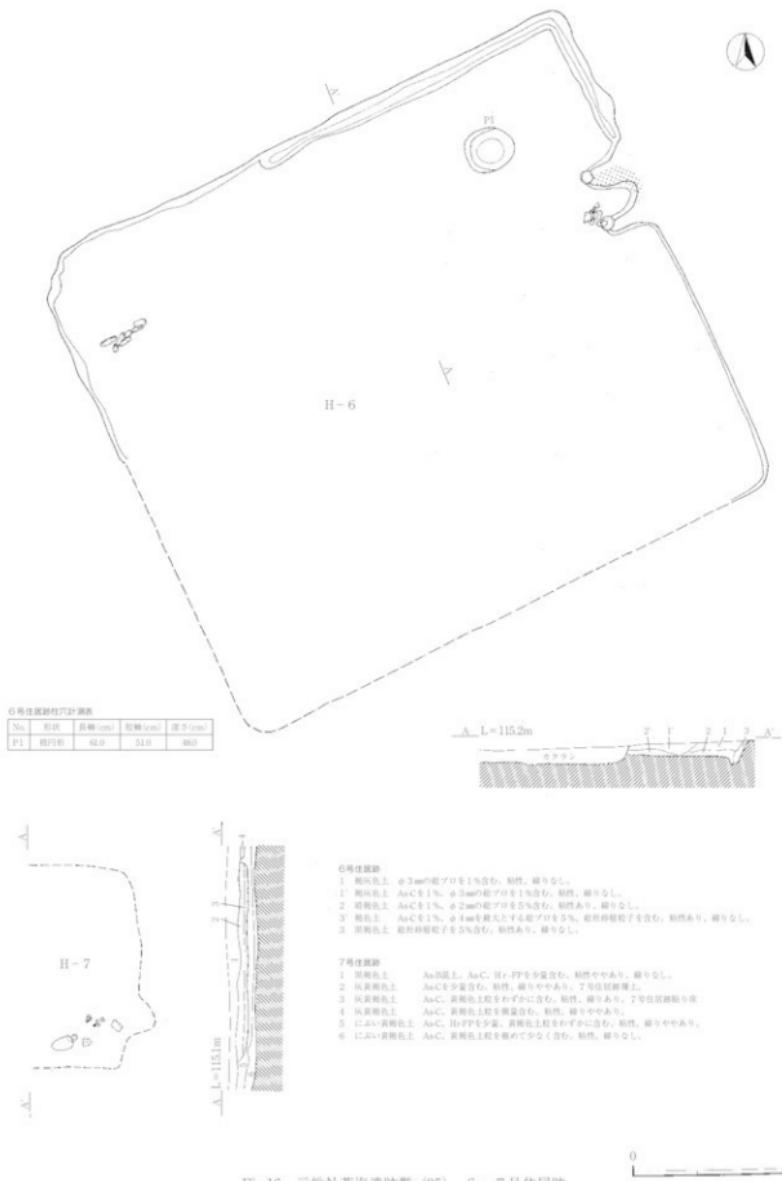
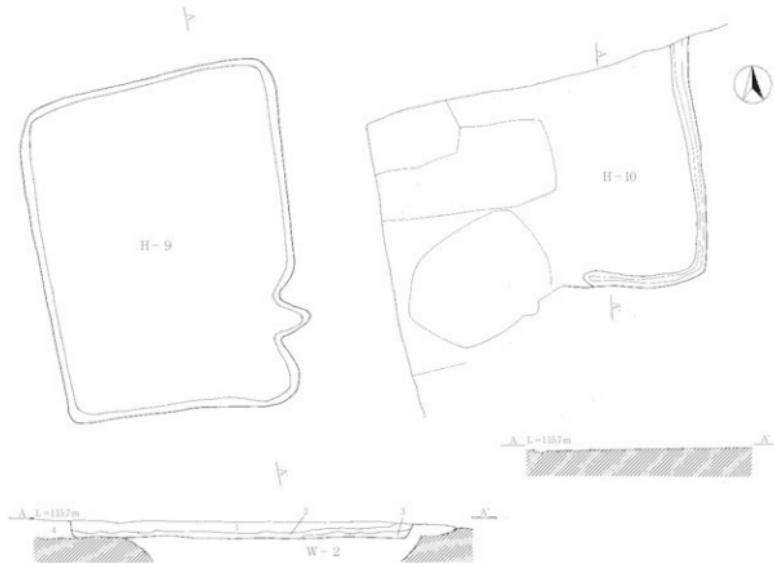


Fig.16 元總社舊海遺跡群(95) 6・7号住居跡



- 9号住居跡
 1 褐褐色土 内長粘土が鉛直に混在し、AsC。黄褐色土粒を多く含む。粘性。縫りやあり。
 2 褐褐色土 黄褐色土粒、前化粘土をわずかに含む。粘性なし。縫りやあり。
 3 深褐色土 炭化材多く、白色粘土を少混合。粘性。縫りややあり。
 4 褐褐色土 φ 1cmの黄褐色土ブロックを多く含む。粘性なし。縫りややあり。



Fig.17 元経社蒼海遺跡群 (95) 9～11号住居跡

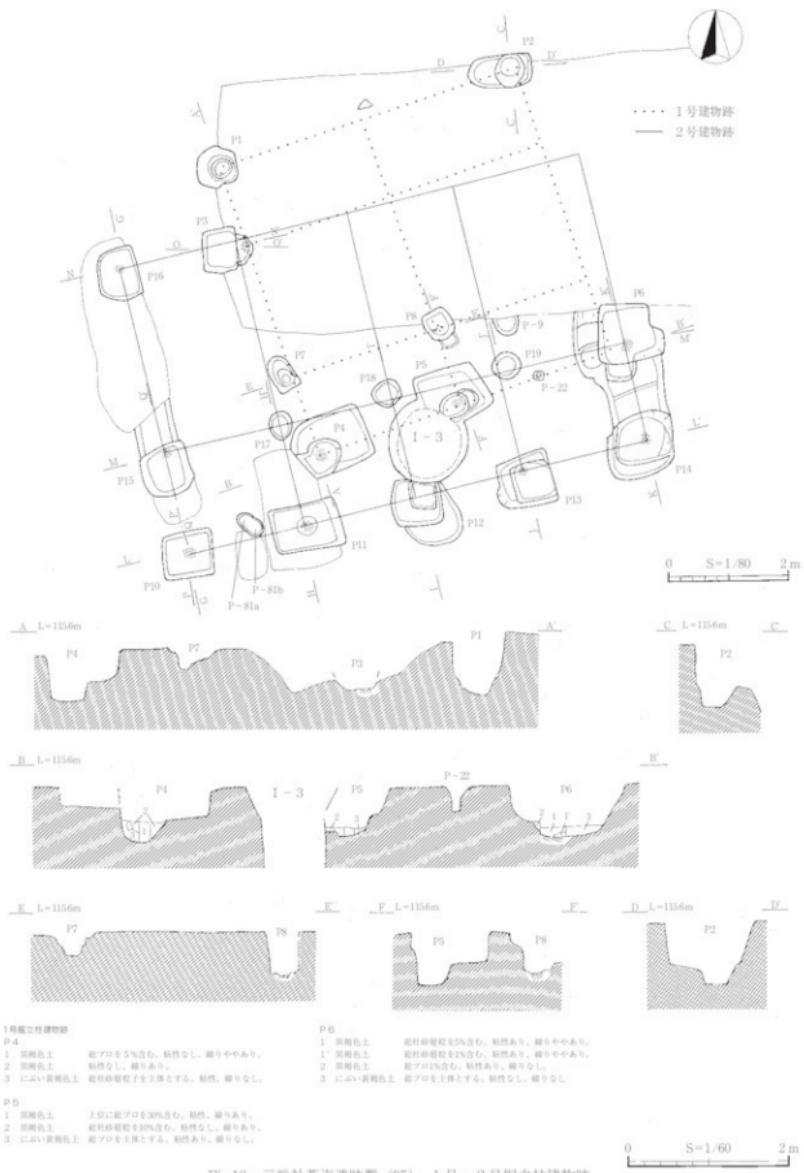


Fig.18 元総社舊海遺跡群 (95) 1号・2号掘立柱建物跡

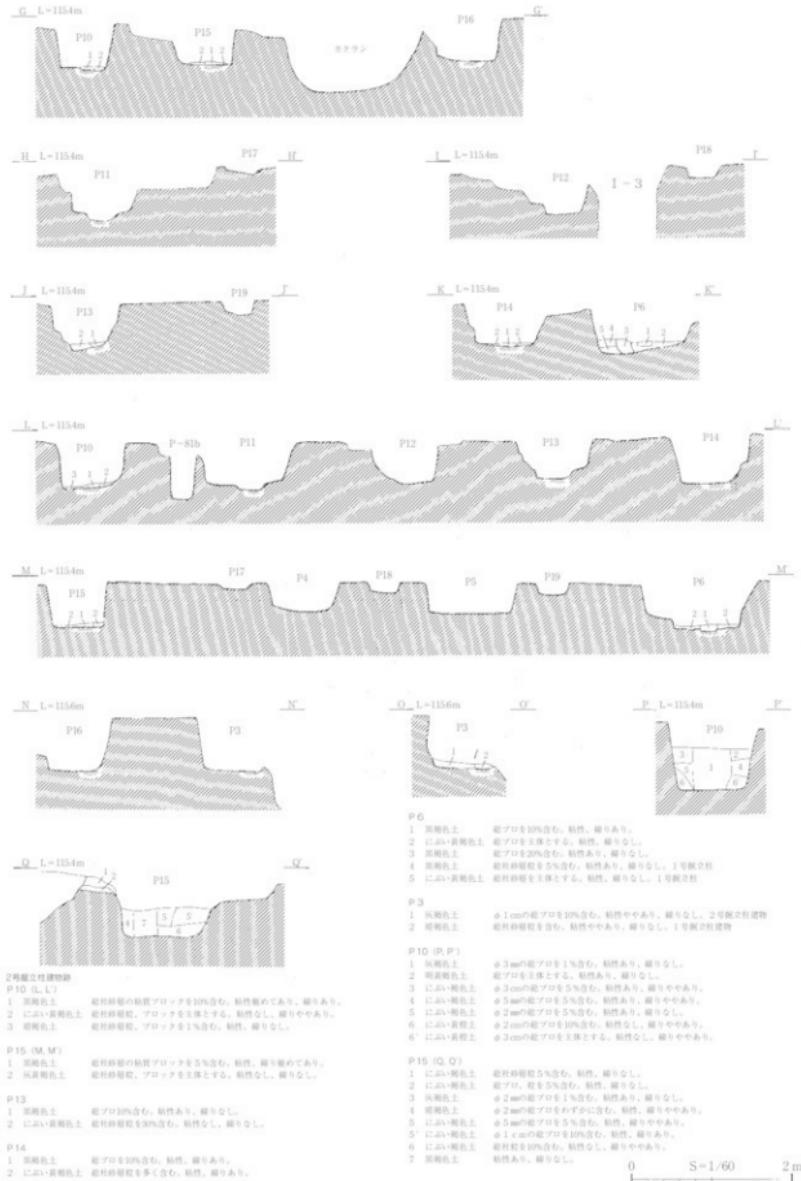


Fig.19 元総社舊海遺跡群 (95) 1号・2号掘立柱建物跡

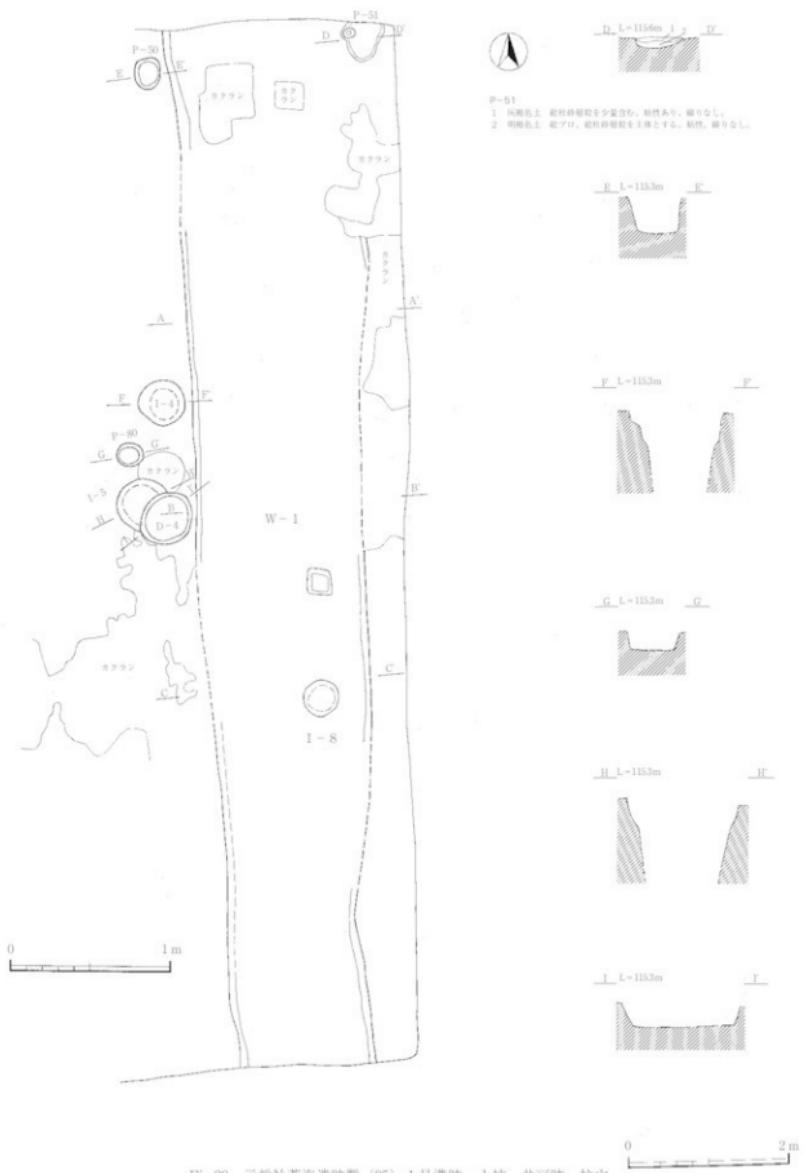


Fig.20 元總社舊海遺跡群(95) 1号溝跡、土坑、井戸跡、柱穴

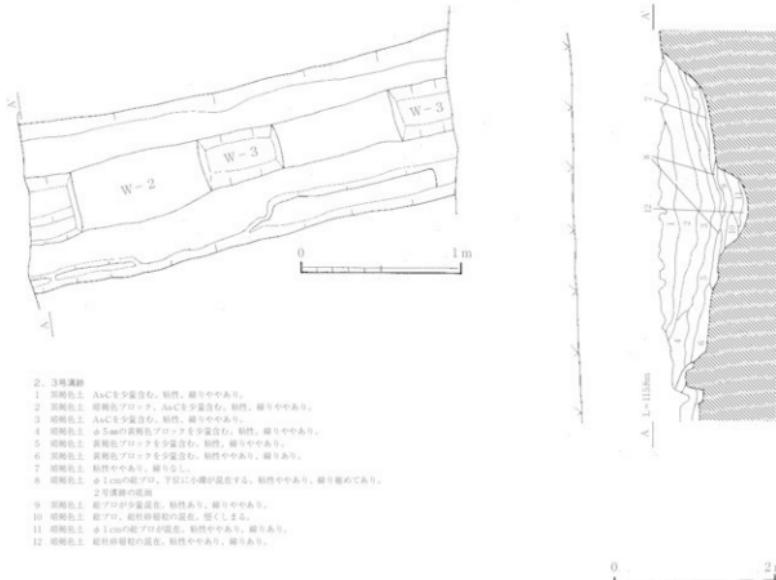
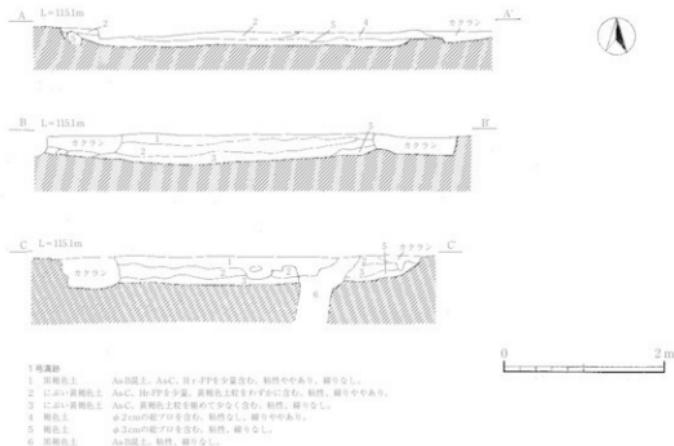
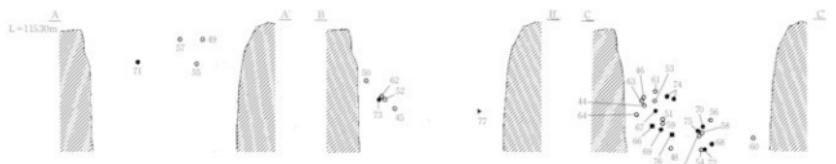
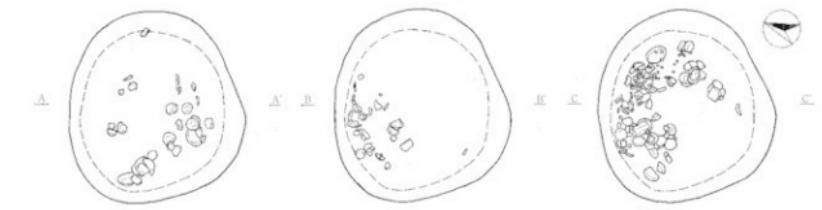


Fig.21 元總社蒼海遺跡群 (95) 1号～3号溝跡



○ 環 ■ 鈴 ▲ 羽釜 ■ 高台鈴 番号はFig.28-29の遺物番号と対応

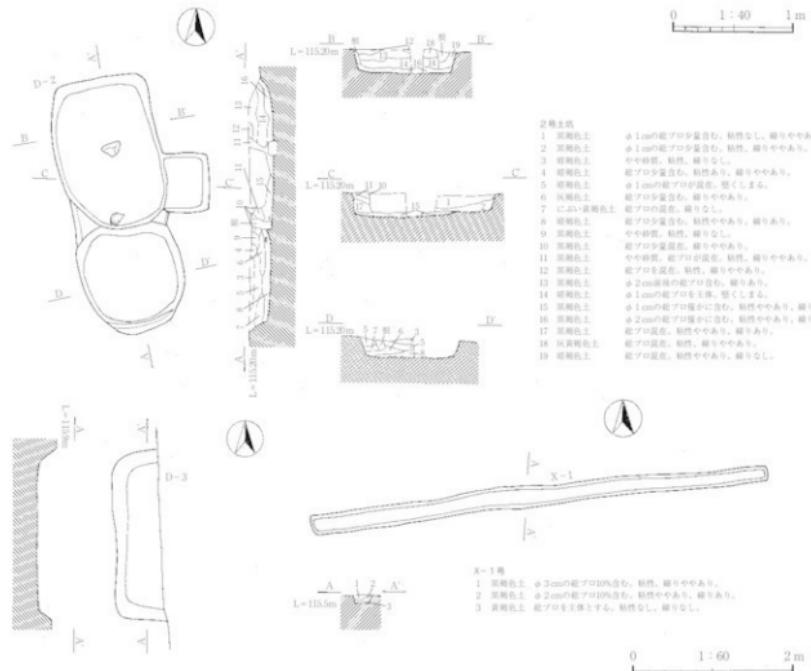


Fig.22 元總社蒼海遺跡群 (95) 9号井戸跡 2号・3号土坑、性格不明遺構

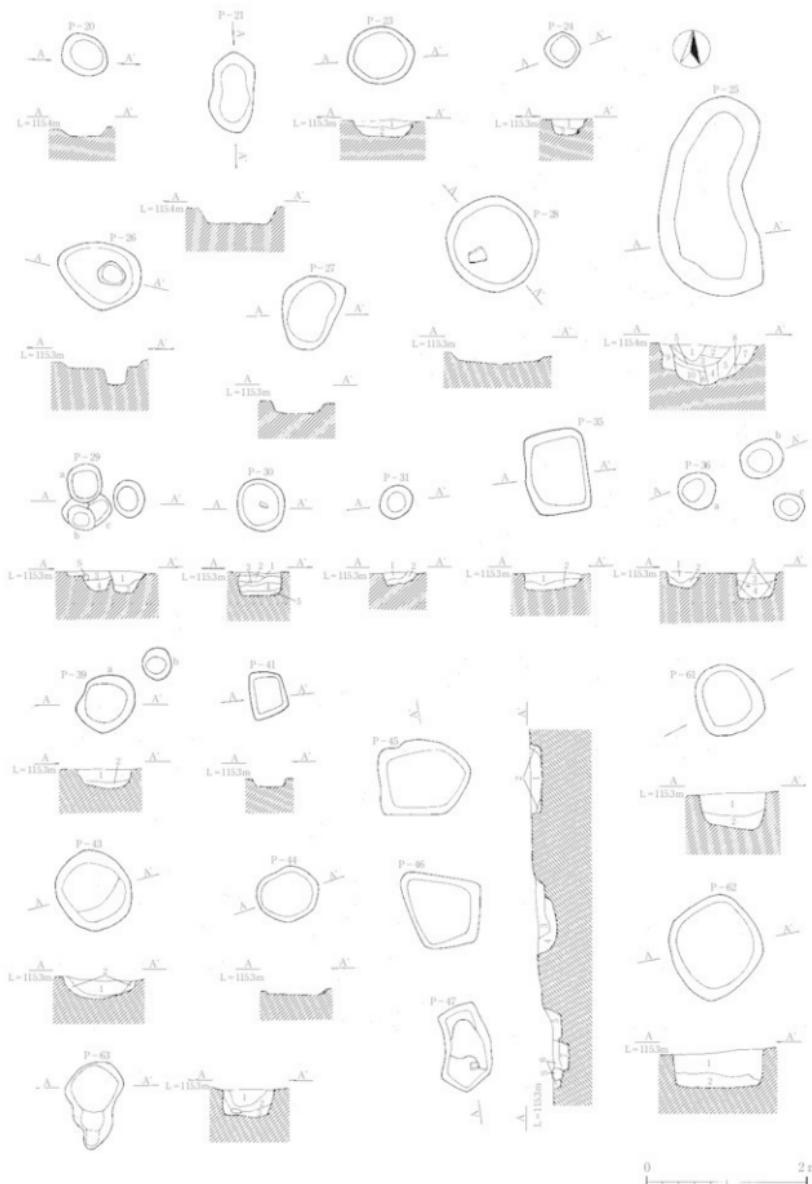
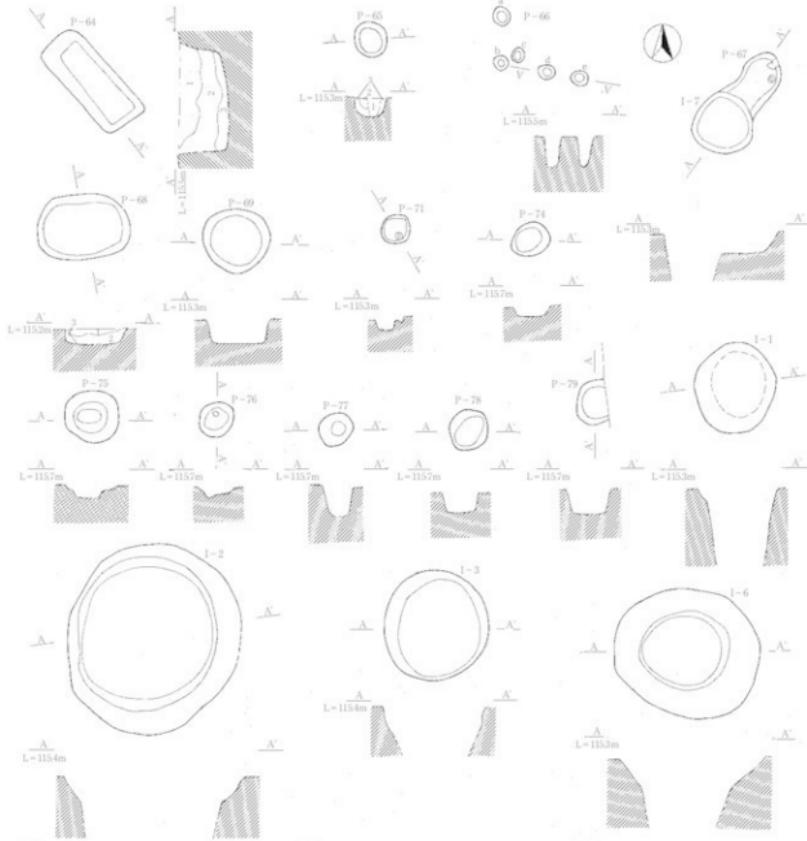


Fig.23 元代社蒼海遺跡群 (95) 土坑、柱穴



P-23
1 黒褐色土 ± 1 cmの層プロを10%。粘土質を1%。液化材を

2 黒褐色土 粘プロを主とする。粘性ややある。縫りなし。

P-24
1 黑褐色土 $\text{Av.C} 8.0\%$ 。粘土質を1%含む。粘性なし。

2 黑褐色土 粘性質2%含む。粘性あり。縫りなし。

P-25
1 黑褐色土 ± 5 cmの層プロを1%。粘土質が鉄粉に入る。粘

2 黑褐色土 $\text{Av.C} 11.7\%$ 。 ± 1 cmの層のプロを1%含む。粘性なし。

3 黑褐色土 ± 5 cmの層のプロを1%含む。粘性なし。

4 黑褐色土 硫化物と粘性質を多く含む。粘性あり。縫りなし。

5 黑褐色土 ± 5 cmの層のプロを1%。粘性あり。縫りなし。

6 黑褐色土 $\text{Av.C} 11.1\%$ 。 ± 1 cmの層の鉄粉に入る。粘性なし。

7 黑褐色土 ± 2 cmの層プロを10%含む。粘性あり。縫りなし。

8 黑褐色土 $\text{Av.C} 11.1\%$ 。鉄粉鉱物質を多く含む。粘性あり。縫りなし。

9 黑褐色土 ± 5 cmの層プロを1%含む。粘性なし。

10 黑褐色土 粘性質を多く含む。粘性あり。縫りなし。

P-26
1 黑褐色土 $\text{Av.C} 8.1\%$ 。 ± 1 cmの層プロを10%含む。粘性

2 黑褐色土 粘性あり。縫りなし。

3 黑褐色土 $\text{Av.C} 11.0\%$ 。表面に黒褐色土が多く入る。

4 黑褐色土 ± 5 cmの層プロを10%含む。粘性あり。縫りなし。

5 黑褐色土 $\text{Av.C} 11.0\%$ 。粘性あり。縫りなし。

6 黑褐色土 ± 2 cmの層プロを10%含む。粘性あり。縫りなし。

7 黑褐色土 $\text{Av.C} 11.0\%$ 。粘性あり。縫りなし。

8 黑褐色土 ± 2 cmの層を最大とする層プロを5%含む。粘性。縫

9 黑褐色土 素りなし。

P-30
1 黑褐色土 鉄質の液化材。 ± 2 mの層プロを5%含む。粘性。

2 黑褐色土 ± 5 cmの層プロを10%含む。粘性あり。縫りなし。

3 黑褐色土 ± 5 cmの層プロを11%含む。粘性あり。縫りなし。

4 黑褐色土 ± 5 cmの層プロを11%含む。粘性あり。縫りなし。

5 黑褐色土 ± 5 cmの層プロを11%含む。粘性あり。縫りなし。

6 黑褐色土 ± 5 cmの層プロを11%含む。粘性あり。縫りなし。

7 黑褐色土 ± 5 cmの層プロを11%含む。粘性あり。縫りなし。

8 黑褐色土 ± 5 cmの層プロを11%含む。粘性あり。縫りなし。

9 黑褐色土 ± 5 cmの層プロを11%含む。粘性あり。縫りなし。

10 黑褐色土 ± 5 cmの層プロを11%含む。粘性あり。縫りなし。

11 黑褐色土 ± 5 cmの層プロを11%含む。粘性あり。縫りなし。

12 黑褐色土 ± 5 cmの層プロを11%含む。粘性あり。縫りなし。

13 黑褐色土 ± 5 cmの層プロを11%含む。粘性あり。縫りなし。

14 黑褐色土 ± 5 cmの層プロを11%含む。粘性あり。縫りなし。

15 黑褐色土 ± 5 cmの層プロを11%含む。粘性あり。縫りなし。

16 黑褐色土 ± 5 cmの層プロを11%含む。粘性あり。縫りなし。

17 黑褐色土 ± 5 cmの層プロを11%含む。粘性あり。縫りなし。

18 黑褐色土 ± 5 cmの層プロを11%含む。粘性あり。縫りなし。

19 黑褐色土 ± 5 cmの層プロを11%含む。粘性あり。縫りなし。

20 黑褐色土 ± 5 cmの層プロを11%含む。粘性あり。縫りなし。

21 黑褐色土 ± 5 cmの層プロを11%含む。粘性あり。縫りなし。

22 黑褐色土 ± 5 cmの層プロを11%含む。粘性あり。縫りなし。

23 黑褐色土 ± 5 cmの層プロを11%含む。粘性あり。縫りなし。

24 黑褐色土 ± 5 cmの層プロを11%含む。粘性あり。縫りなし。

25 黑褐色土 ± 5 cmの層プロを11%含む。粘性あり。縫りなし。

26 黑褐色土 ± 5 cmの層プロを11%含む。粘性あり。縫りなし。

27 黑褐色土 ± 5 cmの層プロを11%含む。粘性あり。縫りなし。

28 黑褐色土 ± 5 cmの層プロを11%含む。粘性あり。縫りなし。

29 黑褐色土 ± 5 cmの層プロを11%含む。粘性あり。縫りなし。

30 黑褐色土 ± 5 cmの層プロを11%含む。粘性あり。縫りなし。

P-61
1 黑褐色土 ± 10 cmを主とする粘プロ10%。粘性あり。縫りなし。

2 黑褐色土 ± 10 cmの層プロを10%含む。粘性あり。縫りなし。

3 黑褐色土 ± 10 cmの層プロを10%含む。粘性あり。縫りなし。

4 黑褐色土 ± 10 cmの層プロを10%含む。粘性あり。縫りなし。

5 黑褐色土 ± 10 cmの層プロを10%含む。粘性あり。縫りなし。

6 黑褐色土 ± 10 cmの層プロを10%含む。粘性あり。縫りなし。

7 黑褐色土 ± 10 cmの層プロを10%含む。粘性あり。縫りなし。

8 黑褐色土 ± 10 cmの層プロを10%含む。粘性あり。縫りなし。

9 黑褐色土 ± 10 cmの層プロを10%含む。粘性あり。縫りなし。

10 黑褐色土 ± 10 cmの層プロを10%含む。粘性あり。縫りなし。

11 黑褐色土 ± 10 cmの層プロを10%含む。粘性あり。縫りなし。

12 黑褐色土 ± 10 cmの層プロを10%含む。粘性あり。縫りなし。

13 黑褐色土 ± 10 cmの層プロを10%含む。粘性あり。縫りなし。

14 黑褐色土 ± 10 cmの層プロを10%含む。粘性あり。縫りなし。

15 黑褐色土 ± 10 cmの層プロを10%含む。粘性あり。縫りなし。

16 黑褐色土 ± 10 cmの層プロを10%含む。粘性あり。縫りなし。

17 黑褐色土 ± 10 cmの層プロを10%含む。粘性あり。縫りなし。

18 黑褐色土 ± 10 cmの層プロを10%含む。粘性あり。縫りなし。

19 黑褐色土 ± 10 cmの層プロを10%含む。粘性あり。縫りなし。

20 黑褐色土 ± 10 cmの層プロを10%含む。粘性あり。縫りなし。

21 黑褐色土 ± 10 cmの層プロを10%含む。粘性あり。縫りなし。

22 黑褐色土 ± 10 cmの層プロを10%含む。粘性あり。縫りなし。

23 黑褐色土 ± 10 cmの層プロを10%含む。粘性あり。縫りなし。

24 黑褐色土 ± 10 cmの層プロを10%含む。粘性あり。縫りなし。

25 黑褐色土 ± 10 cmの層プロを10%含む。粘性あり。縫りなし。

26 黑褐色土 ± 10 cmの層プロを10%含む。粘性あり。縫りなし。

27 黑褐色土 ± 10 cmの層プロを10%含む。粘性あり。縫りなし。

28 黑褐色土 ± 10 cmの層プロを10%含む。粘性あり。縫りなし。

29 黑褐色土 ± 10 cmの層プロを10%含む。粘性あり。縫りなし。

30 黑褐色土 ± 10 cmの層プロを10%含む。粘性あり。縫りなし。

Fig.24 元総社看海遺跡群(95) 土坑、柱穴、井戸跡

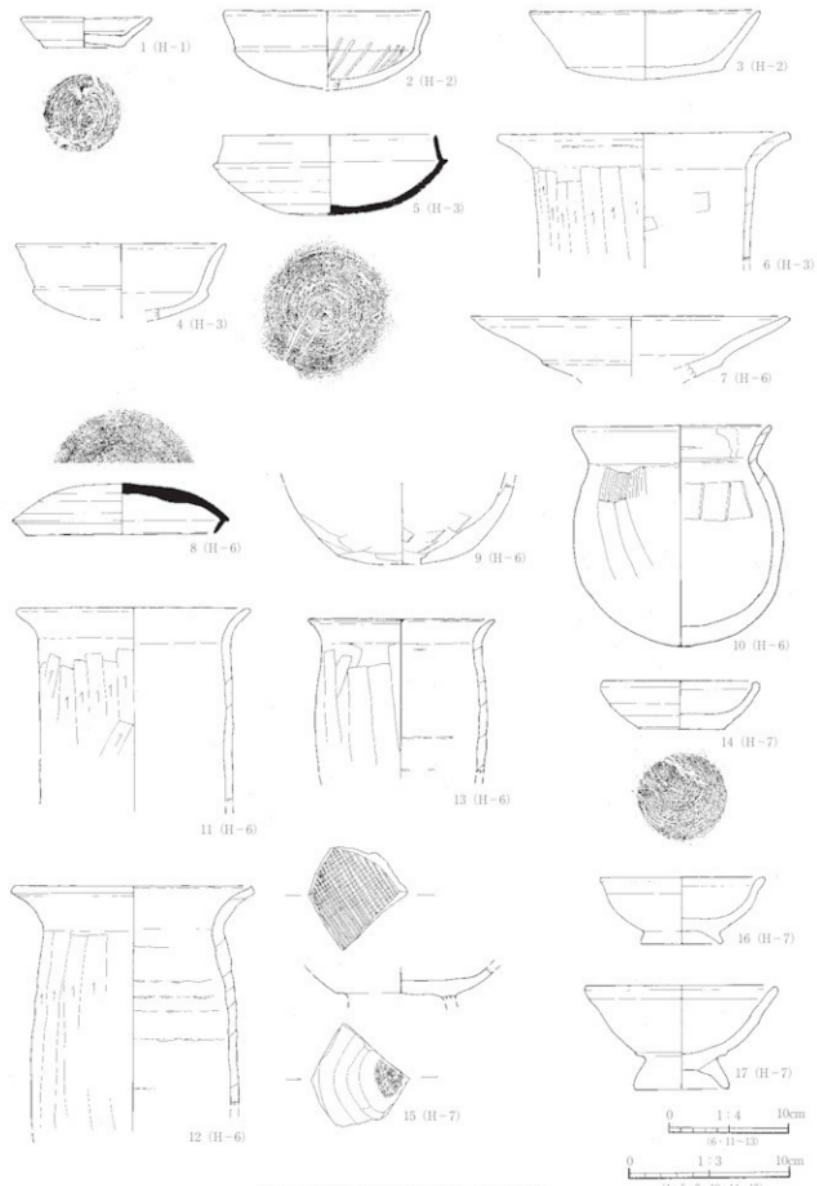


Fig.25 元龜社蒼海遺跡群 (95) 出土遺物①

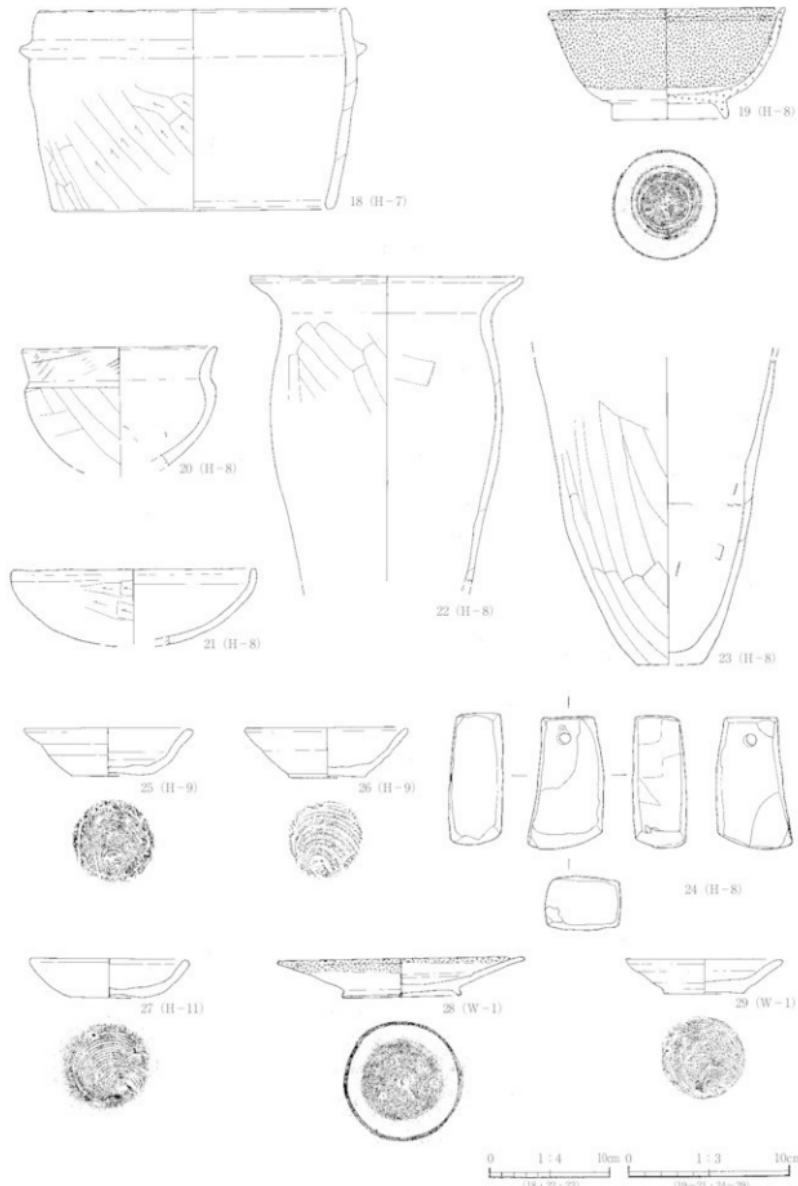


Fig.26 元祐社蒼海遺跡群(95)出土遺物②

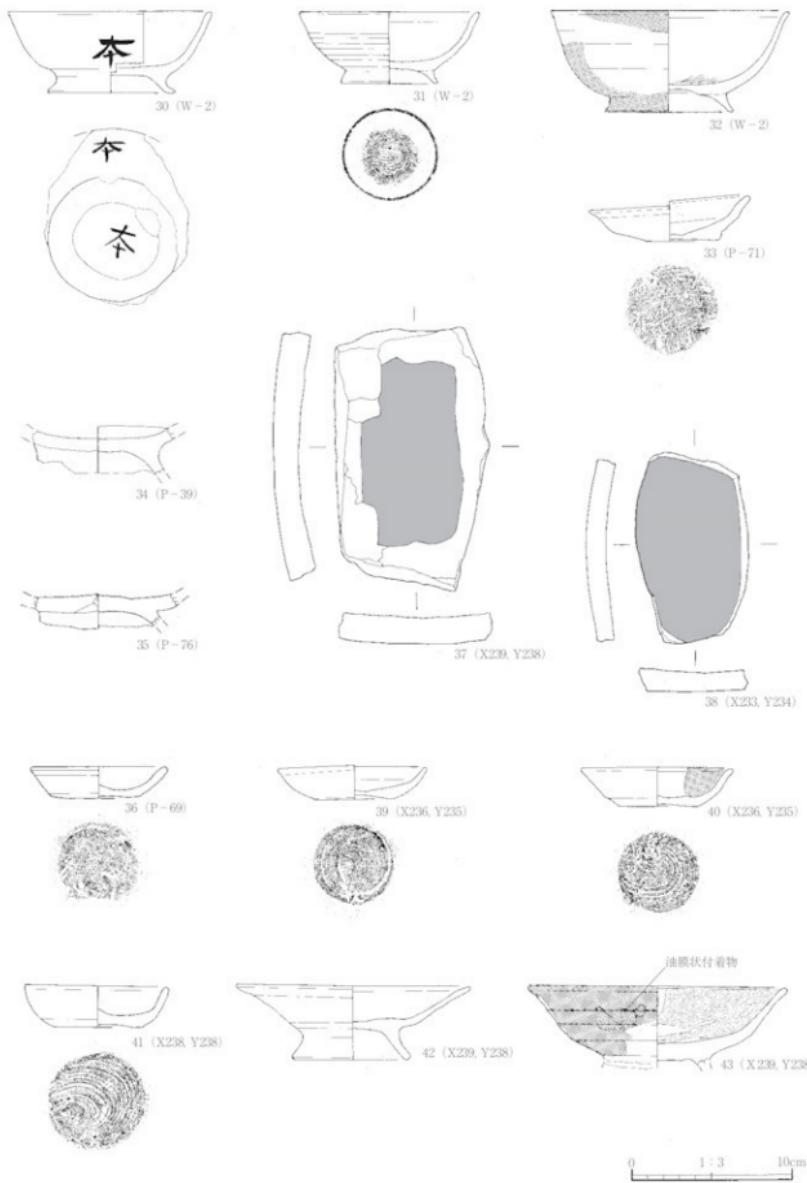


Fig.27 元祐社蒼海遺跡群 (95) 出土遺物③

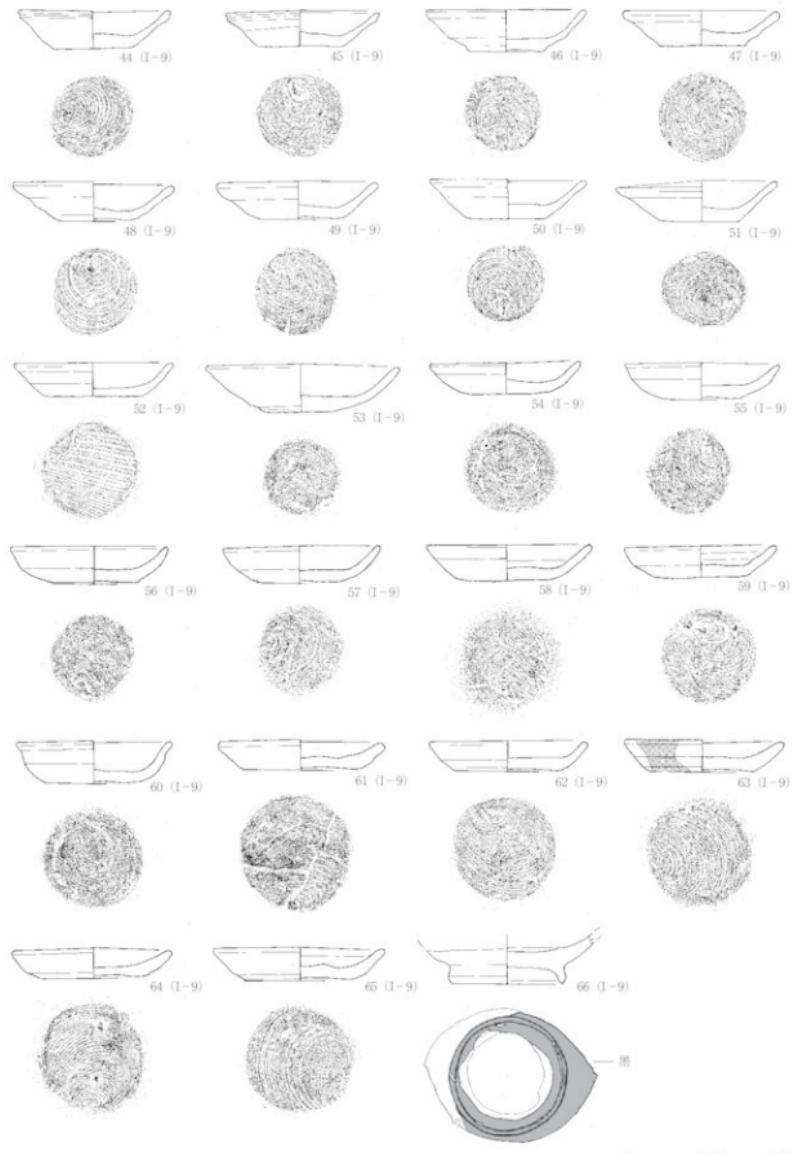


Fig.28 元祐社蒼海遺跡群 (95) 出土遺物④

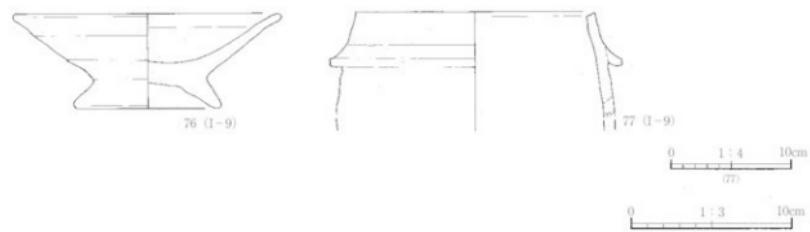
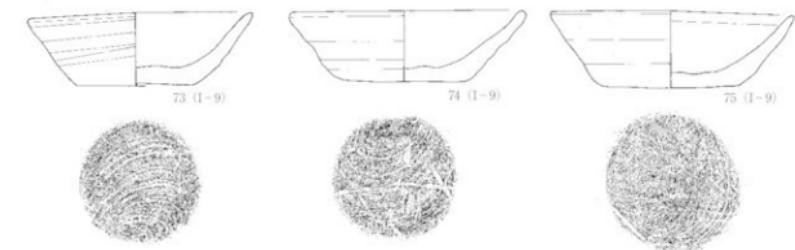
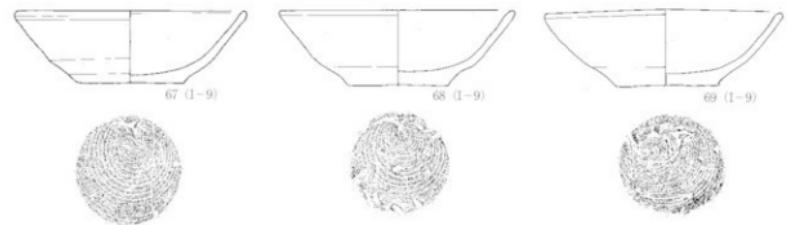


Fig.29 元祐社蒼海遺跡群 (95) 出土遺物⑤

Tab.5 元経社蒼海遺跡群(95) 摂立柱建物跡 柱掘り方
1号摂立柱建物跡

遺構名	位 置	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	形 状
P 1	X234 Y235	70	68	79.5	
P 2	X235 Y235	104	50	78	
P 3	X234 Y235	79	56	65.5	
P 4	X234 Y236	124	94	65.0	
P 5	X235 Y236	112	84	64.5	
P 6	X235.236 Y235	104	98	58.5	
P 7	X234 Y236	74	52	28.5	
P 8	X235 Y235	52	48	49.0	

計測表

2号摂立柱建物跡

遺構名	位 置	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	形 状
P10	X234 Y236	84	76	51.5	
P11	X234 Y236	114	74	36.5	
P12	X235 Y236	84	72	44.5	
P13	X235 Y236	64	60	54.5	
P14	X235.236 Y236	94	84	82	
P15	X233.234 Y236	82	80	43.5	
P16	X233 Y235	88	70	63	
P17	X234 Y236	46	40	8.5	
P18	X234 Y236	48	40	16	
P19	X235 Y236	48	46	69	

Tab.6 元経社蒼海遺跡群(95) ピット 計測表

遺構名	位 置	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	形 状
P-9	X235 Y235	40	28	11.5	円形
P-20	X233 Y236	58	50	16.5	円形
P-21	X236 Y236	98	48	26	円形
P-22	X235 Y236	65	60	31.5	円形
P-23	X233 Y237	76	70	19.5	円形
P-24	X233 Y238	46	46	20	円形
P-25	X235・236 Y237	250	98	45.5	椭円形
P-26	X237 Y237	108	76	16.5	円形
P-27	X237・238 Y237	90	68	15	椭円形
P-28	X238 Y236	118	114	13	円形
P-29a	X234 Y237	48	44	17	円形
P-29b	X234 Y237	38	30	38.5	円形
P-29c	X234 Y237	48	40	26	円形
P-30	X235 Y238	68	58	27	円形
P-31	X235 Y238	42	40	18	円形
P-32	X236・237 Y238	104	76	20	方形
P-36a	X236 Y238	50	46	20.5	円形
P-36b	X236 Y238	66	50	32	円形
P-36c	X236 Y238	38	34	17	円形
P-39	X237 Y237	80	72	29	円形
P-41	X238 Y235	60	46	11.5	方形
P-42	X237・238 Y235	102	80	15	椭円形
P-43	X238 Y235	100	98	33	円形
P-44	X238・239 Y235	80	64	8	円形
P-45	X239 Y234	116	92	16	椭円形

遺構名	位 置	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	形 状
P-46	X239 Y235	90	90	30	方形
P-47	X239 Y235	110	60	32.5	方形
P-61	X236 Y239	88	80	43.5	円形
P-62	X235 Y238	130	114	50	円形
P-63	X237 Y237	110	72	32.5	不整形
P-64	X236 Y238	138	58	64.5	方形
P-65	X235 Y238	42	40	21	円形
P-66	X233 Y237	22	21	15	円形
P-66b	X235 Y237	20	19	15	円形
P-66c	X235 Y237	20	18	14	円形
P-66d	X233 Y237	22	18	39	円形
P-66e	X235 Y237	22	20	37	円形
P-67	X233 Y238	144	46	32.5	椭円形
P-68	X238 Y236	118	80	30	椭円形
P-69	X239 Y237・238	80	74	32	円形
P-71	X239 Y237	36	36	15	円形
P-74	X234 Y234	50	46	13	円形
P-75	X233 Y234	70	68	16	円形
P-76	X233 Y234	50	44	14.5	円形
P-77	X232 Y235	44	42	28.5	円形
P-78	X234 Y234	54	50	25	円形
P-79	X234 Y234	64	38	29.5	円形
P-80	X239 Y237	70	55	21.5	円形
P-81a	X234 Y236	70	60	62	円形
P-81b	X234 Y236	60	60	55.5	円形

Tab.7 元總社蒼海遺跡群(95)住居跡一覧表

遺構名	位置	規模(m)		面積(m ²)	主軸方向	窓		周溝	主な出土遺物		
		東西	南北			壁現高(cm)	位置		構築材	土師器	須恵器
H-1	X234 Y235	不明	不明	不明	不明						
H-2	X236~X238 Y234~Y236	6.65	6.74	21 (39.05)	N-71°-E				有	坏	
H-3	X232~X233 Y234~Y237	(4.09)	(7.73)	9 (23.01)	N-72°-E	東壁南寄り	凝灰岩、粘土	有	环、長 柄甌	环、長 柄甌	
H-6	X237~X239 Y238~Y240	7.33	(6.42)	21 (46.02)	N-67°-E	東壁北寄り	長柄甌、粘土	有	甌、瓶、 甌	甌、瓶、 甌	
H-7	X240~X241 Y237~Y238	(1.45)	(2.70)	9 (3.48)	N-91°-E	東壁南東隅	凝灰岩、粘土		羽釜	环、高 台椀	
H-8	X232~X233 Y233~Y235	(2.56)	(5.22)	27 (11.27)	N-59°-E	東壁南寄り	甌、長柄甌、 粘土	有	环、長 柄甌		灰釉 陶器
H-9	X233~X234 Y232~Y233	3.25	4.08	23.5 (11.05)	N-79°-E	東壁南寄り	粘土			坏	
H-10	X241~X232 Y231~Y232	(1.58)	(3.04)	11.5 (5.51)	N-85°-E				有		瓦
H-11	X232~X234 Y233~Y234	(4.06)	(2.35)	6.5 (7.20)	N-63°-E					坏	

Tab.8 元總社蒼海遺跡群(95)溝跡 計測表

遺構名	位置	長さ(m)	深さ(cm)	上幅(cm)	下幅(cm)	主軸方向	断面形	時期
W-1	X240・X241 Y234~Y240	(25.6)	32	417	391	N-4°-W	逆台形	古代
W-2	X232~X234 Y232・Y233	(10.65)	51	405	350	N-13°-W	逆台形	古代
W-3	X232~X234 Y232・Y233	(10.65)	不明	85	45	N-15°-W	U字形	古代

Tab.9 元總社蒼海遺跡群(95)土坑・井戸跡 計測表

遺構名	位置	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	形状	出土遺物	備考
D-2	X238 Y237~238	311	131	30	長方形	土師器	
D-3	X234、Y233	210	(60)	22	長方形		
D-4	X239・240 Y237	141	120	32	円形		
I-1	X238 Y237	110	100	(75)	円形		
I-2	X237 Y235	236	209	(49)	円形	須恵甌、長須 甌	
I-3	X234・235 Y236	135	130	(38)	円形	土師器	
I-4	X239・240 Y236~237	118	110	(82)	円形		
I-5	X239、Y237	137	(123)	(83)	円形		
I-6	X238、Y236	181	159	(53)	円形		
I-7	X235、Y238	75	75	(33)	円形		
I-8	X240・241、Y238	91	82	(59)	円形		
I-9	X233、Y234・235	160	147	(110)	円形	須恵坏、須恵椀、須 恵甌、羽釜	

Tab. 10 元総社着海遺跡群(95) 出土遺物観察表

番号	出土遺物 種類	器種名	①口径 ②底径 ③底厚	④前 ⑤後 ⑥成形 ⑦調査 ⑧保存度	器種の特徴・整形・調整技術	登録 番号	備考	
1	日-1 床直	須恵器 环	①80 ②34.9	③16.0 ④2.19 ⑤3.4 ⑥3.4 ⑦3.4 ⑧2.4	①縫紗 ②酸化塩 ③縫 ④はぎ形	外面：輪縫整形、口縫部横ナデ。底部回転糸切り。口部に縫の痕跡。 内面：輪縫整形、口縫部横ナデ。		
2	日-2 覆土	土師器 环	①126 ②48.0 ③-	④126.0 ⑤48.0 ⑥3.0 ⑦3.0 ⑧3.0	①縫紗 ②酸化塩 ③縫 ④3.1/2	外面：体部～底部へハラ削り、口縫部横ナデ。 内面：ナメ調整後に斜位に削位の崩き。		
3	日-2 覆土	土師器 环	①140 ②42.0 ③-	④140.0 ⑤42.0 ⑥3.0 ⑦3.0 ⑧3.0	①縫紗 ②酸化塩 ③縫 ④3.1/2	外面：体部～底部へハラ削り、口縫部横ナデ。 内面：丁寧なナメ調整。		
4	日-3 覆土	土師器 环	①128 ②46.0 ③-	④128.0 ⑤46.0 ⑥3.0 ⑦3.0 ⑧3.0	①縫紗 ②酸化塩 ③縫 ④3.1/4	外面：体部～底部へハラ削り、口縫部横ナデ。 内面：横位のナメ調整。		
5	日-3 床直	須恵器 环	①130 ②50.0 ③-	④130.0 ⑤50.0 ⑥3.0 ⑦3.0 ⑧3.0	①縫紗 ②酸化塩 ③縫 ④3.4	外面：輪縫整形、底部回転ヘラ削り。底部に2条の縫跡。 内面：輪縫整形。	1	
6	日-3 床直	土師器 环	①240 ②105.0 ③-	④240.0 ⑤105.0 ⑥3.0 ⑦3.0 ⑧3.0	①縫紗 ②酸化塩 ③縫 ④3.1/2	外面：体部上位は斜位のハラ削り、底部～口縫部は横ナデ。 内面：横位を基本としたナメ。	4	
7	日-6 覆土	土師器 环	①196 ②40.0 ③-	④196.0 ⑤40.0 ⑥3.0 ⑦3.0 ⑧3.0	①縫紗 ②酸化塩 ③縫 ④3.1/2	外面：面部～底部へハラ削り、口縫部丁寧な横ナデ。 内面：ハラ状工具による丁寧な横ナデ。	カマド	
8	日-6 床直	須恵器 环	①118 ②31.0 ③-	④118.0 ⑤31.0 ⑥3.0 ⑦3.0 ⑧3.0	①縫紗 ②還元塩 ③縫 ④3.1/2	外面：輪縫整形、ハラ削り、3条の縫跡。 内面：輪縫整形。	1	
9	日-6 床直	土師器 环	①106 ②34.0 ③5.6	④106.0 ⑤34.0 ⑥3.0 ⑦3.0 ⑧3.0	①縫紗 ②酸化塩 ③縫 ④3.1/2	外面：体部下半～底部はハラ削り。 内面：ハラ状工具によるナメ削が跡書き。	5.7	
10	日-6 床直 小型便	土師器 环	①122 ②135.0 ③-	④122.0 ⑤135.0 ⑥3.0 ⑦3.0 ⑧3.0	①縫紗 ②酸化塩 ③縫 ④2.3	外面：底部～体部へハラ削り、上部は研毛目削。口縫部横ナデ。 内面：底部～頭部へハラ状工具による横ナデ。口縫部横ナデ、内面に炭化物付着。	8	
11	日-6 床直	土師器 环	①192 ②160.0 ③-	④192.0 ⑤160.0 ⑥3.0 ⑦3.0 ⑧3.0	①縫紗 ②酸化塩 ③縫 ④3.1/2	外面：体部上位は斜位のハラ削り。面部～口縫部は横ナデ。 内面：横位を基本とした丁寧なナメ。	4 カマド右袖	
12	日-6 床直	土師器 环	①201 ②150.0 ③-	④201.0 ⑤150.0 ⑥3.0 ⑦3.0 ⑧3.0	①縫紗 ②酸化塩 ③縫 ④3.1/2	外面：体部上位は斜位のハラ削り、面部～口縫部は横ナデ。口部は鋭角。 内面：横位を基本としたナメ。	2 カマド左袖	
13	日-6 床直	土師器 环	①152 ②125.0 ③-	④152.0 ⑤125.0 ⑥3.0 ⑦3.0 ⑧3.0	①縫紗 ②酸化塩 ③縫 ④3.1/2	外面：体部上位は斜位のハラ削り。面部～口縫部は横ナデ。 内面：横位を基本としたナメ。結晶片岩を含む。	3 カマド前	
14	日-7 床直	須恵器 环	①96 ②29.0 ③-	④96.0 ⑤29.0 ⑥3.0 ⑦3.0 ⑧3.0	①縫紗 ②酸化塩 ③縫 ④3.1/4	外面：輪縫整形、底部回転糸切り。 内面：輪縫整形、口縫部横ナデ。	1	
15	日-7 覆土 高台陶	須恵器 环	①- ②-	③100.0 ④3.4	①縫紗 ②還元塩 ③縫 ④3.4	外面：輪縫整形、底部回転糸切り後に高台貼付。 内面：黒色処理、被位の丁寧な焼き。		
16	日-7 覆土	須恵器 环	①100 ②41.0 ③5.0	④100.0 ⑤41.0 ⑥3.0 ⑦3.0 ⑧3.0	①縫紗 ②酸化塩 ③縫 ④1.4	外面：輪縫整形、口縫部横ナデ、高台貼付。 内面：丁寧な焼きナデ。		
17	日-7 床直 高台陶	須恵器 环	①118 ②64.0 ③5.4	④118.0 ⑤64.0 ⑥3.0 ⑦3.0 ⑧3.0	①縫紗 ②酸化塩 ③縫 ④1.3	外面：輪縫整形、口縫部横ナデ。高台貼付の痕跡が体部に残る。 内面：輪縫整形、横ナデ。		
18	日-7 床直 羽垂	土師器 环	①250 ②164.0 ③23.3	④250.0 ⑤164.0 ⑥3.0 ⑦3.0 ⑧3.0	①中縫 ②酸化塩 ③縫 ④1.5	外面：体部～ハラ削り後、開拓付。口縫部横ナデ。 内面：丁寧な横ナデ。被位も含んだ段階で、体部下位を切断した。	2	
19	日-8 床直	灰釉 环	①144 ②68.0 ③6.4	④144.0 ⑤68.0 ⑥3.0 ⑦3.0 ⑧3.0	①縫紗 ②還元塩 ③灰白 ④2.3	外面：輪縫整形、体部下位に溝が施される。 内面：口縫部に凹溝が施される。内側の施釉は潰掛け。	15 虎渓山1号	
20	日-8 覆土 小型便	土師器 环	①120 ②73.0 ③-	④120.0 ⑤73.0 ⑥3.0 ⑦3.0 ⑧3.0	①中縫 ②酸化塩 ③縫 ④2.3	外面：体部～面部はハラ削り。面部～口縫部横ナデ、工具痕が跡書き。 内面：丁寧な焼き。		
21	日-8 筋窓穴 覆土	土師器 环	①150 ②46.0 ③6.8	④150.0 ⑤46.0 ⑥3.0 ⑦3.0 ⑧3.0	①縫紗 ②酸化塩 ③縫 ④1.4	外面：底部～体部へハラ削り、口縫部横ナデ。 内面：丁寧な横ナデ。		
22	日-8 カマド	土師器 环	①- ②250.0 ③5.1	④- ⑤250.0 ⑥3.0 ⑦3.0 ⑧3.0	①縫紗 ②酸化塩 ③縫 ④2.0	外面：体部は斜位へハラ削り後、口縫部横ナデ。 内面：横ナメを基本としたナメ調整。	カマド 5 カマド右袖	
23	日-8 カマド	土師器 环	①220 ②210.0 ③-	④220.0 ⑤210.0 ⑥3.0 ⑦3.0 ⑧3.0	①中縫 ②酸化塩 ③縫 ④1.4	外面：底部～体部は斜位へハラ削り。 内面：ハラ状工具による横ナデ。	カマド 2 カマド左袖	
24	日-8 石製品 覆土	石材は鶴見石、形状は長方形を呈する。長8.0cm、幅4.5cm、厚さ3.5cm、重さ185gを計る。上位には直徑8mmの円形孔が空たれ、面上に穿孔の痕跡がある。四面は使用による磨き痕が残る。						
25	日-9 床直	須恵器 环	①103 ②30.0 ③4.7	④103.0 ⑤30.0 ⑥3.0 ⑦3.0 ⑧3.0	①縫紗 ②酸化塩 ③縫 ④3.4	外面：輪縫整形、口縫部横ナデ、底部回転糸切り。 内面：輪縫整形、横ナデ。		
26	日-9 覆土	須恵器 环	①100 ②23.0 ③4.6	④100.0 ⑤23.0 ⑥3.0 ⑦3.0 ⑧3.0	①縫紗 ②酸化塩 ③縫 ④1.4	外面：輪縫整形、口縫部横ナデ、底部回転糸切り。 内面：輪縫整形、横ナデ。底面に螺旋状のナメ痕。		
27	日-11	須恵器 环	①99 ②23.0 ③4.0	④99.0 ⑤23.0 ⑥3.0 ⑦3.0 ⑧3.0	①縫紗 ②酸化塩 ③縫 ④1.4 ⑤はぎ形	外面：輪縫整形、口縫部横ナデ、底部回転糸切り。 内面：輪縫整形、横ナデ。		
28	W-1 覆土 段級	灰釉 环	①150 ②23.0 ③7.3	④150.0 ⑤23.0 ⑥3.0 ⑦3.0 ⑧3.0	①縫紗 ②還元塩 ③明灰 ④1.2	外面：輪縫整形、底部回転ヘラ切り後に高台貼付。 内面：輪縫整形、見込み部に重ね焼き痕。施釉は潰掛け。	口縫部は人为的に打ち欠く	
29	W-1 覆土	須恵器 环	①96 ②21.0	④96.0 ⑤21.0 ⑥3.0 ⑦3.0 ⑧3.0	①縫紗 ②酸化塩 ③縫 ④3.4	外面：輪縫整形、口縫部横ナデ、底部回転糸切り。 内面：輪縫整形、横ナデ。		
30	W-2 覆土 高台陶	須恵器 环	①124 ②50.0 ③7.8	④124.0 ⑤50.0 ⑥3.0 ⑦3.0 ⑧3.0	①縫紗 ②酸化塩 ③縫 ④1.4 ⑤はぎ形	外面：輪縫整形、底部回転糸切り後、高台貼付。 内面：輪縫整形、丁寧な焼き。黑色處理。	体部、底面に「本」の墨書き。	
31	W-2 覆土 高台陶	須恵器 环	①110 ②44.0 ③6.0	④110.0 ⑤44.0 ⑥3.0 ⑦3.0 ⑧3.0	①縫紗 ②酸化塩 ③縫 ④2.3	外面：輪縫整形、底部回転糸切り後、高台貼付。 内面：輪縫整形、横ナデ。	黑色處理	
32	W-2 覆土 高台陶	須恵器 环	①144 ②62.0 ③8.0	④144.0 ⑤62.0 ⑥3.0 ⑦3.0 ⑧3.0	①縫紗 ②酸化塩 ③縫 ④2.3	外面：輪縫整形、底部回転糸切り後、高台貼付。体部に縫の痕跡。 内面：輪縫整形、丁寧な焼き。黑色處理。少量の炭化物付着。	黑色處理	

番号	出土遺構 層位	器種名	①口径 ②底径 ③高さ	④前土 ⑤焼成 ⑥色調 ⑦邊厚	⑧前土 ⑨焼成 ⑩色調 ⑪邊厚	器種の特徴・整形・調整技術	登録 番号	備考
33	P-71	須恵器 环	①10.0 ②7.28 ③47	④中粒 ⑤焼成炉 ⑥朱色 ⑦糊付	外面：輪郭整形、底部回転赤切り。口縁部横ナデ。 内面：輪郭整形、ナデ。	1		
34	P-39	須恵器 高台付	①~ ②(29) ③-	④中粒 ⑤焼成炉 ⑥朱色 ⑦糊付	外面：輪郭整形、底部回転赤切り後、高台貼付。 内面：輪郭整形、横ナデ。			
35	P-76	須恵器 高台付	①~ ②(20) ③-	④中粒 ⑤焼成炉 ⑥朱色 ⑦糊付	外面：輪郭整形、底部回転赤切り後、高台貼付。 内面：輪郭整形、横ナデ。			
36	P-69	須恵器 环	①8.4 ②19 ③52	④中粒 ⑤焼成炉 ⑥朱色 ⑦糊付	外面：輪郭整形、底部へ削り。口縁部横ナデ。 内面：輪郭整形、横ナデ。			
37	X229 Y228	須恵器 軒用鏡	長径15.0、幅径9.4, 厚さ15	④中粒 ⑤焼成炉 ⑥朱色 ⑦糊付	外面：椅子日の埋込み。 内面：椎に当て具痕が残り、十分な使用を窺わせる。			
38	X233 Y234	須恵器 軒用鏡	長径11.6、幅径6.8, 厚さ14	④中粒 ⑤焼成炉 ⑥朱色 ⑦糊付	外面：椅子日の埋込み。 内面：十分な使用を窺わせるほど研削されている。			
39	X236 Y235	須恵器 环	①9.0 ②22 ③50	④中粒 ⑤焼成炉 ⑥朱色 ⑦糊付	外面：輪郭整形、底部回転赤切り。口縁部横ナデ。 内面：輪郭整形、ナデ。			
40	X236 Y235	須恵器 环	①9.2 ②24 ③47	④中粒 ⑤焼成炉 ⑥朱色 ⑦糊付	外面：輪郭整形、底部回転赤切り。口縁部横ナデ。外面に保鉄跡。 内面：輪郭整形、ナデ。内面に保鉄跡、化粧物付着。	3		
41	X238 Y238	須恵器 环	①8.8 ②25 ③51	④中粒 ⑤焼成炉 ⑥朱色 ⑦糊付	外面：輪郭整形、底部回転赤切り。口縁部横ナデ。 内面：輪郭整形、横ナデ。保鉄跡。	10		
42	X239 Y238	須恵器 高台付	①14.3 ②45 ③69	④中粒 ⑤焼成炉 ⑥朱色 ⑦糊付	外面：輪郭整形、口縁部横ナデ、高台貼付。 内面：輪郭整形、横ナデ。			
43	X239 Y238	須恵器 高台付	①15.8 ②(47) ③~	④中粒 ⑤焼成炉 ⑥朱色 ⑦糊付	外面：輪郭整形、口縁部横ナデ、高台貼付。外面に油膜状の鉄跡。 内面：輪郭整形、横ナデ。内面に炭化物の付着が覗く。			
44	I-9 覆土	須恵器 环	①9.3 ②25 ③48	④中粒 ⑤焼成炉 ⑥朱色 ⑦糊付	外面：輪郭整形、体部～口縁部横ナデ、口部に凹線。底部回転赤切り。 内面：輪郭整形、横ナデ。	84	环I型	
45	I-9 覆土	須恵器 环	①9.4 ②24 ③51	④中粒 ⑤焼成炉 ⑥朱色 ⑦糊付	外面：輪郭整形、体部～口縁部横ナデ、口部に凹線。底部回転赤切り。 内面：輪郭整形、横ナデ。	87	环I型	
46	I-9 覆土	須恵器 环	①9.7 ②26 ③46	④中粒 ⑤焼成炉 ⑥朱色 ⑦糊付	外面：輪郭整形、体部～口縁部横ナデ、底部回転赤切り。 内面：輪郭整形、横ナデ。	70	环I型	
47	I-9 覆土	須恵器 环	①9.5 ②23 ③53	④中粒 ⑤焼成炉 ⑥朱色 ⑦糊付	外面：輪郭整形、体部～口縁部横ナデ、底部回転赤切り。 内面：輪郭整形、横ナデ。	108	环I型	
48	I-9 覆土	須恵器 环	①9.9 ②24 ③48	④中粒 ⑤焼成炉 ⑥朱色 ⑦糊付	外面：輪郭整形、体部～口縁部横ナデ、底部回転赤切り。 内面：輪郭整形、横ナデ。底面に系切り痕跡。	123	环I型	
49	I-9 覆土	須恵器 环	①9.8 ②23 ③48	④中粒 ⑤焼成炉 ⑥朱色 ⑦糊付	外面：輪郭整形、体部～口縁部横ナデ、底部回転赤切り。 内面：輪郭整形、横ナデ。	3	环I型	
50	I-9 覆土	須恵器 环	①9.6 ②24 ③44	④中粒 ⑤焼成炉 ⑥朱色 ⑦糊付	外面：輪郭整形、体部～口縁部横ナデ、底部回転赤切り。 内面：輪郭整形、横ナデ。	38	环I型	
51	I-9 覆土	須恵器 环	①9.8 ②25 ③48	④中粒 ⑤焼成炉 ⑥朱色 ⑦糊付	外面：輪郭整形、体部～口縁部横ナデ、底部回転赤切り。 内面：輪郭整形、横ナデ。	103	环I型	
52	I-9 覆土	須恵器 环	①9.7 ②20 ③53	④中粒 ⑤焼成炉 ⑥朱色 ⑦糊付	外面：輪郭整形、体部～口縁部横ナデ、底部静止赤切り。 内面：輪郭整形、横ナデ。	73	环I型	
53	I-9 覆土	須恵器 环	①11.8 ②49 ③46	④中粒 ⑤焼成炉 ⑥朱色 ⑦糊付	外面：輪郭整形、体部～口縁部横ナデ、底部回転赤切り。体部下位に糊付着。 内面：輪郭整形、横ナデ。	80	环I型	
54	I-9 覆土	須恵器 环	①9.2 ②20 ③58	④中粒 ⑤焼成炉 ⑥朱色 ⑦糊付	外面：輪郭整形、口縁部横ナデ、底部回転赤切り。 内面：輪郭整形、横ナデ。	126	环II型	
55	I-9 覆土	須恵器 环	①9.4 ②20 ③46	④中粒 ⑤焼成炉 ⑥朱色 ⑦糊付	外面：輪郭整形、口縁部横ナデ、底部回転赤切り。 内面：輪郭整形、横ナデ。	25	环II型	
56	I-9 覆土	須恵器 环	①9.6 ②22 ③48	④中粒 ⑤焼成炉 ⑥朱色 ⑦糊付	外面：輪郭整形、口縁部横ナデ、底部回転赤切り。 内面：輪郭整形、口縁部横ナデ。	92	环II型	
57	I-9 覆土	須恵器 环	①9.6 ②22 ③52	④中粒 ⑤焼成炉 ⑥朱色 ⑦糊付	外面：輪郭整形、口縁部横ナデ、底部回転赤切り。 内面：輪郭整形、口縁部横ナデ。	2	环II型	
58	I-9 覆土	須恵器 环	①10.1 ②22 ③55	④中粒 ⑤焼成炉 ⑥朱色 ⑦糊付	外面：輪郭整形、口縁部横ナデ、底部回転赤切り。 内面：輪郭整形、横ナデ。	115	环II型	
59	I-9 覆土	須恵器 环	①9.2 ②19 ③58	④中粒 ⑤焼成炉 ⑥朱色 ⑦糊付	外面：輪郭整形、口縁部横ナデ、底部回転赤切り。 内面：輪郭整形、口縁部横ナデ。	105	环II型	
60	I-9 覆土	須恵器 环	①9.5 ②26 ③58	④中粒 ⑤焼成炉 ⑥朱色 ⑦糊付	外面：輪郭整形、口縁部横ナデ、底部回転赤切り。 内面：輪郭整形、口縁部横ナデ。	101	环II型	
61	I-9 覆土	須恵器 环	①9.7 ②18 ③70	④中粒 ⑤焼成炉 ⑥朱色 ⑦糊付	外面：輪郭整形、体部～口縁部横ナデ、底部は左回転赤切り。 内面：輪郭整形、横ナデ。	48	环II型	
62	I-9 覆土	須恵器 环	①9.7 ②18 ③64	④中粒 ⑤焼成炉 ⑥朱色 ⑦糊付	外面：輪郭整形、体部～口縁部横ナデ、底部は左回転赤切り。 内面：輪郭整形、横ナデ。	52	环II型	
63	I-9 覆土	須恵器 环	①9.8 ②19 ③66	④中粒 ⑤焼成炉 ⑥朱色 ⑦糊付	外面：輪郭整形、体部～口縁部横ナデ、底部は左回転赤切り。 内面：輪郭整形、横ナデ。外側に保鉄着。	86	环II型	
64	I-9 覆土	須恵器 环	①9.8 ②18 ③64	④中粒 ⑤焼成炉 ⑥朱色 ⑦糊付	外面：輪郭整形、体部～口縁部横ナデ、底部は左回転赤切り。 内面：輪郭整形、横ナデ。	89	环II型	

番号	出土遺構 層位	器種名	①口径 ②底径 ③色調 ④底存度	⑤胎土 ⑥焼成 ⑦底径	器種の特徴・整形・調整技術	登録 番号	備考
65	I-9 覆土	須恵器 环	①10.5 ②20 ③64	④磨耗 ⑤にぶい質感 ⑥はく完形	外面：輪轂整形、部底～口縁部横ナギ、底部は左回転糸切り。 内面：輪轂整形、横ナギ。	108	環蓄類
66	I-9 覆土 高台陶	須恵器 环	①~ ②(31) ③68	④磨耗 ⑤発光焰 ⑥底部のみ	外面：輪轂整形、底部回転糸切り後、高台貼付。墨の痕跡。 内面：輪轂整形、見込み部に重ね焼き軌。	117	和田型、胎土は人為的に打ちにくく。
67	I-9 覆土	須恵器 环	①4.2 ②44 ③66	④磨耗 ⑤発化焰 ⑥にぶい質 ⑦完形	外面：輪轂整形、部底～口縁部横ナギ、底部回転糸切り。 内面：輪轂整形、横ナギ。	98	輪上類
68	I-9 覆土	須恵器 环	①4.2 ②46 ③62	④磨耗 ⑤発化焰 ⑥にぶい質 ⑦完形	外面：輪轂整形、部底～口縁部横ナギ、底部回転糸切り。 内面：輪轂整形、横ナギ。	109	輪上類
69	I-9 覆土	須恵器 环	①4.6 ②42 ③64	④磨耗 ⑤発化焰 ⑥にぶい質 ⑦完形	外面：輪轂整形、部底～口縁部横ナギ、底部回転糸切り。 内面：輪轂整形、横ナギ。	111	輪上類
70	I-9 覆土	須恵器 环	①5.4 ②51 ③69	④磨耗 ⑤にぶい質 ⑥完形	外面：輪轂整形、口縁部横ナギ、底部回転糸切り。 内面：輪轂整形、各部に輪轂調整の痕跡。	94	輪上類
71	I-9 覆土	須恵器 环	①5.0 ②50 ③62	④磨耗 ⑤発化焰 ⑥にぶい質 ⑦完形	外面：輪轂整形、口縁部横ナギ、底部回転糸切り。 内面：輪轂整形、部底に輪轂調整の痕跡。	21	輪上類
72	I-9 覆土	須恵器 环	①4.8 ②47 ③60	④磨耗 ⑤発化焰 ⑥にぶい質 ⑦完形	外面：輪轂整形、口縁部横ナギ、底部回転糸切り。 内面：輪轂整形、部底に輪轂調整の痕跡。	126	輪上類
73	I-9 覆土	須恵器 环	①3.7 ②44 ③73	④磨耗 ⑤発化焰 ⑥にぶい質 ⑦3/4	外面：輪轂整形、部底中位～口縁部横ナギ、底部は左回転糸切り。 内面：輪轂整形、横ナギ。	51	輪蓄類
74	I-9 覆土	須恵器 环	①4.4 ②43 ③72	④磨耗 ⑤発化焰 ⑥にぶい質 ⑦4/5	外面：輪轂整形、部底中位～口縁部横ナギ、底部は左回転糸切り。 内面：輪轂整形、横ナギ。	4142	輪蓄類
75	I-9 覆土	須恵器 环	①4.9 ②47 ③83	④磨耗 ⑤発化焰 ⑥にぶい質 ⑦完形	外面：輪轂整形、部底中位～口縁部横ナギ、底部は左回転糸切り。 内面：輪轂整形、横ナギ。	107	輪蓄類
76	I-9 覆土 高台陶	須恵器 环	①16.4 ②58 ③85	④磨耗 ⑤発化焰 ⑥にぶい質 ⑦2/3	外面：輪轂整形、口縁部横ナギ、高台貼付後にナギ。 内面：輪轂整形、横ナギ。	110	
77	I-9 覆土	羽量	①(19.4) ②(77) ③~	④磨耗 ⑤発化焰 ⑥にぶい質 ⑦(4)3/1/3	外面：体部へラブリ後にナギ。開貼付後に口縁部横ナギ。 内面：丁寧な横ナギ。	75	

(注) ①層位は、「床直」床面より10cm以内の層位から検出、「覆土」床面より10cmを超える層位から出土の2段階に分けた。竈内の検出については、「竈内」と記載した。

②口径、器蓋の単位は4cmである。既存値を〔 〕、復元値を〔 〕で示した。

③胎土は、細粒（0.9mm以下）、中粒（1.0～19mm以下）、粗粒（20mm以上）とし、特徴的な胎土が入る場合に胎土名等を記載した。

④焼成は、土器器、須恵器については、発化焰、発光焰の別を示した。

3 元総社蒼海遺跡群（102）

（1）溝跡

1号溝跡（Fig.31、PL.8）

位置 X194～196、Y212グリッド **形状等** 長さは9.3m、幅0.7m、深さ0.72mの範囲を調査した。確認面から約0.5mまではほぼ垂直に落ち込み、その後約60°の角度で掘り下がる。 **主軸方向** N-80°-E **重複** 2号溝跡と重複するが、本造構のほうが新しい。 **時期** 大半は調査範囲外に存在するため全容を把握することはできなかったが、本調査区と隣接する元総社蒼海遺跡群（36）5区で検出された1号溝跡、元総社蒼海遺跡群（23）の25・26地点で確認された1号溝跡と同一であり、蒼海城本丸と二の丸の間を東西方向に走行する堀跡である。遺物は出土しなかったが、周辺の調査から15世紀後半以降と考えられる。

2号溝跡（Fig.31、PL.8）

位置 X195、Y212グリッド **形状等** 調査範囲での長さは2.2m、最大上幅1.25m、最大下幅1.0m、深さ0.25mを測る。底面標高は南で115.97m、北で115.98mとほぼ平坦である。形状は逆台形を呈し、覆土（4層）に硬化が見受けられることから、溝としての機能が失われた後は道として利用されていたことが想起される。 **主軸方向** N-3°-W。 **重複** 1号溝跡と2号井戸跡と重複するが、本造構は最も古い。 **時期** 調査した範囲は狭かったが、隣接する元総社蒼海遺跡群（57）の2号溝跡と同一である。遺物は出土しなかったが、重複関係、覆土の堆積状況から古代の溝跡と考えたい。

3号溝跡（Fig.30、PL.8）

位置 X197、Y212グリッド **形状等** 調査範囲での長さは2.45m、上幅1.75m、下幅0.7m、深さ0.4mを測る。底面標高は南で115.88m、北で115.89mとほぼ平坦である。形状は逆台形を呈し、底面ではU字形となる。南側で緩やかに東へ開く。両側に轍状の窪みを有し、轍間は1.6mを測る。覆土（5・6層）に硬化が見受けられるため、道としての利用も考えられる。 **主軸方向** N-10°-W **時期** 出土遺物から10世紀後半から11世紀ごろと考えられる。

（2）土坑、井戸跡、落ち込み

1号土坑（Fig.30）

位置 X196、Y212グリッド **形状** 円形。底面は外側が若干窪む。 **時期** 出土遺物がまったく無いが、覆土の堆積状況や底面形状から近世以降の桶を埋設したし尿施設と考えられる。

1号井戸跡（Fig.30、PL.8）

位置 X197・198、Y212グリッド **形状等** 半分は調査区外になるが、直径4.0mを測ると思われ、平面形は円形、断面形はほぼ垂直に立ち上がり、確認面付近では緩やかに開く。覆土の堆積から2～4層は人為的な埋め戻し、5～7層は自然堆積が考えられる。 **出土遺物** 4層より古代の土器片が出土したが混入と考えられる。 **時期** 覆土の堆積状況から近世以降には埋め戻されていた可能性が考えられる。

2号井戸跡（Fig.31）

位置 X195、Y212グリッド **形状等** 最大直径0.65mを測り、平面形は梢円形で、断面形はほぼ垂直に立ち上がり、確認面付近では緩やかに開く。 **重複** 2号溝跡と重複するが、本造構のほうが新しい。 **時期** 出土遺物が無いが、覆土の堆積状況などから中世以降と考えられる。

1号落ち込み (Fig.30、PL.8)

位置 X198・199、Y212グリッド **形状等** 南側は搅乱により失われているが、方形を呈すると思われ、最大幅3.2mを測る。 **出土遺物** 少量の土師器片や須恵器片が出土した。 **時期** 出土遺物が少ないが、中世以降の遺物が含まれていない事と覆土の堆積状況から中世以前の可能性が考えられる。

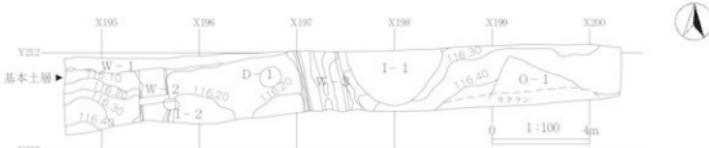
Tab.11 元總社蒼海遺跡群(102) 出土遺物観察表

番号	出土遺物 層位	器種名	①②③ ④	⑤器高 ⑥底径 ⑦色調 ⑧保存度	器種の特徴・変形・調整技術	登録 番号	備考	
1	W-3 覆土	須恵器 环	①(102) ③60	②24 ③灰白 ④1/3	⑤磨粒 ⑥底部 ⑦褐色 ⑧存度	外面：輪縁整形、低部～口縁部横ナギ、底部静止糸切り。 内面：輪縁整形、横ナギ		
2	W-3 覆土	須恵器 环	①97 ③50	②27 ③灰白 ④完形	⑤磨粒 ⑥底部～口縫部 ⑦褐色 ⑧存度	外面：輪縁整形、低部～口縫部横ナギ、底部回転糸切り。 内面：輪縁整形、横ナギ、内外面に縁が付着。	1	
3	W-3 覆土 高台陶	須恵器 环	①~ ③66	②(28) ③明赤褐 ④底部～一部 ⑤磨粒 ⑥底部	⑦褐色 ⑧黄褐色 ⑨底部のみ	外面：輪縁整形、高台貼付。 内面：輪縁整形、横ナギ、内面は黒色処理。	4	
4	W-3 覆土 高台陶	須恵器 环	①~ ③~	②(48) ③~	④中粒 ⑤磨粒 ⑥浅黄褐 ⑦褐色のみ	外面：輪縁整形、高台貼付。 内面：輪縁整形、横ナギ。	3	
5	O-1 覆土 高台陶	須恵器 环	①~ ③~	②(20) ③~	④磨粒 ⑤磨粒 ⑥灰白 ⑦底部のみ	外面：輪縁整形、高台貼付。 内面：輪縁整形、横ナギ。		
6	調査区 瓦 手瓦		厚さ17	④磨粒 ⑤磨粒 ⑥にぶい黄褐 ⑦端部	⑧	背面：布目压痕、凸面：調叩きヶ。質面：ヘラナギ。		

(注) ①層位は、「東直」床面より10cm以内の層位から検出。「覆土」：床面より10cmを超える層位から出土の2段階に分けた。竈内の検出については、「竈内」と記載した。
②③④⑤：器類の単位1cmである。現存値を〔 〕、復元値を〔 〕で示した。

⑥動土は、粗粒(0mm以下)、中粒(10～19mm以下)、粗粒(20mm以上)とし、特徴的な植物が入る場合に植物名等を記載した。

⑦焼成は、土師器、須恵器については、焼成場、還元焰の別を示した。



元總社蒼海遺跡群（102）全体図

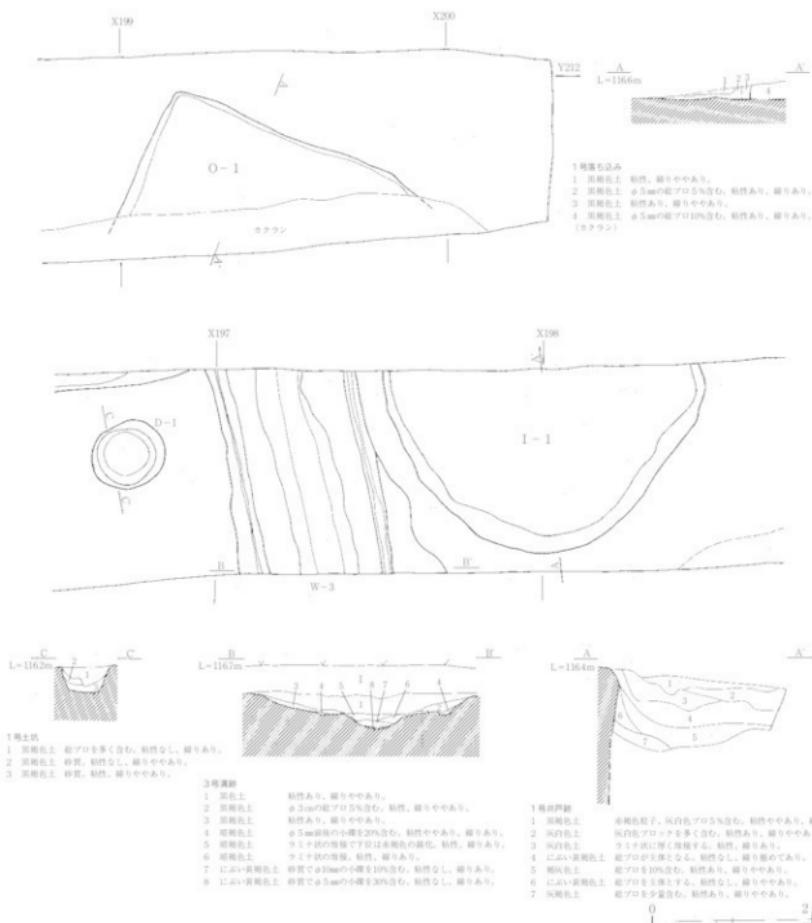


Fig.30 元總社蒼海遺跡群（102）全体図、溝跡、土坑、戸井跡、落ち込み

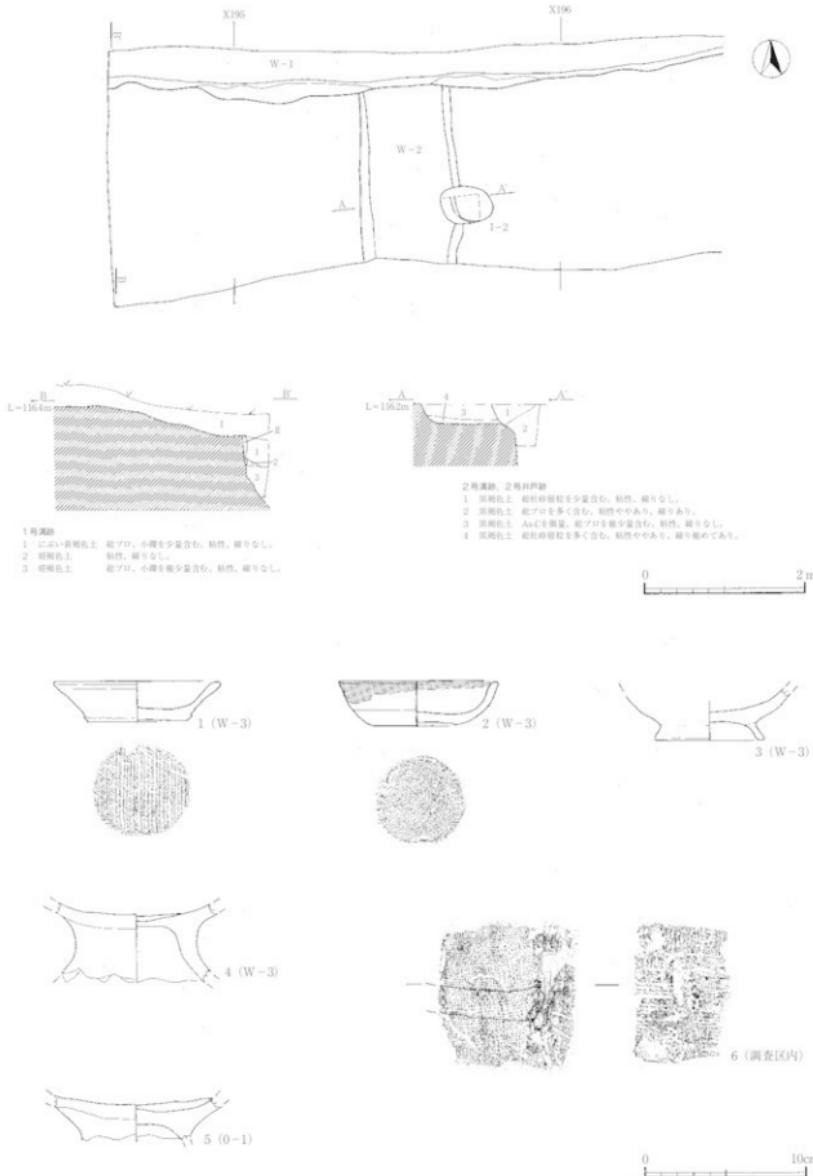


Fig.31 元経社蒼海遺跡群 (102) 溝跡、井戸跡、出土遺物

VI まとめ

1 元総社蒼海遺跡群（91）

(1) 小金銅仏と鋳型

3号住居跡より出土した小金銅仏はその姿形から地蔵菩薩立像とみられる。片手に乗るほどの小金銅仏は県内では奈良、平安期のものとして18例の出土が知られている^(註1)。出土場所や出土状況は、集落、古墳石室内、山岳信仰の場所、あるいは耕作による偶然の発見など多岐にわたる。地蔵菩薩立像は県内では山王庵寺や巖山遺跡、有馬条里Ⅱ遺跡、旧吉井町片山で出土している。いずれも鋳型による一铸、前後合わせ型で、光背を支持する柄が突出する。なお、金の塗布は有馬条里Ⅱ遺跡、巖山遺跡で確認されている。本遺跡から出土した小金銅仏に残された金の成分分析を行なったところ、金の含有量は僅か10.7%で、銅が多くを占める結果となった。本来、銅を主成分として錫を含む青銅は光沢のある金属で、錫の含有率により赤銅色、黄金色、白銀色と色味が変化する。今回の分析で、小金銅仏の塗膜には、銅や錫、鉛、金が含有されていることが判明し、組成に金を加えることで、黄金色が安定する工夫が成されていることが判明した。一般に銅90%程度、錫10%程度の合金は砲金と言われ、強靭性に富む。成分分析により、小金銅仏の塗膜には加工が容易な美術青銅が用いられていることから、金を混ぜた合金を叩いて伸ばして、箔を作り、仏像に貼り付けたものであることも判明した。小形で持ち運びが容易な小金銅仏が東国のかつての集落から出土することは、仏教信仰が大きな広がりをもって、幅広い階層にまで浸透していたことを示している。また、技術的な面からは、少量の金を混ぜることで、その輝きが長きに亘って続くことを知りえていたことになる。

Tab.12 県内出土の小金銅仏（奈良・平安期）

番号	遺跡名・出土地	金銅仏名	總 高	像 高	重 さ	出土場所・備考
1	元総社蒼海遺跡群（91）	地蔵菩薩立像	6.50cm	5.20cm	58.0 g	住居跡
2	山王庵寺	地蔵菩薩立像	7.20cm	6.18cm	112.6 g	推定南西回廊のやや南付近
3	巖山遺跡	地蔵菩薩立像	7.22cm	5.54cm		寺院跡の平坦面
4	旧吉井町片山	地蔵菩薩立像	5.59cm	4.47cm		所有者の細内・18と共に発見
5	有馬条里Ⅱ遺跡	地蔵菩薩立像	6.47cm	5.50cm		土坑
6	有馬条里Ⅱ遺跡	天王立像	5.92cm	4.45cm		大溝
7	有馬条里遺跡	天部立像	5.90cm	5.30cm	43.1 g	遺構確認中
8	宇通遺跡	女神坐像	4.59cm	2.96cm		礎石建物範囲内・経軸が共伴
9	旧宮城村 白草庵寺	宝冠阿弥陀如来坐像	7.08cm	4.28cm		白草庵寺跡の範囲内
10	上野福寺・尼寺中間遺跡	男神立像	5.28cm	4.81cm	31.6 g	住居跡に近接する地点
11	八幡塚古墳(保渡田古墳群)	男神立像	8.30cm	7.61cm		八幡塚古墳
12	薬師塚古墳(保渡田古墳群)	菩薩半跏像	5.18cm	3.81cm		伝薬師塚古墳
13	刺崎福塚遺跡	男神立像	7.10cm	6.6cm	65.4 g	住居跡・14と同一住居
14	刺崎福荷塚遺跡	男神立像	6.20cm	5.6cm	58.2 g	住居跡・13と同一住居
15	宿大類字村西遺跡	天王立像	5.31cm			大類城址
16	旧吉井町 神保古墳群	薬師如來立像	4.74cm	3.80cm		石室内
17	旧吉井町 爭学科神社の北	天部立像	5.98cm	4.82cm		伝争学科神社の北
18	旧吉井町片山	如來立像	5.95cm	4.82cm		所有者の細内・4と共に発見
19	間根細ヶ浜遺跡	觀音菩薩立像	6.1cm	5.1cm		住居跡・三尊の左脇侍

7号住居跡より出土した鋳型は、円柱状あるいは筒状の器物を意図しているようである。型の一方にある2条の直線は別の鋳型を合わせる際の目安であった可能性も考えられる。加熱や被熱の痕跡は顯著に残っていないが、今まで個体として残っていることは、実際使用され、熱が土に及び化学変化が起きた結果として残存した可能性が考えられる。鋳型の外側は整形の痕跡はまったく無いため、ややもすると単なる土塊と見間違われる恐れがある。今後の調査でも出土することが期待されるため、注意を払う必要がある。

2 元総社蒼海遺跡群（95）

(1) 挖立柱建物跡と溝跡

調査の結果、古代に属する掘立柱建物跡2棟、大溝3条などが確認された。ここでは、掘立柱建物跡について柱掘り方の特徴を把握し、建物の性格について検討したい。

掘立柱建物跡は2棟確認されており、一部の柱掘り方が重複していることから前後関係が判明した。先行する1号掘立柱建物跡は桁行3間×梁行2間、桁行総長5.0m、梁行総長5.0mを測る正方形の建物である。確認できた柱掘り方は側柱と東柱であり、廂は付かない。主軸方向は座標北から19°西へ傾く。側柱、東柱は長方形の柱掘り方であるが、平面規模は側柱の方が大きい。柱間寸法は桁行で最小1.3m、最大2.3mと一定しない。一方、梁行は2.4m、2.5mと近似する。屋内にある東柱（P8）の平面規模は小さいが、柱掘り方の深さは側柱よりも約15cm浅い程度である。東柱が深く掘られている点を考慮すると、ある程度の重い荷重を支える事も可能な床束建物と考えたい。

後発する2号掘立柱建物跡は桁行4間×梁行3間、桁行総長7.7m、梁行総長4.8mを測る長方形の建物である。柱掘り方は側柱と東柱が確認でき、廂は付かない。主軸方向は座標北から13°西へ傾く。側柱は長方形や正方形であり、一部の柱掘り方は布掘状の掘り方で連結する。東柱は円形の柱掘り方である。柱間寸法は柱痕跡や柱当たり位置から桁行で最小1.8m、最大2.1mとなるが、標準偏差は $1.93m \pm 0.17$ 、とばらつきの程度は少ない。梁行の柱間寸法は擾乱により失われている箇所もあるが、1.6m等間に復元できる。東柱の平面規模は円形であり、柱掘り方の深さは浅く、重い荷重を支えることに適していない床束建物と考えたい。

この建物に関連する遺構として溝跡に注目しない。2号溝跡と3号溝跡は同一箇所で重複しており、掘立柱建物跡の北に位置する。溝跡の方位を注視すると、2号溝跡は13°西へ傾く、3号溝跡は15°西へ傾く。2号溝跡と2号掘立柱建物跡は方位が同一であるため、同時並存していた可能性が考えられる。なお、2号溝跡と2号掘立柱建物跡は8.4mの距離を測る。また、2号溝跡は3号溝跡の再掘削とも考えられるため、先行する3号溝跡は方位は異なるが、同じく先行して建てられた1号掘立柱建物跡との有機的な関連も考えられる。この他に、調査区の東側で南北方向に向かう1号溝跡が調査された。1号溝跡は4°西へ傾くが、ほぼ正方位を意識した走向となっている。住居跡との重複から10世紀以前の開削であると考えられるため、国府期の溝と判断して差し支えないだろうが、2、3号溝跡と方位が異なる点が注目される。方位の違いは単に時期差であるのか地形に由来するのか詳らかにできないが、近接する元総社蒼海遺跡群（58）で検出された1号溝跡は15°西へ傾く^[註2]。本遺跡で調査した2号溝跡と同じ方位であり、平面規模も似通っているため同時並存の可能性を指摘したい。一方、ほぼ正方位の走向となる溝跡はこれまでの調査で、多く確認されている。

元総社蒼海遺跡群（95）で調査された掘立柱建物跡の性格は現段階では不明であるが、発掘調査が行なわれ、分析が進んでいる三軒屋遺跡（伊勢崎市）や天真七堂遺跡（太田市）、多胡碑周辺遺跡（高崎市）などの調査事例、あるいは「上野国交替実録帳」の記載から掘立柱建物跡が倉庫であるならば、整然と列を成した掘立柱建物群となることが知られている。今回調査された2、3号溝跡と掘立柱建物跡が同時並存している可能性があり、溝で囲まれた範囲を考慮すると1号・2号掘立柱建物跡の西方あるいは東、南側に建物造営が限定されるが、東、南側では掘立柱建物跡の痕跡を見出すことはできない。近接する箇所の調査が進み、状況が明らかになれば、倉であるのか居宅であるのか、再検討が可能となる。

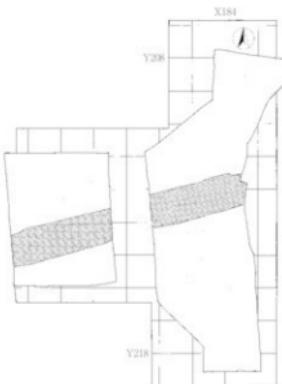


Fig. 32 元総社蒼海遺跡群（58）1号溝跡
(S=1/600)

周辺の調査では元總社小学校校庭から検出された掘立柱建物跡、元總社蒼海遺跡群（9）で確認された1号掘立柱建物跡が知られている^(注3)。元總社小校庭遺跡の掘立柱建物跡は、桁行4間×梁行2間、桁行5間×梁行2間の東西建物で、磁北から7°東へ傾く。柱穴規模や平面形状から国府に関連する建物と考え

られている。元總社蒼海遺跡群（9）で確認された1号掘立柱建物跡は桁行10間×梁行3間、桁行総長28.2m、梁行総長5.9mを測る大型の建物跡であり、座標北から28°西へ傾く。柱掘り方の埋土から7世紀中ごろの土師器坏が出土し、国府に先行する建物跡とされている。これまで調査された建物跡と本遺跡で調査された掘立柱建物跡はいずれも東西棟である。建物方位から、国府に先行する元總社蒼海遺跡群（9）の掘立柱建物は座標北からの振れが大きく、元總社小校庭遺跡の掘立柱建物跡は正方位に近くなる。これまで本遺跡周辺で調査された掘立柱建物跡は少ないため、建物方位から造営の変遷を明らかにすることは難しいが、一般的には斜め方位から正方位への変遷が迫ると考えられている。今後、周辺の調査が進み、事例の増加を待って改めて検討したい。

（2）戸跡出土の土器（Fig.28・29）

元總社蒼海遺跡群（95）9号戸跡から多量の土器が出土した。出土状態から同時性が高く、遺物の大半は坏や碗で占められている。出土した坏、碗について器形上の特徴や調整方法に主眼を置いて分類を行なった。

坏I類：底部は右回転糸切りであり、底部と体部の境が明瞭である。体部から口縁までは外反気味に傾き、口唇部は調整により僅かに反る。口唇部は整形により丸みを帯びるもの、口唇直下に浅い凹線が巡るものがある。（44～53）

坏II類：底部は右回転糸切りであり、底部と体部の境は不明瞭である。体部から口縁までは外反気味に傾くが、口唇部はやや直立気味に調整されている。（54～60）

坏III類：底部は左回転糸切りであり、底部は厚く大きい。体部から口縁部は短く立ち上がり、口径は広い。坏I類、坏II類に比べて、器高は低く、器壁は厚い。（61～65）

坏I類としたなかに（52）底部が静止糸切りであるもの、（53）のように比較的大きな坏もあり、また、坏II類のなかには（60）のように口唇部が反るものもあるが、確認した中ではそれぞれ1点のみである。



Fig.34 元總社蒼海遺跡群（95）9号戸跡 坏分類

椀 I 類：底部は右回転糸切りであり、底部と体部の境は明瞭である。一部の椀については整形により体部下半が浅く窪む。体部下半から口縁部にかけて若干丸みを帯びて立ち上がる。胎土は細粒で緻密である。(67~69)

椀 II 類：底部は右回転糸切りであり、底部と体部の境は不明瞭である。底部の器壁は厚い。体部から口縁部にかけて外反しながら直線状に立ち上がる。口唇部のみナデ調整が施され、内面には調整痕が残る。(70~72)

椀 III 類：底部は左回転糸切りであり、底部は厚く大きい。体部は外反気味に立ち上がり輻輳調整の痕跡が明瞭に残る。椀 I 類、椀 II 類に比べて器壁は厚く、底径は大きい傾向にある。(73~75)



Fig. 35 元總社蒼海遺跡群 (95) 9号井戸跡 楓分類

さらに、壺、椀それぞれについて感覚的ではあるが胎土にも違いが見受けられた。I 類としたものは緻密であり、一見すると堅くしまっている印象を持つ。2 類としたものは砂粒と白色鉱物を含み粗い印象を持つ。3 類としたものの胎土は細粒であるが、脆く、粉っぽい。これらの相違は焼成方法や焼成温度の違いによるとも考えられるが、分類ごとに胎土が異なる点に重きを置きたい。

I 類、II 類、III 類の器形は壺、椀と異なるが、製作方法や胎土などは相関関係にある。なお、高台椀 (76) は II 類の胎土であり、内面に輻輳調整の痕跡が見受けられるため、椀 II 類と同じである。

それぞれの分類内でさらに細分も可能であるが、大別すると 3 類が考えられる。器形上の特徴や調整方法の差は集団によるものか、個人によるものか判断することはできないが、9 号井戸跡の出土遺物にかぎると、少なくとも 3 つの系統が存在していたことになる。

上記の分類を基に可能な限り土器を仕分けて各々の重さを測ってみると、壺 I 類が 6.94kg、壺 II 類が 2.78kg、壺 III 類が 6.62kg、椀 I 類が 4.43kg、椀 II 類が 3.86kg、椀 III 類が 7.31kgとなる。さらに、それぞれの完形品から 1 個体あたりの平均的な重さを抽出すると、壺 I 類が 132g、壺 II 類が 70g、壺 III 類が 82g、椀 I 類が 200g、椀 II 類が 258g、椀 III 類が 240gとなる。

各々の出土量から完形品の重さを割り返すと、壺 I 類が 53 個、壺 II 類が 40 個、壺 III 類が 80 個、椀 I 類が 22 個、椀 II 類が 15 個、椀 III 類 30 個が出土したこととなる。壺の総数 173 個体、椀の総数 67 個体になるが、未分類が 4.4kg あるため個体数はさらに増える。Fig.22 に見られるように一括性は高いと考えられ、国府城での壺、椀の使用比率や土器納入のルートなどを明らかにする可能性を有していると思われる。

今回の分類は一つの井戸から出土した土器を対象としたものであるため、既調査の元總社蒼海遺跡群出土の土器にも対応するのか否か検討できなかった。今後、機会を捉えて元總社蒼海遺跡群における分布範囲を把握したい。

紙面の都合で参考文献は省略させていただいた。ご寛恕いただければ幸いである。

註

- (1) 埼玉県立博物館『甦る光彩』 1993
前橋市教育委員会「山王魔寺 - 平成 22 年度調査報告 -」 2012
(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団「関根細ヶ沢遺跡」 2015
- (2) 前橋市教育委員会「元總社蒼海遺跡群 (57)(58)(59)」 2014
- (3) 前橋市埋蔵文化財発掘調査団「元總社蒼海遺跡群 (9)(10)」 2007

Tab. 13 元總社蒼海遺跡群 (95) 9号井戸跡出土量

器形	I 類	II 類	III 類
壺	出土量 6940g	2780g	6620g
	平均値 132g	70g	82g
椀	出土量 4430g	3860g	7310g
	平均値 200g	258g	240g
未分類			4400g

付 編

元總社蒼海遺跡群（91）より出土した小金銅仏について、仏像本体の元素構成と組成比率、仏像の正面と側面を彩る金の元素構成と組成比率を明らかにすること、さらに、金については鍍金であるのか金箔であるのかを明らかにする目的で科学分析を委託した。その結果については以下のとおりである。

付編1 元總社蒼海遺跡群（91）出土小金銅仏の化学分析

株式会社 第四紀 地質研究所

1 実験条件

分析はエネルギー分散型蛍光X線分析装置（日本電子製JSX-3200）で行なった。

この分析装置は標準試料を必要としないファンデメンタルバラメータ法（FP法）による自動定量計算システムが採用されており、6°C～92Uまでの元素分析ができ、ハイパワーX線源（最大30kV、4mA）の採用で微量試料～最大290mmφ×80mmHまでの大型試料の測定が可能である。小形試料では16試料自動交換機構により連続して分析できる。分析はバルクFP法でおこなった。FP法とは試料を構成する全元素の種類と濃度、X線源のスペクトル分布、装置の光学系、各元素の質量吸収係数など装置定数や物性値を用いて、試料から発生する各元素の理論強度を計算する方法である。

実験条件はバルクFP法（スタンダードレス方式）、分析雰囲気＝真空、X線管ターゲット素材＝Rh、加速電圧＝30kV、管電流＝自動制御、分析時間＝200秒（有効分析時間）である。

分析対象元素はTi, Fe, Cu, Zn, Zr, Ag, Sn, Au, Hg, Pbの10元素、分析値は含水量＝0と仮定し、元素の重量%を100%にノーマライズし、表示した。

2 分析結果

第1表 化学分析表

試料名	Ti	Fe	Cu	Zn	Zr	Ag	Sn	Au	Hg	Pb	Total	備考
OUM-1	0.1163	21358	618512	0.0000	0.0215	0.0000	166715	0.0000	0.0000	162038	100.0001	金銅仏・本体
OUM-2	0.0168	09396	591165	0.0000	0.0000	0.0000	96682	10.7800	0.0000	194789	100.0000	金銅仏・鍍金・百足
OUM-3	0.0966	11734	559642	0.0000	0.0000	0.0000	77827	12.3562	0.0000	226279	100.0000	金銅仏・鍍金・脚部
											0.0000	
	融点温度	融点温度	融点温度	融点温度	融点温度	融点温度	融点温度	融点温度	融点温度	融点温度	融点温度	
摂氏℃	1668	1538	1084	419	1855	961	231	1064	-36	327		

第1表化学分析表に示すように金銅仏の素材（素地）と素材に塗布されている金属箔について各々分析した。

- 1) 金銅仏の素地はCu（銅）が64.8%、Sn（錫）が16.6%、Pb（鉛）が16.2%で青銅製である。
- 2) 金銅仏の塗膜層は金属箔を貼り付けたもので、その化学組成はCu（銅）が59.1%、Pb（鉛）が19.4%、Au（金）が10.7%、Sn（錫）が9.6%の組成を示すもので、組成的にみて美術青銅に金を混ぜたものと考えられる。美術青銅とはSn（錫）が10%以下のもので柔らかく加工が容易なものである。この美術青銅に金を加えることによって金色の色合いが強くなると考えられる。

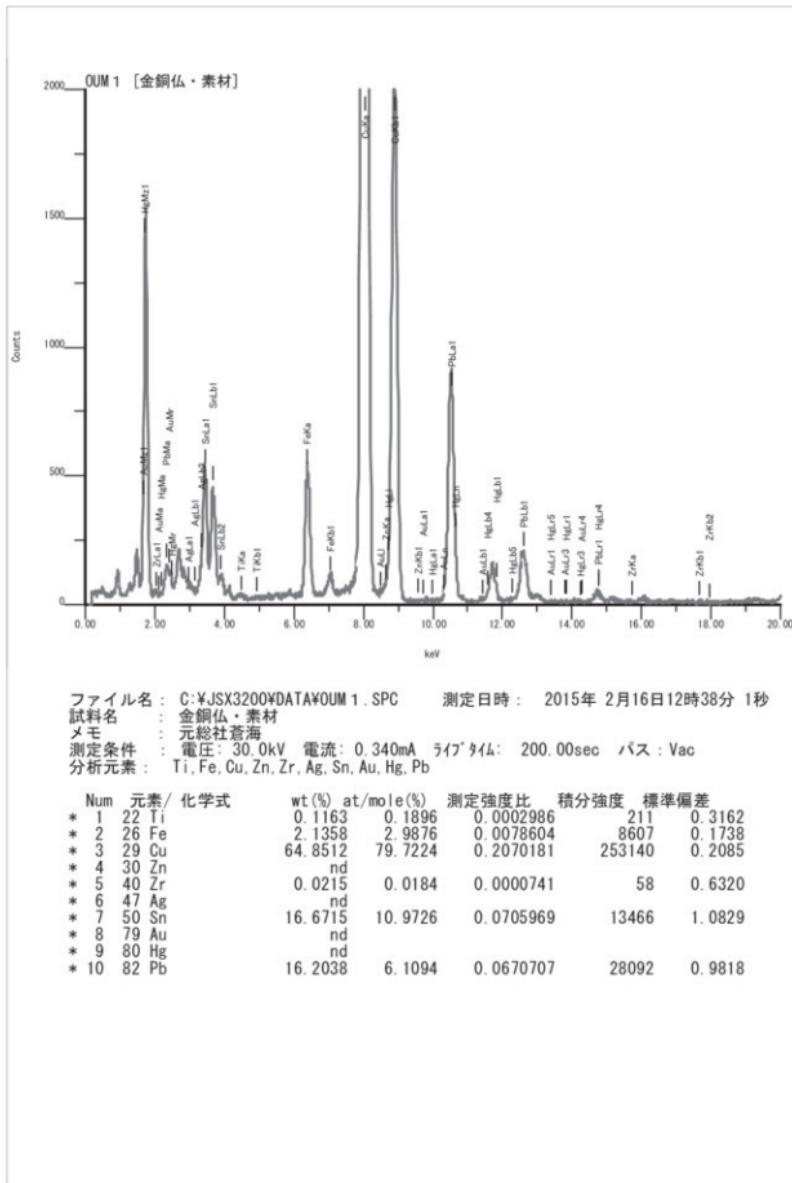


Fig. 36 元總社蒼海遺跡群 (91) 小金銅仏 素材分析

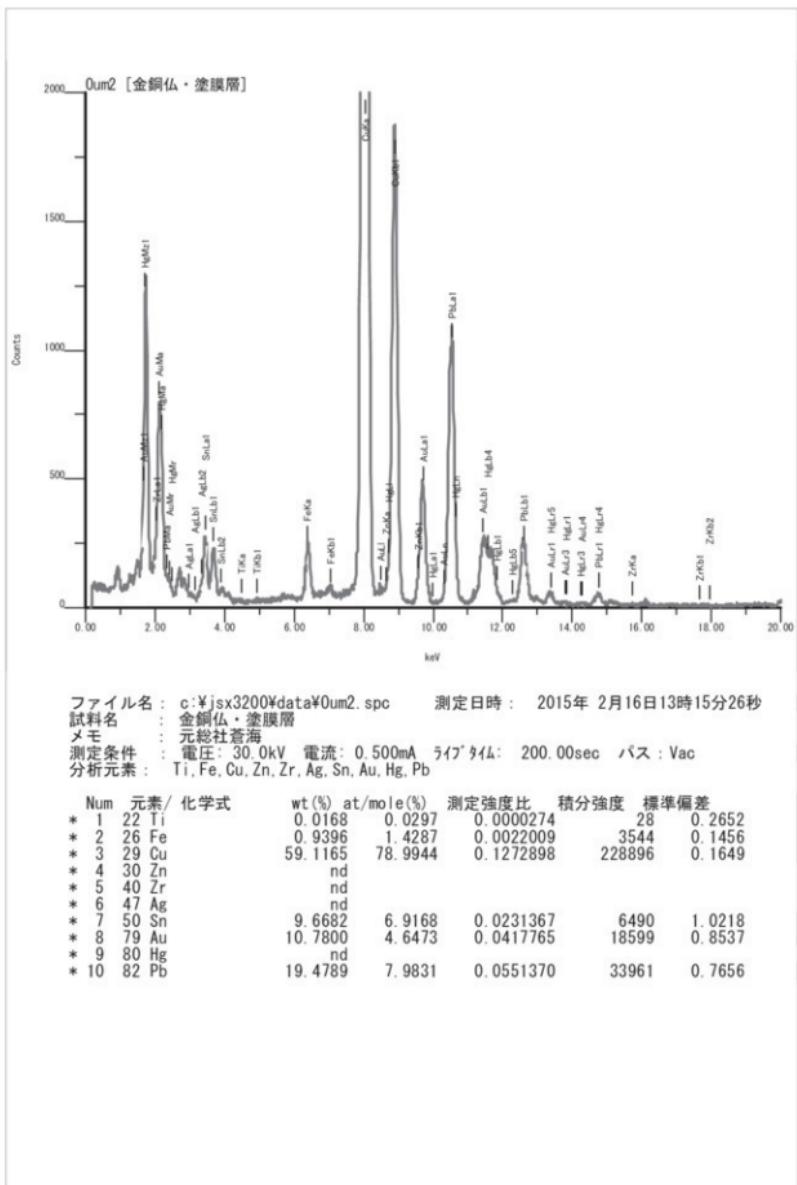


Fig. 37 元総社蒼海道跡群 (91) 小金銅仏・塗膜分析①

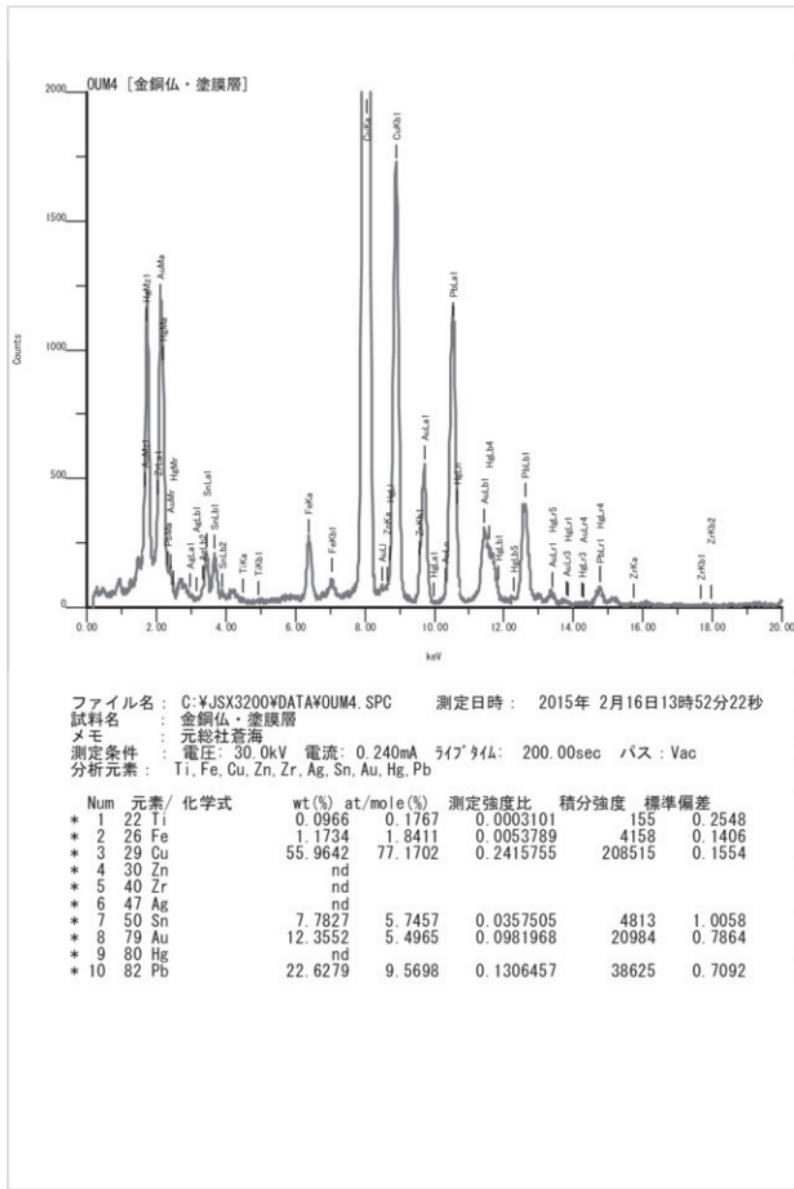


Fig. 38 元総社蒼海跡群 (91) 小金銅仏 塗膜分析(②)

元総社蒼海遺跡群（95）の表土掘削時に出土した高台碗は、土器洗浄を行なっている最中に、内面を中心に夥しい炭化物の付着が確認された。炭化物は口縁から外面にかけて付着している箇所も一部認められ、あたかも吹きこぼれたような状態が看取された。遺構外からの出土ではあるが、炭化物の残存は良好であるため、炭化物の同定や使用状況の復元を目的に自然科学分析を委託したところ以下のとおりの結果を得た。

付編2. 元総社蒼海遺跡群（95）出土炭化物の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

元総社蒼海遺跡群（95）では、発掘調査の結果、古墳時代から平安時代の堅穴住居跡や掘立柱建物跡、古代の大溝などが確認されている。なお、本遺跡の発掘調査では上記した各時期の遺物が出土しており、これらの遺物の中には炭化物が付着する資料も確認されている。

本報告では、上記した炭化物が付着する資料について、炭化物の由来や性状を明らかとすることを目的として、顕微鏡観察および炭素・窒素同位体比測定を実施した。

I 顕微鏡観察

1. 試料

試料は、元総社蒼海遺跡群（95）の遺構外より出土した古代の土師器环であり、口縁部および土師器内面に炭化物の付着が認められる（図版1）。本分析では、土師器内面に付着する炭化物の由来、とくに炭化種実等の大型植物遺体の痕跡の確認および炭化物の特徴の観察を目的として、顕微鏡観察を実施した。

2. 分析方法

観察は、肉眼および実体顕微鏡などにより土師器环内面に付着する炭化物の全面を概査した後、マイクロスコープ（キーエンス社製：VHX-1000）により精査を行った。また、以上の観察により認められた特徴な箇所については、写真撮影も行った。

3. 結果および考察

土師器环内面に付着する炭化物の観察の結果、状態が異なる複数の特徴が認められた。このうち、後述する特徴的な箇所を選択し、写真撮影を行った箇所を図版1に、顕微鏡写真を図版2,3に示した。

炭化物は、环内面のおよそ3/4程度に認められ、厚く付着している箇所や薄く付着する箇所が観察された。炭化物には収縮に伴うひび（亀裂）や不定形の気泡の透き間、気泡が割れた凹部などが認められ、これらの間隙には灰褐色を呈する土砂（シルト→粘土）が充填・固着する。なお、いずれの箇所も炭化した不定形の気泡（1～0.5mm程度）に覆われている。以下に、付着炭化物の観察結果から選択した箇所の特徴を述べる。

（1）植物組織片（図版2-1,2）

1mm以下の植物組織片は幾つかの箇所に認められたが、5mm程度の大きな組織片は、1、2（図版1）に観察された。これらは、繊維状の細胞のみからなり、薄い（おそらく0.5mm未満）ことを特徴とする。部分的に気泡の付着が認められるなど、保存状態は悪い。なお、植物組織片は、維管束、放射組織および導管などの組織が確認できないため、種類の同定には至らない。

（2）光沢部分（図版2-3）

光沢部分は、土師器环内面に点々と観察される。光沢がある部分は気泡が割れておらず、表面が平滑である。炭化度（炭素の割合）が高いほど金属光沢のような反射が強くなる（グラファイトの一部の電子が自由電子のよ

うに振る舞う）ことから、強い火熱に曝されたことが窺える。3（図版1）では表面が平滑な気泡が特に集中し、広範囲で光沢を示す。他の部分は隙間に土砂が充填するため、光沢を有する気泡の連続性が不明瞭であり、目視においては光沢が確認し難い状況にある。

（3）筋状構造（図版3-4）

棒状を呈する筋が連続するように見える箇所であり、拡大してみると炭化物による筋状の高まりが約2mm間隔で存在し、これらの間に土砂が充填した筋状の溝が観察される。火熱を受けた後に何らかの条件によって筋状の溝ができ、そこに土砂が充填したものと考えられる。

（4）付着物肥厚部（図版3-5）・薄部（図版3-6）

付着した炭化物の厚い箇所や薄い箇所のいずれも、気泡に覆われている状況が観察される。炭化物の厚い箇所は、収縮によるひび（亀裂）や気泡の割れなどが多く、その隙間に土砂が充填するから、全体として茶色を呈する。一方の炭化物が薄い箇所は、収縮によるひび（亀裂）が少ないとから、土壤の充填が少なく、炭化物本来の色（光沢のある黒色）が明瞭となる傾向にある。

以上のように、土師器内面に付着した炭化物は、そのほとんどが気泡からなり、僅かに植物組織片が認められた程度であったため、炭化物の由来については特定に至らなかった。なお、炭化した気泡が主となる状況から、例えば粥のような水分の多い有機物を含む物質が強い火熱を受け、沸騰した際の水蒸気により気泡を形成しながら炭化した可能性が考えられる。

II 炭素・窒素同位体比測定

1. 試料

試料は、土師器壺の内面に付着する炭化物のうち、I章の結果から不純物が少なく状態が良いと推定された光沢を帯びる箇所より採取した炭化物（図版1-3周辺）である。

2. 分析方法

試料は、付着する土砂などの後代の影響を除去するために、脱炭酸処理を行う。前処理後の試料をスズコンデンナに封入し、超高純度酸素と共に分析装置の燃焼炉に落とし、スズの酸化熱を利用して試料を燃焼・ガス化させ、酸化触媒で完全酸化させる。その後、カラムを用いて不純物の除去と炭素・窒素の分離を行ない、炭素と窒素の元素比を測定する。その後、質量分析計に導入し、安定同位体比を測定する。使用した分析機器はサーモフィッシュ・サイエンティフィック社製の元素分析計（Flash EA1112）と安定同位体比質量分析計（Delta V Advantage）である。

3. 結果および考察

土師器壺の内面に付着する炭化物の分析の結果、 $\delta^{13}\text{C}$ -VPDBが-27.5‰、 $\delta^{15}\text{N}$ -Airが7.05‰、全窒素（Total-C）が0.381%、全炭素（Total-N）が60.9%であり、全炭素および全窒素より求められるC/N比は159.8である。

これらの結果を、炭素・窒素同位体比（図1）と照合すると、本試料はおおむねC3植物の範囲にプロットされる。一方、炭素同位体比とC/N比（図2）においては、本試料はC/N比が非常に高く、図示した範囲を大きく超えた位置にプロットされる。なお、図2に示される堅果類などは、デンプンなどを主とし、窒素を含んでいないことから、図2においてはC/N比が高い場所に位置する。

以上の状況から、今回の分析に供した土師器壺の内面に付着した炭化物は、炭素・窒素同位体比（図1）よりC3植物由来の可能性が高いと判断される。一方、炭素同位体比とC/N比（図2）においては、C/N比の値が極めて高いことから、デンプンなどの糖質由来の可能性があるものの、既存の資料との対照には至らない。

なお、炭化物の付着が認められた壺は、一般的には食器としての用途が推定されている。のことから、炭化

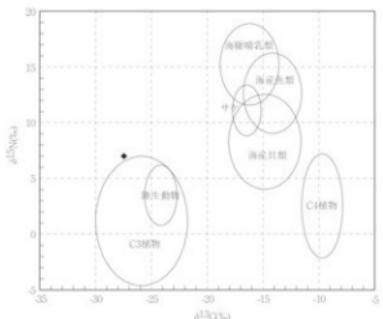


図1. 土師器壺(26A190)付着炭化物の炭素・窒素同位体比
(Yoshida *et al.* 2013などを引用・加筆)

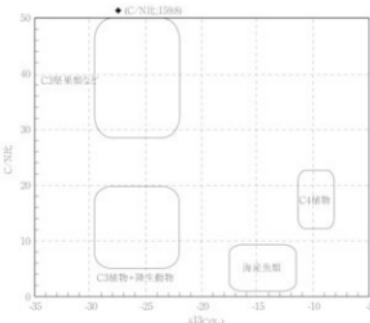


図2. 土師器壺(26A190)付着炭化物の炭素同位体比とC/N比
(Yoshida *et al.* 2013などを引用・加筆)

物の由来としては調理・加工後の物質であることも想定される。上述したデンプンを主とする植物質食料については、イネやコムギなどの穀類、アズキやササゲなどのマメ類、さらに上述した堅果類や植物体を精製することにより得られるデンプンなどが挙げられる。今後、このような植物質食料の調理・加工後における炭化物の調査事例の蓄積による再検証が期待される。

<引用文献>

Yoshida Kunio·Kunikida Dai·Miyazaki Yumiko·Nishida Yasutami·Miya Toru·Matuzaki Hiroyuki 2013.Dating and stable isotope analysis of charred residues on the incipient Jomon Pottery (Japan).Radio carbon,55,1322-1333.

図版1 炭化物付着状況および写真観察部位



[写真観察部位]

1. 植物組織片 2. 植物組織片 3. 光沢部分 4. 筋状構造 5. 付着物肥厚部 6. 付着物薄部

Fig. 39 元総社舊海遺跡群（95）高台輪 炭化物付着状況

図版2 跡微鏡写真(1)

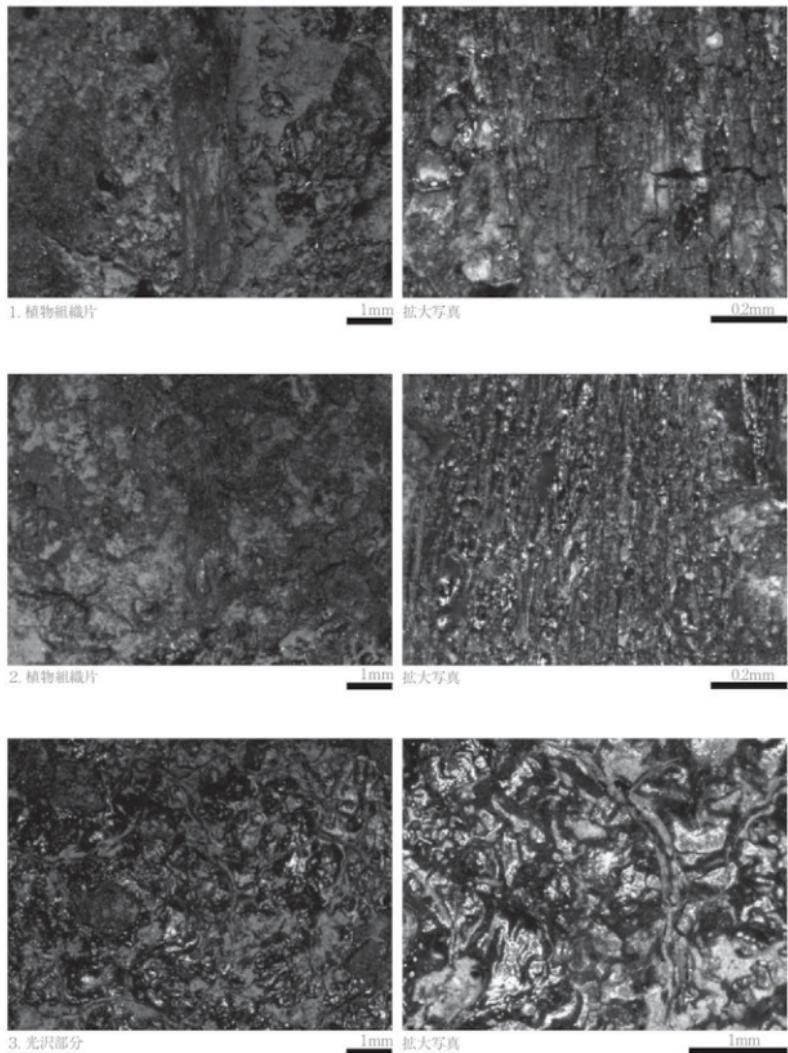


Fig. 40 元總社蒼海遺跡群 (95) 炭化物顕微鏡写真①

図版3 跟微鏡写真(2)

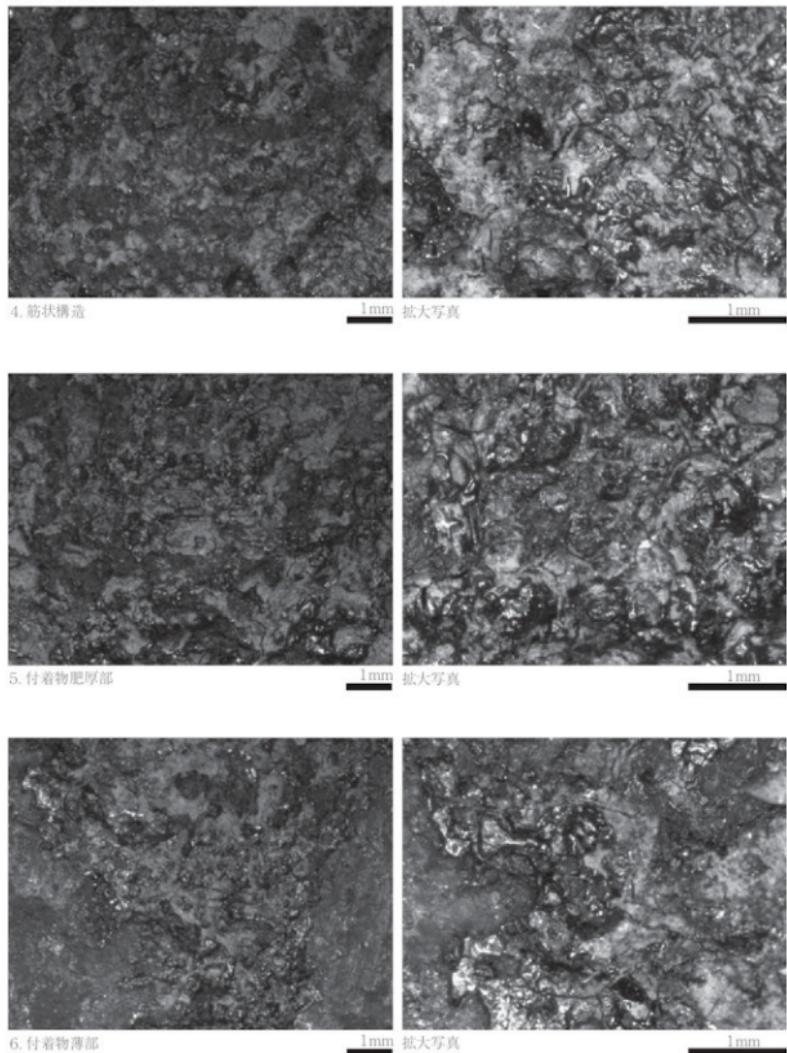
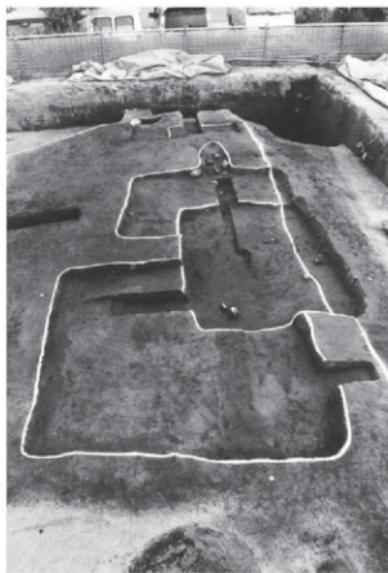


Fig. 41 元總社蒼海遺跡群 (95) 炭化物跟微鏡写真(2)

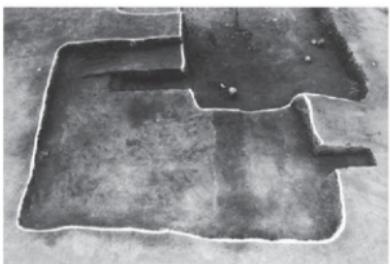
図 版



(91) 調査区全景（西から）



(91) 1～3号住居跡全景（西から）



(91) 3号住居跡全景（西から）



(91) 小金銅仏出土状況（南から）



(91) 4号住居跡全景（西から）



(91) 4号住居跡遺（西から）



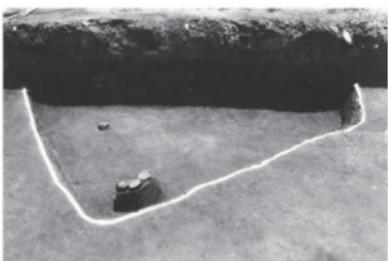
(91) 5号住居跡全景（西から）



(91) 5号住居跡遺（西から）



(91) 7号住居跡全景（西から）



(91) 6号住居跡全景（西から）



(91) 1号土坑全景（西から）



(95) 調査区全景（右が北）



(95) 2号住居跡全景（西から）



(95) 3号住居跡全景（西から）



(95) 6号住居跡全景（北から）



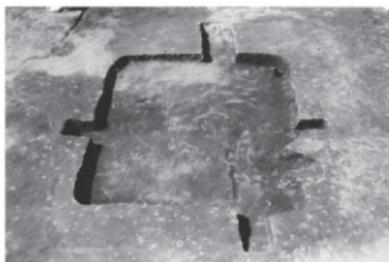
(95) 6号住居跡遺全景（西から）



(95) 7号住居跡全景（北から）



(95) 8号住居跡全景（東から）



(95) 9号住居跡全景（南から）



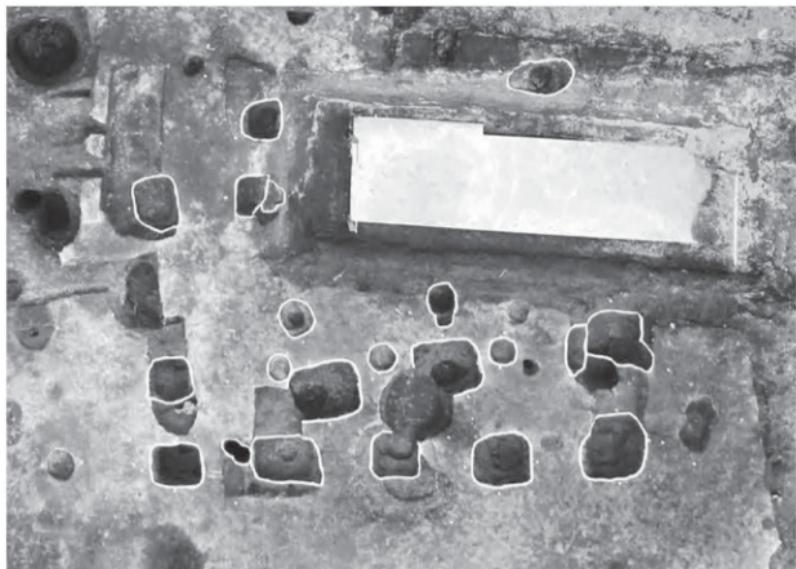
(95) 10号住居跡全景（東から）



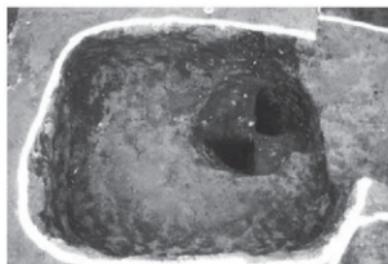
(95) 1号溝跡全景（南から）



(95) 2・3号溝跡全景（東から）



(95) 1・2号掘立柱建物跡全景（上が北）



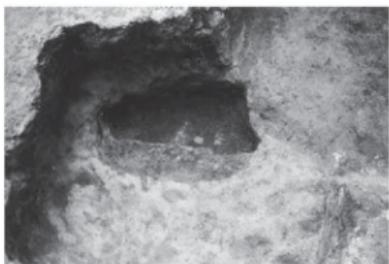
(95) 1号掘立柱建物跡P4全景（北から）



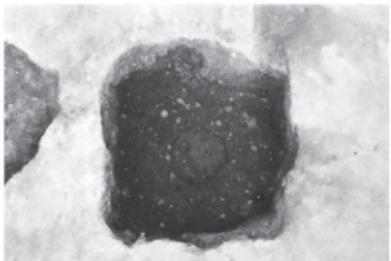
(95) 1号掘立柱建物跡P5全景（北から）



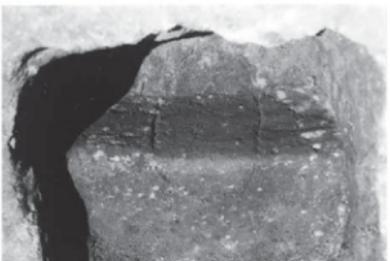
(95) 1号掘立柱建物跡P8全景（東から）



(95) 1号掘立柱建物跡P5全景（北から）



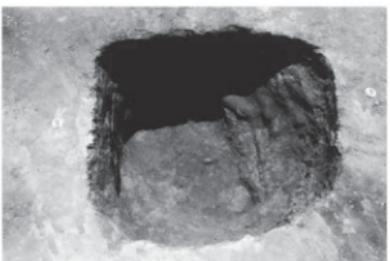
(95) 2号掘立柱建物跡 P10 柱痕跡（西から）



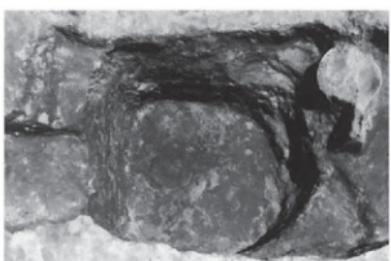
(95) 2号掘立柱建物跡 P10 断面（西から）



(95) 2号掘立柱建物跡 P11 柱痕跡



(95) 2号掘立柱建物跡 P13全景（北から）



(95) 2号掘立柱建物跡 P15全景（西から）



(95) 2号掘立柱建物跡 P6全景



(95) 1・2号掘立柱建物跡 P3重複状況（西から）



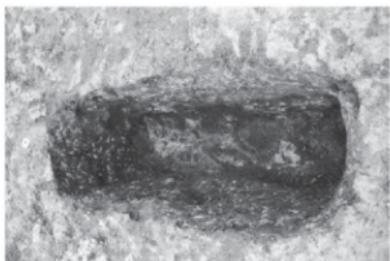
(95) 2号掘立柱建物跡 P16 柱痕跡（西から）



(95) 2号土坑全景（東から）



(95) 3号土坑全景（西から）



(95) P-64全景（西から）



(95) 1号性格不明遺構（西から）



(95) 9号井戸跡遺物出土状況（北から）



(95) 9号井戸跡遺物出土状況（西から）



(95) 2号井戸跡全景（南から）



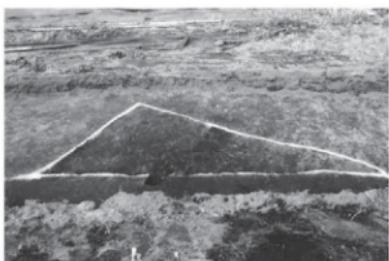
(95) 6号井戸跡全景（南から）



(102) 調査区全景（西から）



(102) 調査区全景（東から）



(102) 1号落込み遺構



(102) 3号溝跡（北から）



(102) 2号溝跡（南から）



(102) 井戸跡セクション（東から）



1 (H-1)



6 (H-4)



7 (H-4)



3 (H-2)



8 (H-4)



9 (H-4)



10 (H-5)



13 (H-5)



12 (H-5)



15 (H-5)



16 (H-5)



17 (H-6)



18 (H-6)



19 (H-6)



21 (H-7)



20 (H-6)



24 (D-1)



23 (H-7)





28 (W-1)



29 (W-1)



30 (W-2)



31 (W-2)



32 (W-2)



36 (P-69)



33 (P-71)



36 (P-69)



37 (X239, Y238)



38 (X233, Y234)



43 (X239, Y238)



63 (I-9)



46 (I-9)



53 (I-9)



57 (I-9)



65 (I-9)



50 (I-9)



52 (I-9)



58 (I-9)



64 (I-9)



元紹社蒼海遺跡群 (95)



67 (I-9)



70 (I-9)



73 (I-9)



68 (I-9)



71 (I-9)



74 (I-9)



69 (I-9)



72 (I-9)



75 (I-9)



66 (I-9)



76 (I-9)



77 (I-9)

元経社蒼海遺跡群 (95)



1 (W-3)



2 (W-3)



3 (W-3)

元経社蒼海遺跡群 (102)

抄 錄

フ リ ガ ナ	モトソウジャオウミイセキグン (91)、(95)、(102)
書 名	元総社蒼海遺跡群 (91)、(95)、(102)
副 書 名	前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻 次	
シ リ ー ズ 名	
シ リ ー ズ 番 号	
編 著 者 名	福田貴之・並木史一
編 集 機 間	前橋市教育委員会
編集機関所在地	〒371-0853 群馬県前橋市元総社町三丁目11番地4
発 行 年 月 日	西暦2015年3月27日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所 在 地	コード		位 置		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東經			
元総社蒼海遺跡群 (91)	前橋市元総社町3114-2	102016	26A188	36° 23' 25"	139° 02' 26"	20140523 / 20140620	219m ²	前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業
元総社蒼海遺跡群 (95)	前橋市元総社町2127-1他	102016	26A190	36° 23' 08"	139° 02' 20"	20140708 / 20140905	942m ²	
元総社蒼海遺跡群 (102)	前橋市元総社町1920	102016	26A198	36° 23' 11"	139° 02' 14"	20150114 / 20150123	58m ²	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
元総社蒼海遺跡群 (91)	集落跡	古墳時代 奈良・平安時代 中世	竪穴住居跡2軒 竪穴住居跡5軒、土坑5基、溝2条、井戸1基、土塙墓1基	土師器、須恵器他 土師器、須恵器、鉄製品 須恵器	平安住居より小金銅仏出土
元総社蒼海遺跡群 (95)	集落跡	古墳時代 奈良・平安時代 中世	竪穴住居跡3軒 竪穴住居跡5軒、掘立柱建物跡2棟、溝3条、井戸1基 井戸8基	土師器、須恵器他 土師器、須恵器、鉄製品 内耳鑿	古代の掘立柱建物跡と溝
元総社蒼海遺跡群 (102)	集落跡	奈良・平安時代 中世以降	落ち込み1、溝1条、溝1、堀1、井戸1基、土坑1	土師器、須恵器	蒼海城の型跡

元総社蒼海遺跡群 (91) (95) (102)

2015年3月23日 印刷
2015年3月27日 発行

編集・発行 前橋市教育委員会 文化財保護課
印 刷 上 每 印 刷 工 業 株 式 会 社

